御霊と花嫁

G・F・テイラー
藤遥　制作

序文

本書で論じる主題は、まさに今この時にあって、きわめて重大なものである。ペンテコステという大きな主題をめぐって、世界はその中心から果てまで揺り動かされている。アメリカで、今の運動から多少なりとも影響を受けていない人はほとんどいない。世の人々は、この運動の多くの面に深い関心を寄せている。ある者はこれに加わって一つになり、ある者は拒み、ある者はあざけっている。だれもが、多かれ少なかれ心を騒がせている。幾千もの人の永遠の運命が、今の運動にどのような態度をとるかにかかっている。それを知っているので、筆者はこの主題を最も重要なものの一つと考えている。

筆者は、この運動の最初の報告を目にしたときから、運動を注意深く見守ってきた。運動に賛成するものも反対するものも、できるかぎりすべての情報を集めようと、とくに努めてきた。それは、この問題をあらゆる面から正しく見ることができるようにするためである。今が危険な時代であることを知っているので、私たちは、真理を知ってそのうちを歩みたいと強く願ってきた。

本書では、この運動にかかわる多くの問題を、聖書の立場から見ようと努めた。とりわけ、御霊のバプテスマを受ける人はみな異言を語るのか、という問いに答えようと心を砕いた。一つの章をまるごと、反対の立場に立つ兄弟たちの異論に答えることに充てている。彼らの立場をゆがめて伝えたと責められないように、その多くをそのままの言葉で引用した。

本書は、多くの祈りのうちに、よく考え抜いたうえで書かれた。これを読むすべての人に、真理と神とに向かって思いと心を開いて読んでほしいと切に願う。聖書にかなうものはすべて受け入れ、誤っているものはすべて退けてほしい。

本書を読み、また広めるすべての人に神の祝福を祈りつつ

ペンテコステの栄光のうちに

G・F・テイラー

1907年9月、ノースカロライナ州ダンにて

序論

J・H・キング師

キリスト教の歴史が示すとおり、霊的な大きな時代はどれも、その時代に固有の文献を生み出してきた。聖霊は人の心に力強く働きかけて、魂を救うわざへと人々を激しく駆り立てられる。それだけでなく、同時に人の思いにも働きかけて、より深い思索と探究を促される。そして、それまで知られていなかった新しい真理を明るみに出される。神の啓示は、段階を追って示されてきた。そのように啓示された真理の意味も、光を受けたキリスト教世界の理解の中で、必然的に段階を追って見いだされていく。真理の意味は、このように段階を追って見いだされる。それは、究極の完成に近づいていく途上では、個人にも時代にも限界があるということである。キリスト教会のどの時代の文献も、完全であるという刻印を帯びてはいない。それぞれの時代には、その時代に固有の啓示された真理がある。それを奉じる人々には、その真理が真理のすべてを含み、範囲において完全であるように見えるかもしれない。しかし、後の発見によって、それが重大で、しかも害のある誤りであることが明らかになる。プロテスタントの大宗教改革も、世界に広がったメソジストの運動も、多くの文献を生み出した力ある時代だった。それらの文献は尊く栄光ある真理を説き明かし、その真理は計り知れない祝福で世界をあふれさせた。しかし、それらの文献には不完全なところが多い。性質においても、範囲においても不完全なのである。近代のホーリネス運動は、おびただしい文献を生み出した。それはそれまでの発見の範囲を越える真理を示し、その実によって世界を祝福してきた。多くの面で、不完全であるうえに聖書にかなわないにもかかわらずである。その文献は、完全であるという主張を表に掲げている。しかし、探究が進むにつれて、ある事実が明らかになってきた。その文献は、それを奉じる人々を、ペンテコステの力と満たしの玄関口まで導き入れるにすぎない。その力と満たしを自分のものとするところまでは導かな

いのである。これらの文献のどれにも、はっきりと見られる傾きがある。恵みの満たしにかかわるすべてを、義認と聖化の範囲の中に押し込めることである。これは正直な魂にとって明らかに有害であり、彼らがペンテコステの経験に入る妨げとなっている。第二の祝福は、聖霊のバプテスマを含んでいないし、含むこともできない。この真理の光は、何年ものあいだ少しずつ明らかにされてきて、今日の世界的なペンテコステ運動において頂点に達した。この光は、断固とした必死の反対に遭っている。この光が、先に述べた文献の築いた限界の壁を打ち崩し、人々をより広い真理の野へと導き出すからである。その野は魂を豊かにし、よりよい奉仕のための力を与える。この運動も、これまでのすべての運動と同じように、それ自身に固有の文献を生み出すだろう。本書はこの方面で最初に世に出るものであり、キリスト教の文献の中でまったく独特の位置を占めている。使徒行伝に記されているとおりの授けられ方で聖霊のバプテスマを受けた人が書いた、最初の本だからである。その授けられ方こそが、今の運動の特色である。本書は、聖霊のバプテスマを聖書の中の正しい位置に置こうと努めている。また、それに特有のものとして伴う異言を、バプテスマを確かに受けたことのあかしとして示そうとしている。本書は、この主題を論じ尽くした論文ではない。むしろ、真理を示すにあたって、考える手がかりを与えるものである。実際、本書は、手始めの論考であるとしか主張していない。イエスの花嫁とのかかわりにおける聖霊の働きを論じたものである。そしてバプテスマを、花嫁の一員となるための最初の備えとして示している。このことが、本書にきわめて重要な一面を与えている。福音の歴史は、今その終わりの日々を迎えている。キリストの来臨が近いことに目覚めている人々がいる。その人々にとって、キリストの花嫁の一員となるための本当の備えが何かを知ることは、きわめて重大である。本書を誠実に読むなら、この問いに光が当てられるだろう。本書ははっきりと示している。キリストを迎える備えができていても、それは花嫁の一員となるのに十分な資格ではない。この事実を悟るなら、ある人々はきっと、この高い特権と栄誉に備えようと、いっそう深く努めるようになるだろう。本書を注意深く読んだ結果、そのような努力が生まれるなら、著者の願いはきっとかなえられる。私たちはそう確信している。

第一章　御霊は人格である

『神はひとりであって、そのほかに神はない』（マルコ一二・三二）。

詩篇一四篇一節には、『愚かな者は心のうちに「神はない」と言う』とある。異邦人は、神がたくさんいると信じている。しかし私たちは、『唯一の神のほかには神がない』ことを知っている。『というのは、たとい神々といわれるものが、あるいは天に、あるいは地にあるとしても、そして、多くの神、多くの主があるようではあるが、わたしたちには、唯一の神のみがいますのである』（第一コリント八・四～六）。この唯一の神は、永遠のかたである。神はご自分について、『わたしは、有って有る者』と言われる（出エジプト三・一四）。これこそ、ヨハネが見たかたである。ヨハネが黙示録四章二節で、『その御座にいますかたがあった』と語っているかたである。使徒はここで名を挙げず、姿も描いていない。彼が見ていたのは「名づけようもなく、言い表しようもない神性」だったからである。その神性において、父と子と聖霊とは同じ本質をもち、同一である。神は、その存在の最も隠れた絶対性においては、言い表しようがない。神性の全体と万物とは、その絶対性のうちに立っている。しかしこの神性のうちには、ほむべき三つの位格が具わっている。そのそれぞれが言い表しようがなく、そのそれぞれが神である。それでもなお、三つを合わせたものは、言い表しようのない唯一のかたなのである。

ヨハネ四章二四節には、『神は霊である』とある。しかし第一コリント一五章四四節には、『肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである』ともある。そこで、聖書が父のからだのさまざまな部分について語っていることがわかる。『雲はその足のちりである』（ナホム一・三）。『主の目』（ゼカリヤ四・一〇）。『見よ、主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない』（イザヤ五九・一）。

子にからだがあることを、私たちは知っている。子は『肉体となり、わたしたちのうちに宿った』からである（ヨハネ一・一四）。『人間の姿になられた』（ピリピ二・七）。子は、天に昇られたとき、そのからだを携えて行かれた。

聖霊にからだがあると教えているように見える聖句はない。それでも聖霊は人格をもつ神であり、そのことは父なる神や子なる神と少しも変わらない。聖霊は父と子と共に、三位における一体、一体における三位を成しておられる。聖霊は、父と子と同じように永遠のかたである。聖書の初めから、聖霊のことが記されている。『神の霊が水のおもてをおおっていた』（創世記一・二）。聖霊は、永遠の過去には三位一体の協議に加わり、一つであられた（創世記一・二六）。今も、またこれからも、神の国を進めるわざにおいて一つであられる。それと同じように、キリストの地上での働きのあいだも、キリストと一つであられた。聖霊は、人の子が母の胎に宿られたときから、その地上の生涯を通じてずっと、人格において人の子と一つであられた。処女マリヤに告げられた、驚くべき知らせを聞くがよい。『聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう』（ルカ一・三五）。イエスがバプテスマを受けられたとき、聖霊がはとのような姿をとって、その上に下られた。イエスは、『わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである』と言われた（マタイ一二・二八）。こうしてイエスは、ご自分と御霊とがまったく一つになって働いておられることを、はっきりと示しておられる。イエスはまた、『わたしと父とは一つである』と言われた（ヨハネ一〇・三〇）。このように、父と子と聖霊という三つの位格が、一体における三位を成しておられる。父にはからだがあり、子にもからだがある。しかし聖霊は、父のからだと子のからだのうちに宿っておられる。こうして聖霊は父と子とを結び合わせ、三つを一つにしておられる。

多くの人が思っているのとは違って、御霊は霧や感化力ではない。父と子から出て、父と子のために仕える、まことの人格である。御霊は神ご自身であって、

神の子供たちのうちに御旨のよしとされるところを行うために、分け与えられたかたである。御霊は、神の恵みを子供たちのうちに、また子供たちのために力あるものとされる。そして彼らの弱さを助け、彼らの救いをあかしし、恵みの国における神の治めのわざを、すべて実際に行われる。

聖霊にはからだがないので、神は、聖霊とその働きを、形ある物を象徴として用いて私たちに示されるほかない。その象徴については、次の章で扱う。

第二章　御霊の象徴

聖書では、私たちの救いにかかわる聖霊の人格としての働きが、象徴によって私たちの理解に示されている。それは、私たちの肉体の感覚になじみのある象徴である。これらの象徴は、神が自然の物の中から選ばれたたとえである。神はそれによって、私たちが御霊の働きを理解できるように助けようとされる。また、肉体の感覚を通して、霊的な大切な真理を正しく思い描けるようにしようとされる。私たちの知性は、形ある物を扱うことに慣れている。そのため私たちは、神の定められた象徴によって、心のうちでの神の御霊の働きをいっそうたやすく理解できる。その本当の意味と性質がわかるのである。次に挙げる象徴は聖書から取ったものであり、したがって神が定められたものである。だから、聖霊ご自身がこのように当てはめておられるとおりに用いるなら、誤ることはないと私たちは確信している。

一　風。『風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである』（ヨハネ三・八）。この方面にかかわるほかの聖句は、創世記一・二、二・七、エゼキエル三七・九～一〇、使徒二・二である。

二　水。『祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである』（ヨハネ七・三七～三九）。ほかの聖句は、詩篇一・三、イザヤ四四・三～四、エゼキエル三六・二五～三〇、四七・一～五、エペソ五・二六である。

三　ぶどう酒。ペンテコステの日に、聖霊を受けた人々について、『あの人たちは新しい酒で酔っているのだ』と言う者たちがいた（使徒二・一三）。ここでのたとえの要点は、もたらされた結果にある。『酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされなさい』（エペソ五・一八）。（マタイ九・一七を参照）

四　油。『神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました』（使徒一〇・三八）。『あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちにとどまっていなさい』（第一ヨハネ二・二七）。（詩篇二三・五、九二・一〇、一〇五・一五、マタイ二五・一～三を参照）

五　乳と蜜。カナンの地は、乳と蜜の流れる地であると言われている。こうして乳と蜜は、聖霊の二重の象徴となっている。（出エジプト三・八、三三・三、民数記一三・二七を参照）

六　証印と保証。この二重の象徴は、次の聖句に見られる。『あなたがたは、約束された聖霊の証印をおされたのである。この聖霊は、わたしたちが神の国をつぐことの保証であって、やがて神につける者が全くあがなわれ、神の栄光をほめたたえるに至るためである』（エペソ一・一三～一四）。『神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである』（エペソ四・三〇）。『神はまた、わたしたちに証印をおし、その保証として、わたしたちの心に御霊を賜わったのである』（第二コリント一・二二）。「証印とは、定められた図柄を押すことによって、政府がしるす刻印である。それによって、証印を押した物をあらゆる敵対から守るのである」。つまり、証印の押された物は、政府の権威と保護のもとにあるということである。「保証とは、約束を確かにするものである。約束が果たされるまで、約束の身代わりとなる抵当である」。こうして、私たちの心のうちでの聖霊の働きが、証印と保証という二重の象徴によって私たちに示されている。

七　火の舌。『舌のようなものが、炎のように分れて現れた』（使徒二・三）。ここに、聖霊のもう一つの象徴がある。火だけで御霊の象徴となることは決してない。舌と結びついたときにだけ、象徴となるのである。人と人とが考えを伝え合うおもな手段は、人の声である。そして舌は、声を出すおもな器官である。福音は、神から人への伝達である。すでに見たように、福音は聖霊の直接の力によって効力あるものとされる。弟子たちは、力を授けられるのを待っていた。そのとき聖霊は、炎のような目に見える舌の形をとって、彼らの上にとどまられた。それは、まことにふさわしい象徴だった。聖霊は舌そのものではない。しかし聖霊の力は、四方八方に語る舌を通して感じ取られるのである。言いかえれば、聖霊は、神に選ばれた使者の舌を、地の果てまで福音を宣べ伝えるのに効力あるものとされるのである。そうであれば、弟子たちの上に臨んだ聖霊の力は、罪を犯している世に語りかける神の声なのである。

それぞれの象徴が御霊の特定の働きを表していると考える人もいる。しかし私は、そのようには理解していない。ヨハネ三章八節のイエスの言葉からすれば、御霊は風の象徴のもとに人を新しく生まれさせられると考えられる。また使徒行伝二章二節は、ペンテコステの日に御霊が風として来られたことを示している。そのとき御霊は、火の舌として、またぶどう酒としても姿を現された。イエスは、御霊のバプテスマについて語られたとき、水の象徴を用いられた（ヨハネ七・三七～三九）。油の象徴も、バプテスマに当てはまることがある（マタイ二五・一～一三）。証印と保証もそうである。乳と蜜も、同じように当てはめることができる。これらの象徴はみな、バプテスマを表すのに用いられている。しかし、バプテスマ以外の働きを表す象徴は、どれも、ほかのすべての働きのあいだで互いに入れ替えることができる。御霊がそれぞれの象徴を一つの特定の働きのために用いられるという図式を描くことは、理論を組み立てることにほかならない。そのような図式には、聖書の土台がないからである。本書では、理論を組み立てるのではなく、みことばの上に立とうと思う。

主がバプテスマを受けられたとき、聖霊ははとの形をとって、主の上に下られた。この象徴は、ほかのときには用いられなかった。御霊がこの形をとられたのも、神の子の上に目に見える姿で下られたときだけである。その理由は、いろいろな点から見て取ることができる。貧しい者のささげ物は、はとであった。キリストの心は、はとのように柔和であった。こうして、キリストのご性質といけにえとは、はとの形をとった聖霊によって、最もふさわしく表すことができたのである。主は、正しいことを成就するために従われた。そのあと、聖霊が主の上に下られた。聖霊は、人々の前に、その肉の目に見える姿で現れるのにふさわしい形として、はとを選ばれた。はとは平和のしるしであり、神と罪を犯している世とのあいだの平和のための、ふさわしいいけにえである。そうであれば、はとの象徴が用いられるのは、御霊とキリストとのかかわりにおいてだけである。はとは、御霊と人とのかかわりの象徴となることは決してない。相手が聖徒であっても罪人であっても同じである。本書では、人とのかかわりにおける御霊の務めを扱おうとしている。そのため、この象徴は先の一覧から除いた。

このように、七つの象徴を挙げた。私たちの心のうちでのご自分のさまざまな働きを示すために、聖霊が選ばれたものである。ほかにも象徴はあるかもしれない。しかし私たちには、これらで全体が尽くされているように思われる。自然界のどれか一つのひな型だけで、御霊の務めの全体を表すことはできない。だから、そのさまざまな働きを示すひな型がちょうど七つあるのは、当然のことである。しかし、このように用いられている象徴の全部、またはどれかが聖霊だなどと、一瞬たりとも考えてはならない。聖霊が象徴なのでもない。風も水もぶどう酒も油も、乳と蜜も、証印と保証も、火の舌も、聖霊ではない。どれも、私たちの心のうちでの御霊の働きを表すものにすぎない。私たちが象徴なしにその働きを理解できるところに達するとすぐに、神は象徴を取り去られる。しかし実体はとどまる。

「私たちは物質の世界に生き、物質の感覚に取り囲まれている。それで神は、物質の象徴を通して私たちに語られる。しかし、その時が来ようとしている。神はもはや私たちにたとえで語られず、私たちの霊を、父をじかに見て父と交わるところへ導いてくださるのである。そのとき魂は、二次的な言葉やひな型は、すべて要らなくなる。魂は神の本性の大海に溶け込み、父と子と聖霊と一つになる。もはや教えられる必要はない。御霊は、栄光を受けた魂に、一点の曇りもな

い理解を絶えず与えてくださる。魂はその理解のうちに、すべてを見、すべてを知るのである」（ワトソン博士）。

第三章　神の七つの霊

黙示録一章四節、三章一節、四章五節には、神の七つの霊のことが記されている。一方、エペソ四章四節には、御霊はただ一つだと書かれている。これらの聖句は、次の点で調和している。御霊はただ一つである。しかし聖霊は、神のあがないの恵みを受けるすべての人を照らし、慰め、造り上げるために遣わされる。そのように遣わされる聖霊は、有限な私たちの心には七という数で表されるのである。これは、御霊が分かれているということではない。御霊が私たちのうちでどのように働かれても、御霊は一つの御霊である。

サイス博士はこう言っている。「数には聖なる意味がある。それはカバラのような秘術でも、空想でもない。物事の本性そのものから出たものであり、聖書の中でしっかりと定まっている。そして、人間の思想と宗教の最も高く最も深い体系のすべてにおいて、あまねく認められているのである」

三は三位一体、すなわち父と子と聖霊を表す。

四は人類を表す。

七は、三と四とが結び合わさったものである。だから七は救いを、言いかえれば聖徒たちのうちにあるキリストのいのちを表す。七は、神と人との契約にかかわるすべてのものと結びついている。また七は、一つの時代が満ちることをも意味する。七は、時のうちにあるものにおいて完全な数である。だから、聖霊が七という数で私たちに示されていても、驚くには当たらない。その務め、治め、働きにおいても、また人を扱われるどんな仕方においても、そうなのである。

すでに見たように、御霊は七つの象徴を用いられる。私たちの心のうちでのご自分のさまざまな働き方を、有限な私たちの理解に示すためである。今度は、御霊の働きが七つあることを見ていこう。聖霊が私たちを助けて、これらの大いなることを正しく理解させてくださるように。

一　御霊は人と争われる（創世記六・三）。罪を示すことは、御霊の務めである。実際に犯した罪も、生まれつきの罪もである。聖霊は、信仰に無頓着なキリスト者と争って、彼らを神のための活発な奉仕へと押し出そうとされることがよくある。

二　御霊は人を新しく生まれさせられる（ヨハネ三・五～八）。新しく、すなわち上から生まれるとは、新しい心を受けることである。心と生活におけるこの変化は、聖霊の力によって成し遂げられる。

三　御霊は人を聖化される（第一ペテロ一・二）。聖化とは、古い人を滅ぼすことであり、古い心を取り去ることであり、肉の思いを根こそぎにすることである。『イエスは、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられた』。聖霊がイエスの血を心に注がれると、心は聖化される。血は、私たちが聖化される手段である。そして聖霊は、それを行われる働き手である。

四　御霊はあかしされる（第一ヨハネ五・六）。御霊は、私たちが義とされたことをあかしし（ローマ八・一六）、聖化されたことをあかしされる（ヘブル一〇・一五）。神癒や祈りの答えなども、あかしされる。

五　御霊は人を教えられる（ヨハネ一四・二六）。罪人がどうすれば救われるかは、御霊に教えていただかなければならない。救われた魂はみな、神の導きと、神の照らしと、上からの知恵とが自分に必要なことを悟る。そのような魂にはみな、自分がそのように導かれるという幸いな確信が与えられる。御霊は、その人が聖書を理解し、霊的なことを悟り、神の御旨を知り、神の知恵を受けることができるようにしてくださる。『わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなしてくださる』（ローマ八・二六）。聖霊は、福音の働きの細かなところにまで、すべてかかわられる。ピリポは荒野に遣わされ、エチオピヤ人の宦官に福音を宣べてバプテスマを授けた。それは御霊の指図によるものだった（使徒八・二九～三九）。パウロとシラスが自分たちの思いでビテニヤに行こうとしたとき、御霊はそれを許されなかった（使徒一六・七）。また、ペテロをコルネリ

オのもとに遣わして福音を宣べさせたのも、御霊であった（使徒一〇・一九、一一・一二）。このように使徒たちは、その働きの全体を通じて、聖霊に導かれていた。

六　御霊は油を注がれる（詩篇二三・五、使徒四・三一）。こうした油注ぎの目的は、私たちに奉仕の備えをさせること、あるいは何かの特別な試練を耐え抜けるようにすることである。多くの人は、その試練のための油を神が注いでくださるまで、神の前で待ち望まない。そのために、試練の甘さをすべて取り逃がしている。

七　御霊はバプテスマを授けられる（マタイ三・一一）。御霊の務めは、ここで極まる。これこそが壮大な頂点である。これは約束の御霊の証印であり、この証印によって、私たちは小羊の花嫁と定められる。

このように私は、人の救いにかかわる聖霊の七つの務めを挙げた。ほかにもあるかもしれない。しかし私には、それらはこの七つのどれかに数え入れることができると思われる。第一ヨハネ二章二七節で語られている「油」は、バプテスマと同じものかもしれない。しかし、私たちが御霊の「油注ぎ」を何度か受けることがあるのは確かである。バプテスマの前にも後にも、特別な奉仕や試練に備えるために受けるのである（使徒四・二九〜三一）。しかし、それがどうであれかまわない。御霊の働きが七つだと考えても、七つより少ない、あるいは多いと考えてもよい。「神の七つの霊」をどのように説明してもよい。それでもなお、事実は残る。御霊は確かに人のために働かれる。そして、『働きは種々あるが（中略）各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』。だから、人の救いにかかわる御霊の働きや務めを、どのように整理してもよい。どんな理論を組み立ててもよい。それでも、本書がその上に立っている中心の真理は、少しも揺るがないのである。

『神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなくそのかたに賜うからである』（ヨハネ三・三四）。私はここから、次のように考える。御霊がそのすべてを具えたまま与えられる人はいない。御霊はいつも、限られた分量で与えられる。つまり、こういうことである。イエスは聖霊を、そのすべての働き、すべての治め、すべての賜物、すべての力において持っておられた。イエスと聖霊とのかかわりが及ぶかぎりにおいてである。だから、イエスの場合に選ばれた象徴は、はとだったのである。しかし私たちの器は小さすぎて、限られた分量でしか聖霊を受けることができない。聖霊に満たされることはあってもである。だから聖霊が、はととして私たちの上に下られることは決してない。一滴の水にも、水としての満ちた性質がすべて具わっている。それは、樽一杯の水と少しも変わらない。それでも樽は、すべての水を入れることはできない。それと同じように、私たちは神に満ちているもののすべてを持つことができる。神に満ちているもののすべてをもって満たされることもできる。それでも私たちは、限られた分量でしか神を受けることができないのである。

こうして、私たちが限られた分量で御霊を受けることがわかれば、たやすく理解できる。聖霊を知っている人がみな、バプテスマを受けているわけではない。また、聖霊を内に持っている人がみな、御霊に満たされているわけでもない。私は、罪を示されたときに聖霊に出会い、義とされたときに聖霊を知るようになった。それ以来ずっと、聖霊と親しくしてきた。

罪人が救いを願い、また求めるようになるには、その前に、自分の本当の状態を悟り、神の助けを求めなければならない。この必要を知ることも、救いを求める力も、聖霊の働きによってその魂のうちに生み出される。主は弟子たちに、一つの真理を示された。主を救い主として受け入れる力も、みことばそのものの効力も、聖霊の直接の働きかけにかかっている（ヨハネ六・三三〜六四）。しかし救いとは、神の国の一員であること以上のものである。それは、内に宿る御霊を通して与えられる保証である。神の栄光ある相続財産のすべてを、キリストと共に受け継ぐ者となることの保証なのである。みことばには、『もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない』とある（ローマ八・九）。しかしこれは、御霊を持っている人がみな御霊のバプテスマを受けている、ということを少しも意味しない。実のところ、その反対を証明している。御霊のバプテスマを受けるとは、神の保証を持つことである。「死人のうちからの」復活の保証であり、キリストの花嫁である喜びを存分に味わうところへ入ることの保証である。イエスは弟子たちに、『あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるようになる

からである』と言われた。このように、御霊を持っている人がみな、御霊のバプテスマを受けているわけではないことがわかる。

ついでに、思い起こしておこう。神を入れる器が、ほかの人より大きい人もいる。ある人がほかの人より多くの御霊を持っていても、その器は、ほかの人の器ほどには満ちていないこともある。御霊のバプテスマは、先に挙げた御霊のほかのすべての働きを含み、あるいは前提としている。バプテスマは、受ける人の霊と魂とからだとを満たし、その全存在を力と栄光とですっかり包むのである。

こうして、私たちの心のうちでの神の御霊の働きを見渡したので、次は御霊の現れに進もう。しかし、それは次の章に譲らなければならない。

第四章　御霊の現れ（その一）

『働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』（第一コリント一二・六～七）。

この聖句から、私にはこう思われる。私たちの心のうちでの御霊の働きの一つ一つには、それに続く現れがある。また私は、ほかの聖句からこう考える。御霊のどの働きにも、二種類の、言いかえれば二つの面の現れがある。第一は、目に見えない、内なる感化、すなわち現れである。第二は、目に見える、外なる現れである。そして現れには益があるので、御霊が働かれるすべての人に現れが与えられるのである。

一　御霊が人と争われるとき、その人の魂には不安が生じ、顔には悩む色が表れる。私たちはそれを知っている（ダニエル五・六、使徒二四・二五、詩篇四二・五）。

二　義認は、目に見えない現れとして平安をもたらす（ローマ五・一）。また目に見える現れとして、新しい生活をもたらす（エペソ二・一～五、ガラテヤ五・二二～二三、第二コリント五・一七）。

三　聖化は、目に見えない現れとして喜びをもたらす（ルカ二四・五〇～五二）。また目に見える現れとして、きよきに至る実をもたらす（ローマ六・二二）。

四　御霊のあかしは、内なる現れとして、神に対する確信をもたらす（第一ヨハネ三・二〇～二二）。また外なる現れとして、世に対するあかしをもたらす（ローマ一〇・一〇）。

五　御霊に教えられる人には、内なる現れとして、イエスの言葉を深く悟る力が与えられる（ヨハネ一四・二六）。また外なる現れとして、知恵が与えられる。とくに、キリストのいのちと神の隠された事柄とについての知恵である（創世記四一・三七～四〇、ダニエル一・一九～二〇、使徒四・一三、一八・二四～二六）。

六　御霊の油注ぎを受ける人には、内なる現れとして、神がご自分の子供たちをどのように扱われるかを深く悟る力が与えられる（詩篇二三・五～六）。また外なる現れとして、大胆さと自由とが与えられる（使徒四・二九～三一）。

七　御霊のバプテスマは、目に見えない現れとして生ける水をもたらす（ヨハネ七・三七～三九）。また目に見える、外なる現れとして、異言をもたらす（使徒二・三～四）。

御霊の現れはほかにもあり、私はそれを挙げていない。しかし、ここまでのところは、みことばの上に組み立てるように努めてきた。初めの六つの働きのそれぞれに続く現れを挙げるところで、私は何かの誤りを犯したかもしれない。これらについては、みことばはそれほど明らかではないからである。だから読者は、そうしたければ、これらの現れを並べ替えてもかまわない。しかし、覚えておいてほしい。『各自が御霊の現れを賜わっている』。御霊が働かれる人は、だれでもそうなのである。また、あなたの現れは聖書にかなったものでなければならない。しかし、御霊のバプテスマに続く現れのことになると、私たちには『主はこう言われる』という確かな言葉がある。初めの六つの働きのどれか、あるいはすべてに続く御霊の現れを自分は持っている。そう何年も思い込んでいて、あとで間違っていたと気づくこともあるかもしれない。しかし、七つ目の働きの目に見える現れについては、そうはならない。

目に見える現れについて、以上のことの証拠として、イエスの言葉を引こう。『わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである』（ヨハネ一五・二六～二七）。人々は、バプテスマに続く現れが

異言を語ることだと認めまいとして、この聖句をなんとねじ曲げることか！　たとえばある人は、この聖句を引いたあとで、こう書いている。「さて、イエスはここで、個々の信者のための聖霊のバプテスマについて語っておられたのではない」

「使徒たちはひとまとまりとして、教会全体を代表していた。そして約束は、主が助け主を、彼らのうちにではなく、彼らに送られるということであった。また助け主が、彼らのうちにではなく、彼らと共に、いつまでもとどまられるということであった」

「聖霊のバプテスマも、個々のキリスト者が御霊を受けることも、ここではまったく問題になっていない。もしそうなら、言葉は『わたしは助け主をあなたがたの上につかわす。助け主はいつまでもあなたがたのうちに住むであろう』となっているはずである。ところが実際には、『あなたがたに』とあり、『あなたがたと共に住むであろう』とあるのである」

「だからこれは明らかに、聖霊が教会に来て、その務めに着かれることを指している。すなわち、罪を示し、救い、聖化し、聖霊を受け入れる一人一人の魂を満たされることである」

この書き手は、それから少し論評を加えて、『それはわたしについてあかしをするであろう』を引く。そして、「御霊はわたしについて何と言われるのか」と問う。この自分の問いへの答えとして、第一ヨハネ五章六節から一〇節までを引き、こう続ける。

「だから、助け主が教会に、またどの心にでも来られたときのあかしとは、イエスが神の御子であることを、その心にあかしすることだとわかる。そしてキリスト者はみな、このあかしを魂のうちに持っている。『聖霊によらなければ、だれもイエスは主であると言うことができない』（第一コリント一二・三）」

「『わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう』という美しい約束については、以上のとおりである。アーメン！」

同じ新聞の同じ面で、この書き手はヨハネ一四章一五節から一七節までを引いたあとで、こう言っている。

「『あなたがたと共におり』という言葉は、彼らの個人としての救いとはかかわりがなく、ただ彼らの働きにかかわるものであった」

「聖霊は、新生したすべての人と共におられ、またそのうちにおられる。祝福された聖霊は、恵みの段階がどうであれ、神の民のすべてと共に、またその間に住まわれる。だから、聖霊は新生した人と共にはおられるが、そのうちにはおられないと言うのは誤りである」

また、こうも書いている。「だから、イエスは使徒たちに『なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるようになるからである』と言われた。この言葉は、本当に新生した心のうちに御霊がおられることを否定するものではない。その言葉の意味は一つしかありえない。使徒たちは、祝福された助け主を、その栄光ある満ちあふれる姿のままでは、まだ受けていなかったということである」

さらに、こうも書いている。「だから、イエスが使徒たちに『またあなたがたのうちにいるようになる』と言われたとき、それは疑いもなく、マタイ三章一一、一二節の聖霊のバプテスマを指していたのである。そのバプテスマは、徹底して『打ち場の麦をふるい分け』、『からを焼き捨て』、彼らが聖霊に満たされるようにするためのものであった。そしてこのすべては、ペンテコステの日に弟子たちのうちで成し遂げられたのである」

私の理解できるかぎりでは、この書き手は上の引用で、次のように教えている。ヨハネ一四章、一五章、一六章では、聖霊についてさまざまなことが言われている。そのうち、御霊のバプテスマを指しているのは、『またあなたがたのうちにいるようになる』という表現だけである。ほかのどの箇所でも、イエスが語っておられたのは「個々の信者のための聖霊のバプテスマ」のことではない。イエスは「明らかに、聖霊が教会に来て、その務めに着かれることを指している。すなわち、罪を示し、救い、聖化し」というのである。そのうえで彼は、「聖霊を受け入れる一人一人の魂を満たされる」と付け加えている。

よく聞いてほしい。「聖霊は、新生したすべての人と共におられ、またそのうちにおられる。（中略）だから、イエスが使徒たちに『またあなたがたのうちにいるようになる』と言われたとき、それは疑いもなく、マタイ三章一一、一二節の聖霊のバプテスマを指していたのである」。こうして彼は、新生した人はみな、マタイ三章一一、一二節に言われている聖霊のバプテスマを受けている、と教えていることになる。イエスの『あなたがたのうちにいるようになる』という言葉からは、こう推論しなければならない。聖霊が弟子たちのうちに入り、内に住まわれることは、まだ先のことであった。そして上の書き手によれば、「聖霊は、新生したすべての人（中略）のうちにおられる」。そうであれば、論理の上で出てくる結論はただ一つである。この時の弟子たちは、まだ新生していなかったということになる。それでも、聖霊は彼らと共におられたし（ヨハネ一四・一七）、彼らの名は天にしるされていた（ルカ一〇・二〇）。人は、聖書にかなわない説を支えようとすると、自分の言葉にからまってしまうのである。

もう一度、彼自身の言葉を引こう。「だから、イエスが使徒たちに『またあなたがたのうちにいるようになる』と言われたとき、それは疑いもなく、マタイ三章一一、一二節の聖霊のバプテスマを指していたのである」。そして彼は、ヨハネ一五章二六、二七節について論じて、こう言う。「聖霊のバプテスマも、個々のキリスト者が御霊を受けることも、ここではまったく問題になっていない。（中略）だからこれは明らかに、聖霊が来て（中略）聖霊を受け入れる一人一人の魂を満たされることを指している」。「そのバプテスマは、徹底して『打ち場の麦をふるい分け』、『からを焼き捨て』、彼らが聖霊に満たされるようにするためのものであった」。彼は、「満たし」と「バプテスマ」とは同じものだと言う。しかも、満たされるためにはバプテスマを受けなければならなかったと言う。実に奇妙な言い分である！

もう一度、注意して見よう。「だからこれ（ヨハネ一五・二六～二七）は明らかに、聖霊が教会に来て、その務めに着かれることを指している。すなわち、罪を示し、救い、聖化し（以下略）」。もしこれが本当なら、こういうことになる。ヨハネ一五章二六、二七節の約束が成就するまで、聖霊は罪を示し、救い、聖化するために教会に来られたことが一度もなかった。そして、この書き手によれば、これ（ヨハネ一五・二六～二七）は「聖霊を受け入れる一人一人の魂を満たされる」という約束であった。また彼は、「イエスが使徒たちに『またあなたがたのうちにいるようになる』と言われたとき、それは疑いもなく、マタイ三章一一、一二節の聖霊のバプテスマを指していた」とも言う。こうして彼は、ヨハネ一五章二六、二七節とマタイ三章一一、一二節とを、まったく同じものにしている。ところが彼は、そのすぐ前に、両者にはかかわりがないと言っていたのである。

同じ書き手は、別の記事でヨハネ一五章二六節について論じて、こう言っている。「私は読者に警告したい。祝福された聖書をねじ曲げて何かの説を支え、そのうえで、聖書に欠けていると思うものを付け足すことのないように」。私は彼に、自分の出した警告を自分で心に留めるよう勧めたい！

ペンテコステまで聖霊がこの世で何の務めも持っておられなかったというのが本当なら、次の聖句を説明してほしい。『わたしの霊はいつまでも人と争うことはしない』（創世記六・三）。『わたしはあなたの上にある霊を、彼らにも分け与えるであろう』（民数記一一・一七）。『彼がわたしに語られた時、霊がわたしのうちに入った』（エゼキエル二・二）。『霊がわたしをもたげた』（エゼキエル三・一二）。『主の霊がわたしに下った』（エゼキエル一一・五）。『わたしは主のみたまによって力に満ちている』（ミカ三・八）。『彼は母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされている』（ルカ一・一五）。それに、イエスの言葉もある。『あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におるからである』。聞いてほしい。『ゼルバベルに、主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである』（ゼカリヤ四・六）。『あなたがたは、いつも聖霊に逆らっている。それは、あなたがたの先祖たちと同じである』（使徒七・五一）。

このように聖書は、こう教えているように思われる。御霊はいつの時代にも、人の心のうちで働いてこられた。しかし、ペンテコステまでは、だれもバプテスマを受けたことがなかった。『イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである』（ヨハネ七・三九）。この節は確かにバプテスマを指しており、罪を示し、救い、聖化する御霊の働きを指しているのでは

ない。『これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである』からである。弟子たちがペンテコステの前に、ある分量の御霊を受けていたことは、疑う余地がない。それ以前の時代のほかの人々も、そうであった。彼らは、ある程度の霊の光と、ある程度の霊の力とを持っていた。彼らより前に生きた聖なる人々と同じである。しかしイエスは彼らに、聖霊を求めて祈ること、またヨハネが約束していたバプテスマを求めることをお教えになった。聖書にはこうある。彼らが来て、『わたしたちにも祈ることを教えてください』と言ったとき、イエスは祈りの理想の形を彼らにお与えになった。そしてそのあとで、聖霊ご自身が祈りに答えて来てくださることをお教えになった。イエスは地上の親にたとえて、こう教えられる。『このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊をくださらないことがあろうか』（ルカ一一・一三）。

私は、『あなたがたと共におり』という表現をこう理解している。弟子たちは、過ぎた時代の聖なる人々と同じ仕方で、聖霊を持っていたのである。それなのにイエスは、『わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送ってくださるであろう』と言われた。また、『わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう』とも言われた。ここでイエスは、助け主が弟子たちのところに来られることはまだ先のことだと、はっきり教えておられる。そして、御霊はいつの時代にも彼らと共におられたのだから、「助け主が来る」とはバプテスマを指しているはずである。実際、こう考えるのは奇妙であろう。イエスは、『助け主はあなたがたと共におり』と、今、現にそうだと言われた。その言葉が、直前の節で『わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせてくださるであろう』と言われたのと、まったく同じ祝福を意味しているというのである。つまり、イエスがある節で彼らに祝福を約束し、次の節で、その祝福をもう持っていると告げられるのは奇妙だ、ということである。しかし、上の引用が教えているのは、まさにそのことなのである。同じ書き手は、ヨハネ一五章二六、二七節について論じて、こう言っている。

「聖霊のバプテスマも、個々のキリスト者が御霊を受けることも、ここではまったく問題になっていない。もしそうなら、言葉は『わたしは助け主をあなたがたの上につかわす。助け主はいつまでもあなたがたのうちに住むであろう』となっているはずである。ところが実際には、『あなたがたに』とあり、『あなたがたと共に住むであろう』とあるのである」。ところで、『あなたがたと共に住むであろう』という言葉は、この前後には見当たらなかった。彼が指しているのは、ヨハネ一四章一六節の『いつまでもあなたがたと共におらせてくださる』という言葉にちがいないと思う。彼ははっきり述べている。助け主がいつまでも彼らと共におられるという約束は、御霊のバプテスマを指しているのではない。聖霊が教会に来て、その務めに着かれることを指しているのだ、と。また、『あなたがたと共におり』という言葉は、彼らの個人としての救いとはかかわりがなく、彼らの働きにかかわるものだ、とも述べている。助け主は、すでに彼らと共に住んでおられた。そうであれば、ヨハネ一四章一六節の約束は、彼らがすでに持っていたもの以上のものを約束していないことになる。神の民がいつも持っていたもの以上のものも、約束していないことになる。上の引用が教えているのは、確かにそういうことである。

イエスは弟子たちに、ある分量で助け主を送ってくださるよう父にお願いしようと言われる。そのあとで、その分量の助け主をもう持っていると告げられるだろうか。私たちはそうは思わない。

しかしイエスは、彼らにこう言っておられる。『わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせてくださるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるようになるからである。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る』。『しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話してお

いたことを、ことごとく思い起させるであろう』。『わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである』。『けれども今わたしは、わたしをつかわされたかたのところに行こうとしている。しかし、あなたがたのうち、だれも「どこへ行くのか」と尋ねる者はない。かえって、わたしがこれらのことを言ったために、あなたがたの心は憂いで満たされている。しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。罪についてと言ったのは、彼らがわたしを信じないからである。義についてと言ったのは、わたしが父のみもとに行き、あなたがたは、もはやわたしを見なくなるからである。さばきについてと言ったのは、この世の君がさばかれるからである。わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。御霊はわたしに栄光を得させるであろう。わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである』。

これらの言葉のうち、『あなたがたのうちにいるようになる』という表現のほかは、どれも個々の人に与えられる御霊のバプテスマを指していない。そう言う理由は、私には見当たらない。私の理解では、助け主が来られることについての上の約束は、すべて同じことを指している。イエスの言葉を書かれているとおりに受け取るなら、それはごく単純である。イエスは弟子たちのただ中で、静かに、しかしきっぱりと、こう言っておられるように思われる。わたしは去って行く。わたしがこう言ったので、あなたがたは悲しんでいる。しかし、わたしが去って行くのは、あなたがたにとって最もよいことなのだ。わたしは、いつまでもあなたがたと一緒にいることはできないからである。わたしが去ったあとで、あなたがたに助け主を送ろう。あなたがたはすでに助け主を知っている。助け主はあなたがたと共にいるからである。しかしわたしは、もっと大きな分量で助け主を送るつもりだ。そして助け主は、いつまでもあなたがたと共にいるであろう。あなたがたに話さなければならないことは多くあるが、今のあなたがたには理解できない。しかし覚えておきなさい。助け主が来るとき、それはわたしについてあかしをし、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。そのとき助け主は、わたしについてあなたがたに教え始めるであろう。わたしが話したことを思い起させ、それを理解できるようにしてくれるであろう。上の引用は、こう教えている。これらの言葉はバプテスマを指しているのではない。ただ、助け主が教会と共に住むために来られることを指しているのだ、と。しかしイエスは、助け主がすでに『あなたがたと共におり』と言われたうえで、こう言っておられるのである。わたしは、もっと満ちた分量で助け主をあなたがたに送ろう。助け主が来るときには、あかしをし、教え、ほかにもさまざまなことをするであろう。

第四章　御霊の現れ（その二）

助け主が来られたときに何をされるとイエスが言われたか、もう一度いくつか見ておこう。『それはわたしについてあかしをするであろう。御霊はわたしに栄光を得させるであろう。世の人の目を開くであろう。あなたがたに教えるであろう。きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう』。

さて、あかしをすることと証言することとは、同じ一つのことである。しかし、あかしをすることと教えることとは、別々のことである。上の引用には、こうある。「だから、助け主が教会に、またどの心にでも来られたときのあかしとは、イエスが神の御子であることを、その心にあかしすることだとわかる。そしてキリスト者はみな、このあかしを魂のうちに持っている。『聖霊によらなければ、だれもイエスは主であると言うことができない』（第一コリント一二・三）」

ここでこの書き手は、はっきりこう教えている。助け主が来られてイエスについてあかしをされるという約束は、弟子たちが聖霊によって、イエスは主であると言えるようにすること以上のものではなかった。この書き手が「キリスト者はみな、このあかしを魂のうちに持っている」と付け加えているのは、賢いことである。ペテロが助け主の来られるより前に、このあかしを魂のうちに持っていたことは明らかである。イエスが弟子たちに、『あなたがたはわたしをだれと言うか』と尋ねられたとき、こうあるからである。『シモン・ペテロが答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。すると、イエスは彼にむかって言われた、「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」』（マタイ一六・一五～一七）。ここでキリストの言葉から、イエスが神の御子であることを示すのは父のあかしだとわかる。そしてこれは、この書き手が上で論じていた聖句と、ぴたりと一致している。それはこうである。『神（父）のあかしというのは、すなわち、神（父）が御子（父の御子）について立てられたあかし（イエスが神の御子であるというあかし）である』（第一ヨハネ五・九）。そしてこのすべては、ほかの聖句とも一致している（マタイ三・一七、一七・五を参照）。ところがこの兄弟は、イエスが神の御子であるというあかしは助け主のあかしだと言う。そしてペテロはすでにこのあかしを持っていたのだから、イエスが使徒たちにこう言われるところを想像してもよいであろう。「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送ってくださるであろう。そして助け主が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう」。それからイエスはペテロのほうを向いて、こう言われる。「シモンよ、この約束にあなたは含まれていない。助け主はもうあなたのところに来て、わたしについてあかしをした。わたしが神の子であるというあかしを、あなたは持っているのだから」。奇妙なことだ！　奇妙なことだ！

イエスがそのように弟子たちをからかわれたとは、私たちには信じられない。むしろ、助け主が来られることについて語られたすべての言葉で、イエスは一つの祝福を約束しておられたのだと信じる。それは、そのときまだ弟子たちのだれも持っていなかった祝福である。

もう一度言う。あかしをすることと証言することとは、同じ一つのことである。イエスは、『それはわたしについてあかしをするであろう。あなたがたもあかしをするのである』と言われた。ここには、二つの事実がはっきり見える。第一に、二つのあかしは同じ性質のものである。第二に、助け主のあかしが、助け主を受けた人のあかしより先にある。

では、助け主が来られること、また来られたときに何をされるかについてのイエスのこれらの約束は、みな成就したことがあるのか。あるとすれば、どこで、いつ、どのような状況でか。

これらの約束の成就の始まりが使徒行伝二章に記されていることは、疑う余地がない。イエスは、『わたしは助け主をつかわそう。それはあなたがたのうちにいるようになる。それが来る時、わたしについてあかしをするであろう』と言っ

ておられた。『突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった』（わたしはそれをあなたがたにつかわそう）。『すると、一同は聖霊に満たされ』（それはあなたがたのうちにいるようになる）、『御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』（『わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう』）。異言を語ったことは、弟子たちのあかしではなかった。それは彼らが努めて語ったものではなかった。聖霊が彼らのうちに来られ、その全存在を占領して、語らせておられたのである。だから、『あなたがたのうちにいるようになる』という約束の成就をここに探し、『わたしについてあかしをするであろう』という約束の成就は第一ヨハネをめくって探す、というのではない。そのすべてが、まさにこの使徒行伝二章にあるのである。

世の人々が駆け寄って来て目を開かれたのは、弟子たちが異言を語っていたときであった。すなわち、罪と義とさばきとについて、悟らされたのである。だから彼らの間に大きな騒ぎが起こり、その多くが教会に加わった。「しかし」と、だれかが反論する。「兄弟、待ちたまえ。あの群衆に罪を悟らせたのは、異言ではない。ペテロの説教だ」。賢い指摘である！　聖書には、ペテロが十一人と共に立ちあがって説教したとある。彼らはだれに向かって説教していたのか。『天下のあらゆる国々から』来た『信仰深いユダヤ人たち』である。その人々はみな、同じ言葉を話していたのか。『わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか』。十二人は、その人々のすべてに説教したのか。それとも、使徒たちの母国語がわかる一部の人々にだけ説教したのか。『ペテロが十一人の者と共に立ちあがり、声をあげて人々に語りかけた、「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべての人たちよ」』。使徒たちは、どこの大学で、これらの言葉をみな学んだのか。群衆に罪を悟らせたのは異言ではなくペテロの説教だと言った人に、答えてもらおう。答えを待つ間、私はこの問いについて黙っていよう。

「しかし」と、別の人が言う。「あのとき、ペテロのほかに説教した者はいなかったと思う」。よろしい。説教したのが一人でも、十二人でも、百二十人でも、群衆のすべてが説教を聞いたという事実は変わらない。「どうしてわかるのか」と、また別の人が言う。「百二十人の全員が説教したのかもしれない。その中に、それぞれの国の代表がいたのかもしれない。そして結局、なされた説教はみな、それぞれが自分の言葉でしたものだったのかもしれないではないか。パルテヤ人がパルテヤ人に、メジヤ人がメジヤ人に、というように説教したのではないか」。『見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか』。そして、聞いていた人々の中には、ガリラヤ人は一人も挙げられていない（使徒二・九～一一）。

だから読者よ、このときだれが説教し、だれが説教しなかったかは、あなたの判断に任せよう。聖書を開いてみれば、本文からはっきりわかる。あの群衆に罪の自覚をもたらしたのは、御霊が語らせてくださった言葉であった。ある説教者たちは、これを聞くのをなんと嫌うことか！「異言は役に立たない」と彼らは叫ぶ。「異言は混乱を招く。事をなしたのは、ペテロの説教だ」。兄弟よ、主があなたを祝福してくださるように。あなたは理屈をこねてもよい。とっておきの大説教をしてもよい。汗をかいてもよい。しかし、あなたが話し終えたあとも、事実はこれまでどおりそこに立っている。

しかし、イエスの言葉から、私たちはこう教えられる。助け主のあかしのあとで、弟子たちも証言することになっていた。これはもちろん、彼らが自分の言葉でするあかしを指している。ペンテコステのあと、自分と同じ言葉を話す人々に会ったときは、彼ら自身が証言した。ほかの言葉を話す人々に会ったときは、御霊が語らせてくださった。

ある人が反論する。「弟子たちは、ペンテコステの日のあとは、一度も異言を語らなかった」。それなら、無学なただの人であるユダヤ人ペテロが、どうやってコルネリオに説教したのか。コルネリオはカイザリヤの人で、イタリヤ隊と呼ばれた部隊の百卒長である。また、執事ステパノのことはどうするのか。彼はペンテコステのあとで、「リベルテン」の人々、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジヤからきた人々と話したのである（使徒六・九）。思うに、ステ

パノを教会の前に呼び出して、ペンテコステはもう過去のことだと言い渡したほうがよさそうだ。ほら、今度はピリポが、あのエチオピヤ人に説教しに下って行く。向こうに着いたら、異言で話さなければならないだろう（使徒八・二六～三九）。どうも、このホーリネスの説教者たちには手を焼かされる。「おや、ピリポは、異言で話せば教会がめちゃくちゃになることを知っていると思っていたのに。エルサレムには私たちの大きな教会があって、とてもうまくいっていた。ところが、異言を語り続ける者がいて、とうとう当局が手を打った。そして今では、ご覧のとおり、私たちの教会は散らされてしまった。だから言ったではないか（使徒八・一～四）。ピリポは、初めは何か良いことをしそうな様子で出て行った。サマリヤの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。何人かは救われて、聖化された。彼は教会を組織し、その教会はうまくいっている（使徒八・五～一三）。人々にわかるように、どうやってそこで説教できたのかは知らない。しかし聞くところでは、彼は今、異言を語っているそうだ。この働きに害を与えはしないかと心配だ」

「なるほど」と、また別の人が言う。「百二十人の中にいた何人かが、そのあとで異言を語ったことは認めよう。しかし、ペンテコステのあとで聖霊を受けたときに異言を語った者は、一人もいない」。その答えとして、コルネリオの場合（使徒一〇・四六）と、エペソの弟子たちの場合（使徒一九・六）とを挙げよう。

だから、すべての理論を退けて、聖書を書かれているとおりに受け取ろう。まずイエスは、助け主をつかわすこと、助け主が来られるとあかしをされることを約束された。次に使徒行伝を開くと、三つの別々の箇所で、助け主が来られたことがわかる。そしてどの場合にも、助け主が来られるとすぐに、受けた人々が異言を語った。また、御霊のバプテスマのあとにほかの現れが続いたことがあるかを探しても、見つからない。そして、『各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』ことを思い起こす。これらのことから、私たちは確信している。助け主のあかしとは、こういうことである。聖霊は、ご自分が全存在を満たされた人の舌をお取りになる。そしてそれを用いて、聖霊を受けたその人がまったく知らない言葉で語られるのである。もし聖霊が人の舌を用いて、その人のよく知っている言葉で語られるなら、それは受けた人自身のあかしのように見えるであろう。しかし御霊は、いつもほかの言葉で語られるのだから、それが助け主のあかしであることを認めなければならない。それに、イエスは『助け主が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう』と言われた。そのとき意味しておられたのがこのことでないなら、この約束が成就したことを証明する聖句は一つもない。御霊を受けたあとに、助け主のあかしと見なせるほかの現れが続いた例は、一つも記録されていないからである。イエスは、『それが来る時、あかしをするであろう』と言われた。助け主のあかしには、これ以上のものが含まれているのかもしれない。しかし、疑う余地なく、助け主のあかしは、これを第一の土台として含んでいるのである。

こうして私は確信している。『このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』という表現には、多くのことが含まれている。それは、聖化のあかしよりも、御霊の満たしよりも、その両方を合わせたものよりも、はるかに多い。実際、ヨハネ一四章、一五章、一六章での主ご自身の教えを、使徒行伝二章の記録と結びつけて見ると、明らかになる。主は聖霊のバプテスマの約束のうちに、御霊の満たしだけを含めておられたのではない。満たしと共に来た奇跡の現れと、力を授けられることとをも含めておられたのである。使徒ペテロも、明らかにその教えをそのように理解していた。使徒行伝二章三九節で、この祝福は続いていくもの、とどまるもの、永続するものだと断言しているからである。それでは、主の教えとペテロの言葉から出てくる結論は何か。ペンテコステの日に始まり、時の終りまで続く聖霊の働きこそが、聖霊と火とによる本当のバプテスマだということである。その働きには、外なる現れも内なる現れも含まれる。

御霊のバプテスマは、すべての国民に福音が宣べ伝えられるより先になければならなかった。また御霊は、使徒たちとそのあとに続く働き人たちと共に、働き手となられるはずであった。こうしてすべての国民に福音を宣べ伝えるためである。このことを思い起こすと、これらの外なる現れが聖霊のバプテスマの一部として現れたことに、目を見張るような意味があることがわかる。弟子たちと教会は、御霊の満たしの大切さをいつも悟ることになる。一方、救われていない世の

人々は、外なる現れを見ることになる。それは、霊の力が与えられたことを、からだの感覚に示すあかしなのである。

ここで言っておきたい。『御霊の現れ』と感情とには、大きな違いがある。人は『現れ』なしに感情を持つこともあり、感情なしに『現れ』を持つこともある。感情は、霊的なものが肉体的なものにまさることによって起こる。しかし、異言を語ることについては、そうではない。もちろん、異言を語りながら感情が高まることもある。しかし、どちらも他方と同じものではなく、どちらかが他方を引き起こすのでもない。躍り上がること、叫ぶこと、踊ることなどは感情である。一方、異言を語ることは『現れ』なのである。

今日、多くの人が、現れのないまま御霊のバプテスマを受けたと主張している。そして、自分たちは本当に聖霊のバプテスマを受けているのだと世の人々に納得させるために、ありとあらゆる理論と議論を持ち出している。疑いもなく、これらの理論は何千もの人々を満足させている。そうした理論がなければ、その人々は御霊のバプテスマを求め、受けていたはずなのである。次の章では、この点について私たちが出会った理論の弱さを、つまり、その聖書にかなわない教えを指摘したい。

第五章　反論に答える（その一）

1902年7月3日、私は、自分がまったく聖化されたという確かなあかしを受けた。そのように教えられていたので、私はこれを聖霊のバプテスマとして受け入れた。その十四か月後、私はノースカロライナ州ファルコンで、十日間の野営集会を通してG・D・ワトソン博士の説教を聞いた。その間に博士は、「空にすること」と「満たすこと」とには違いがあることを、私にはっきり示してくれた。それでも私は、自分は「満たし」を受けていると信じていた。それ以来、私はこの二つがどちらも聖化に含まれると、たびたび語ってきた。しかし求道者を教えるときには、血がきよめ、それから聖霊が満たしてくださるのだと、注意して伝えるようにしてきた。しかし、聖化されたあとで聖霊を待ち望まなければならないことは、まだわかっていなかった。私は何十回となく、聖霊のバプテスマを受けたとあかししてきた。自分が御霊のバプテスマを受けたことを疑うくらいなら、背中に着ている上着のほうを先に疑う、とまで言ったのである。この点で、私は正直であった。今でも私は信じている。それを私に疑わせることができたのは、その反対を示すみことばの光だけだったのである。

昨年（1906年）の初秋、『ウェイ・オブ・フェイス』に、カリフォルニアのリバイバルについての社説が載った。私の心は、アーメンと言った。まもなく、ほかの報告も載った。私の心は飢え渇いた。そして、同じリバイバルを私の魂にも送ってくださるよう、神に願い求めはじめた。飢え渇いたのは、神がすでに私にしてくださったことを疑ったからではない。この先に、まだ取るべき地があることを見たからである。その祝福について、またそれをどうすれば受けられるかについての教えは、ほとんど載らなかった。だから私は日陰に置かれたままで、ペンテコステの力によってバプテスマを授けてくださるよう、神に願い続けた。ペンテコステを受けた人に初めて会ってから五分のうちに（1907年1月15日）、聖霊は私の舌で語っておられた。その三日後、ある兄弟が私に、聖霊のバプテスマを受ける人はみな異言を語ると信じている、と言った。これは私には驚きだった。そういう方向で考えたのは、そのときが初めてだったからである。私は答えた。自分は何年も前から御霊のバプテスマを受けている。しかし、これはペンテコステの力なのだ、と。兄弟は、私が受けていたのは聖化のあかしであって、御霊のバプテスマではなかったと言った。そこで私は確かめようと決心し、すぐに、教えてくださるよう神に祈りはじめた。御霊は、兄弟の言ったことを確かにしてくださるように思われた。しかし、間違っていてはいけないと恐れて、私は聖書を手に取り、心を神に開いて、みことばを調べはじめた。すると驚いたことに、みことばの教えはこうであった。聖霊のバプテスマを受ける人はみな、御霊が語らせるままに異言を語るのである。そこで私は、以前の考えを喜んで捨て、みことばについての新しい光を受け入れた。まもなく私は、ペンテコステの証拠をめぐって、人々の間に大きな論争があることを知った。その論争は今も続いている。問いはこうである。聖霊のバプテスマを受ける人は、みな異言を語るのか。

私はこの問いについて、両方の側から出された議論に注意を払ってきた。とりわけ、否定の側を支持する人々の議論に注意してきた。この問題について自分の考えを聞かせたいという人に会えば、忍耐強く、真理に心を開いて耳を傾けてきた。だれとも言い争ったことはない。否定の側の記事は、見つけられるかぎりすべて読んだ。これまでに出会ったそうした議論のすべてに、聖書にかなわない教えを見つけた。名の知れた書き手の多くが、「論争は益にならない。人々を混乱させる」と叫んでいる。それなのに彼らは、否定の側の議論で新聞をあふれさせ続けている。見ればすぐにわかる。これらの書き手が恐れているのは、議論が人々を混乱させることよりも、むしろ自分が「打ち負かされる」ことなのである。神はあわれみによって、聖書にかなわない教えを見分ける目を私に与えてくださった。それらの教えは今、名の知れたホーリネスの新聞に載り、講壇から説かれている。そして何千もの人々が、これらの記事のために暗やみに置かれ、聖

霊のバプテスマから遠ざけられている。だから私は、私の知っているかぎりの教えについて、その弱さを、つまりその聖書にかなわない土台を指摘したい。それが神と兄弟たちに対する自分の務めだと感じている。私が自分で出会った反論と、これらの教えの中で目立つようになった反論は、私自身の言葉で示す。しかし、ある一人の書き手だけが出しているのを見た反論も多い。その場合は、書き手の言うことをゆがめていると責められないように、その人の言葉をそのまま示す。反対の立場に立つ兄弟たちのだれかを、名指しすることはしない。だれの体験もけなすつもりはない。ただ、上の問いに否定で答える人々の教えの誤りを指摘したいのである。

最初に挙げる説は、ペンテコステは初代の弟子たちだけのためのものだった、というものである。これには聖書の土台もなく、道理のかけらもない。教会は何世紀もの間、ペンテコステをほとんど失っていた。その事実から人々は、ペンテコステは初代教会だけのためのもので、その後取り去られるはずのものだった、と結論する。兄弟よ、神がペンテコステやその力のどれかを教会から取り去られたことは、一度もない。教会のほうがペンテコステから離れて、その力を失ったのである。しかし神に感謝する。満ちあふれるペンテコステは、今日の私たち一人一人のためにある。ペテロの言葉が、このことを証明している（使徒二・三九）。

否定の側が持ち出す反論の一つは、人々の生活に見つかる欠点である。ペンテコステの証拠を伴う御霊のバプテスマを受けたと言い表す人々の生活に、欠点が見つかるというのである。これは昔から、サタンの大きな論点の一つであった。偽善者だ！　偽善者だ！　これが悪魔の合図である。悪魔はこれによって、いつも何千もの人々を、義認と聖化の体験から遠ざけてきた。悪魔は今の運動に対しても、同じ警告の音を鳴らしている。私たちが肯定の側の土台として示すのは、人々の生活ではなく、みことばである。私たちがあなたに指し示すのは、自分たちの善い行いではなく、ペンテコステである。地上には、ほかの人から欠点を指摘されない人など、一人もいない。ある人に欠点が見えても、それは、神がその人に欠点を見ておられるという証明にはならない。欠点の見つかる人をみな神の家族から外して数えたら、一人も残らないであろう。偽善者だって！　それは否定の側の論拠にはならない！　偽善者は、どんな身分や職業の中にもいるのである。

もう一つの反論はこうである。異言を語る人はみな、自分のやり方に固まっていて、だれにも変えられないように見える。この指摘には感謝する！　彼らは堅く立つ者となったのである（第一コリント一五・五八）。しかし、私は気づいている。ペンテコステの人々を、教えを受けつけないと責める人々がいる。それは、これまで指導者だった人々か、今も指導者になりたがっている人々である。この運動には指導者がいないので、彼らはひどく心を乱している。そして、人々が前のように自分についてこないことを嘆いているのである。

「いや」と、別の人が言う。「彼らもそろそろ堅く立っていいころだと思う。彼らの多くは、何年も前から聖霊のバプテスマを受けたと主張してきた。火のバプテスマを受けたと主張する者もいた。それが今になって、この『異言運動』を追いかけているのだから」。そのとおり。何千もの人が何年も前から聖霊のバプテスマを受けたと主張してきた。そして、そう言い表したことにおいて正直であった。正直だったのは、これらの指導者たちを通して与えられた光の中を歩んでいたからである。しかし今、もっと大きな光が来た。その光ははっきり示している。だれが正直であったか。また、道の一歩一歩を最後まで進むために、自分の理論を犠牲にする気がだれにあるか。光を持たない人は、ペンテコステの証拠のないまま、何年も正直に御霊のバプテスマを受けたと言い表すことがある。そして、あとで間違っていたと気づくこともある。しかし私たちは今、それ自体がみずから言い表すものに出会った。人が思い違いをしたまま、長く言い表していられるものではない。そして、人がペンテコステにしっかりと立ち、御霊がその人の舌を用いてご自分を現されたあとでは、その人に疑わせることはできない。

ジョン・フレッチャー、ウィリアム・ブラムウェル、チャールズ・G・フィニー、ジョナサン・エドワーズ、ハドソン・テーラー。多くの人は、こうした人々のところで引っかかっている。「彼らが聖霊のバプテスマを受けていなかったなどと、どうして言えるのか」。これは、ホーリネスに反対する教えとそっくりに聞こえる。数年前、聖化について、実に多くの人がこれと同じ釘に引っかかっていた。「ホーリネスについて一度も聞かなかった人々は、どうなったのか」

と、何千もの人が問うてきた。しかし、上に挙げた人々について、私たちはこう言いたい。彼らは、ほかの多くの人々と同じく、偉大で善い人々であり、その時代に神にすばらしく用いられた。しかし、彼らがペンテコステの聖書の証拠を持っていなかったのなら、聖霊のバプテスマを受けていたとは聖書に基づいて言えない。それに、言っておきたい。フレッチャーもブラムウェルも、ほかのだれも、私の基準ではない。私はみことばの上に建てているのである。神が光を与えてくださるとき、自分がその中を歩むまでは、ほかの人がその中を歩んだか、今歩んでいるかを問う権利は、私にはない。

また否定の側は言う。「偉大なホーリネスの説教者や指導者の多くは、私たちの側にいる」。もちろん、偉大で善い人々の考えには重みがある。しかし実際のところ、私たちの最も偉大な教師たちも、聖霊のバプテスマについては互いに意見が分かれている。私がこれまでに会った中で、聖霊について最も偉大な教師の一人は、自分が聖化されたとは主張していなかった。彼は聖化を第二の恵みのわざとして教えなかった。それでも、御霊のバプテスマを受けたと主張していた。私は一週間の集会を通して彼の説教を聞いた。彼は毎回、聖霊について説教した。彼に近づくたびに、私は必ず神の力を感じた。これを、あなたはどうするのか。ある人は、私たちはみな回心のときにバプテスマを受けると主張する。回心のあとだと言う人もいれば、聖化されるときだと言う人も、聖化されたあとだと言う人もいる。バプテスマを受ける人はみな異言を語ると言う人もいれば、語らないと言う人もいる。だれもが、自分の立場をみことばで証明できると信じている。では、この人々のうちのだれが、ペンテコステの聖書の証拠を持っているのか。ほかのどの恵みの段階の証拠ともはっきり区別された証拠をである。

ある人々は言う。今ペンテコステを受けて異言を語っているのは、大部分が、これまで信仰の体験が一度も定まったことのない人々だ、と。そう言う人々は、きっと正直なのであろう。しかし、確かに間違っている。一方で、私は事実として知っている。この国で最も敬虔で深く霊的な人々、何年も神に忠実であった人々が、真っ先にペンテコステを受けてきた。そして、フリーメーソンの説教者や、かみたばこをかむ説教者は、私の知っているかぎり、これまでみな今の運動と戦ってきたのである。

こういう人々を引き合いに出して、私たちに反論する人もいる。ペンテコステを受けて異言を語ったのに、バプテスマを受ける人がみな異言を語るわけではない、と言う人々である。一つ尋ねたい。そのような教えのもとで、どれだけの人がペンテコステの光に導かれ、バプテスマに飢え渇いたか。そしてそれを求めて、ペンテコステの証拠を伴って聖霊を受けたか。ごくわずかだと思う。そういう人がいても、たいていは、ほかのところからリバイバルのことを聞いて、飢え渇くようになった人々である。たいていの人は、もともと「異言」に偏見を持っている。だから、そのような教えを聞くと安心して、こう言う。「ああ、それなら、私は聖霊のバプテスマを受けているのだから、『異言』は要らない」。こうして彼らは、今のリバイバルから、前よりもいっそう遠ざかってしまう。私は、自分はバプテスマを受けていると堅く信じていた人々に、多く会ってきた。しかし彼らは、真理が説かれるのを聞いて、自分は間違っていたと判断した。そしてバプテスマを求め、ペンテコステの証拠を伴って受けたのである。もし上の問いへの否定の答えが彼らに説かれていたなら、自分がバプテスマを受けていないとは、決して納得しなかったであろう。ペンテコステを受けて異言を語ったのに、否定の側に立った人々を、何人か知っている。彼らは今のところ、ほかの人々をその体験に導くことができていない。ああ、私たちは、人々がペンテコステに飢え渇くように真理を示さなければならない！

肯定の側を説けば働きを損なうことになる、と私たちは言われる。しかし事実は、その反対を証明している。G・B・キャッシュウェル兄弟が、こう話してくれた。ノースカロライナ州ダンでペンテコステの集会が開かれていたとき（1907年1月）のことである。彼は、すぐにノースカロライナ州ハイポイントへ来てほしいという急ぎの手紙を受け取った。そこに着いてみると、ペンテコステがその地にも及び、人々が聖書の証拠を伴って御霊のバプテスマを受けていた。ところが、ある人々が忍び込んで来て、こう教えはじめていた。「兄弟たち、この運動は神から出たものだ。しかし、異言を語ることが御霊のバプテスマの証拠だと教えるのは、大きな間違いだ」。飢え渇いてバプテスマを求めていた人々は、祭壇に来なくなり、混乱が起こった。集会はキャッシュウェル兄弟に任された。彼が肯定の側を説くと、混乱は消え、人々は御霊の一致に戻った。そこにいる間に、

キャッシュウェル兄弟は、すぐにバージニア州ダンビルへ来てほしいという電報を受け取った。着いてみると、ハイポイントで見たのと同じありさまであった。彼は集会を引き受けて、真理を説きはじめた。結果は、ノースカロライナ州ハイポイントのときと同じであった。似たような例は、ほかにもたくさん挙げることができる。だから私は確信している。もし私たちがみな否定の側を説いたら、リバイバルは止まってしまうであろう。否定の側を説く人は、心の中でリバイバルが止まることを望んでいる人々のほかには、ほとんどいない。

ある説教者が話してくれた。私の知っているある姉妹が彼の集会に来て、ペンテコステに飢え渇いている様子で、彼にもそう言っていた。ところが数日のうちに、彼女はこの問いに否定で答える説教を聞いた。説教が終わると、その説教をした人は、聖霊のバプテスマを受けている人はみな立つようにと言った。すると、立った人々の中に、この同じ婦人がいたのである。

このリバイバルが初めて大西洋岸に来てまもなく、ある小さな町でペンテコステの集会が開かれた。私はその町の人々をよく知っている。この集会で聖霊を受けた人が何人かいた。集会が終わったあとも、ほかの人々は求め続けており、町はいくらか揺り動かされていた。その後まもなく、あるホーリネスの説教者がこの町に来て、満員の会衆に説教した。会衆の中には、メソジスト、バプテスト、万人救済派、ホーリネスと、町のすべての教派の人々がいた。その集会について、彼自身がこう書いている。「ここではりっぱな会衆が集まり、すべての教派の人々が大勢来ていた。そして、みな同じように集会を楽しんでいるようだった」。そのあとで私はその町を訪ね、その説教者自身の言葉がほぼ正しいことを知った。聞いたところでは、町のある男が説教者に五ドルを渡し、翌日だれかに、あれは今までに聞いた中で最高の説教だったと言ったという。その男がホーリネスをひどく嫌っていることを、私は知っている。ほとんど不信者だと聞いている別の男は、あの説教は五ドル積まれても聞き逃したくなかった、と言った。万人救済派の人々も、同じように楽しんだようであった。しかし、これほど広く支持されるとは、彼はいったい何について説教したのか。その話の中心は、聖霊のバプテスマを受ける人がみな異言を語るわけではない、ということであった。その日、だれかバプテスマを受けた人がいたのか。私は答えを待っている。

私たちは、「賜物」を「与え主」よりも高めていると言われる。これは、今のリバイバルをまったくゆがめて伝えるものである。私たちが人々に言っているのは、こういうことである。聖霊を求めなさい。聖霊が来られれば、あかしをしてくださる。だから、御霊があなたの舌を用いてご自分を現されるまで、待ち望みなさい。そして、『更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい』。神は、ふさわしいとお考えになるとおりに、それを加えてくださる。

ある人々は、ペンテコステの証拠は御霊の実だと言い、その裏づけとしてマタイ七章二〇節を引く。『このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである』。だれを見分けるのか。聖霊のバプテスマを受けた人々をか。まったく違う。ここには、御霊のバプテスマのことは何も言われていない。実は義認の証拠であり、義とされた人はみな実を結ぶ。この実は、聖化において全きものとされる。それはペンテコステの証拠ではない。『すると、一同は聖霊に満たされ、実を結びはじめた』とは、どこにも書かれていない。

多くの人が尋ねる。ペンテコステのほかの何かの現れも、異言を語ることと同じように、バプテスマの証拠になるのではないか。ペンテコステの日に、ほかにどんな現れがあったのか。知恵や知識や信仰などの賜物が授けられたことについては、一言も言われていない。聖書の中で、だれかがバプテスマを受けたという記事をすべて調べてみるとよい。そのとき異言の現れがなく、ほかの現れだけが挙げられている例は、一つも見つからないであろう。ある人は、自分がバプテスマを受けていることを知っている、神がみことばを信じられるようにしてくださったからだ、と言う。明らかに彼は、悪霊どもがそれ以上のことをしているのを忘れている。悪霊どもは『信じておののいている』のである（ヤコブ二・一九）。

ある人はこう言う。「二年ほど前、主は私を聖化してくださり、何週間かあとで、そのあかしを与えてくださった。私はこの生活の中で、恵みの一つの段階から次の段階へと進み、その道が栄光に満ちていることを知った。そして、救われ、聖化され、御霊に満たされたとあかししてきた」。それから彼女は、カリフォルニアのリバイバルのことを聞いて飢え渇くようになった、と語る。自分が御霊のバプテスマを一度も受けていなかったことを知り、御霊を求めはじめたと

いう。ある日、神に祈りを注ぎ出していると、彼女は笑い出した。それは彼女にとって初めての体験だったという。彼女は笑いに笑って、しまいに笑い終えた。彼女の話では、笑いがやんだとき、飢え渇きがなくなっていることに気づいた。そしてその場で、内にとどまってくださる聖霊のゆえに神に感謝したという。彼女の挙げる現れは、笑うことだけである。笑うことは、ペンテコステの聖書の証拠なのか。『一同は聖霊に満たされ、笑い、あるいは泣き、あるいはみことばを信じはじめた』と書いてある聖句を示してほしい。聖書にかなったほかの現れを示してくれれば、私たちはそれを受け入れる。使徒たちの集会について、聖書が『彼らは聖霊に満たされたが、異言は語らなかった』と書いている記事を、一つでも示してほしい。そうすれば私たちは、ホーリネスの新聞に最近載ったそのような報告を、十いくつも示そう。一度、聖書の証拠なしにバプテスマを受けたと主張して、間違っていたと気づいたとする。それなら、二度目に聖書の証拠なしに御霊を受けたと主張するときも、間違っているおそれが大きいのではないか。

「ある人に知恵や信仰や解き明かしの賜物があるとしよう。それでも、その人はバプテスマを受けていないと言えるのか」。その人を連れて来てほしい。話はそれからにしよう。賜物についての論議は、次の章に譲る。もっとも、だれかが最もすぐれた賜物の一つを受けたら、その人はホーリネスの人々の大部分から、ひどく迫害されるであろう。

ある人は言う。「七年前、私は確かに聖霊のバプテスマを受けた。しかし今、私はもう一つのバプテスマを熱心に、いや、今か今かと待ち望んでいる」。みことばは、『バプテスマは一つ』だと言っている。

ある人々は忠告する。「集会で異言を語るときは、一度に二、三人より多くの人に語らせてはならない。混乱を招くからだ」。もしそういう人々がペンテコステの日にその場にいたら、御霊が一度にあまりに多くの人を通して語られたといって、責めたことであろう。

ある人はこう書いている。「書簡には、異言が御霊の満たしのきわだった証拠として挙げられていることは、一度もない。書簡こそ、みことばのほかのどの部分にもまして、この時代の教会を導くために与えられたものである。そのことを思えば、これはいっそう示唆に富んでいる。これらの書簡の中では、恵み深い聖霊のことが何百回も言われている。もし異言が御霊のバプテスマに欠かせない証拠であるなら、その事実はきっとたびたび述べられているはずである。ところが、一度も言われていない」

上の言葉をそのまま受け取るなら、ペンテコステの証拠は何もない、と結論しなければならない。書簡のどこにも、何の証拠も示されていないからである。教会は、書簡の中に見いだせない聖句には従ってはならない、などということは、これまで知らなかった。

ところが、私たちはみことばのほかのどの部分よりも書簡に従うべきだと考えているこの書き手が、こう続けている。「もしこの賜物が聖霊のバプテスマの証拠として欠かせないなら、イエスが聖霊を持っておられたことは、どうしてわかるのか。イエスがこの賜物を用いられたという証拠は、探しても見つからないのである。私たちに本当に欠かせないものは、すべて、私たちの模範であるキリストのうちにあった。私たちはそう信じて喜んでいる。だから、キリストに異言の賜物が現れたという記録がないことは、非常に意味深い」

上の言葉への答えとして、『アポストリック・エバンジェル』誌に載ったD・キニーの文章を引こう。「イエスは、異邦人の言葉が要るほど異邦人の間に行かれたことはなく、学校にも行かれなかった。そのイエスでさえ、文字を知り、ヘブル語の律法を読むことがおできになった（ヨハネ七・一五、ルカ四・一七）。この律法の書はヘブル語で書かれていたが、イエスの母国語はシリア語であった。庶民の家には本がなく、印刷機もなく、ヘブル語の読み方を学ぶ機会もなかった。そういう機会があったのは、金持ちや祭司や律法学者たちの間だけであった。イエスは井戸のそばで、無知で堕落したサマリヤの女と、疑いもなく彼女自身の方言で話された。スロ・フェニキヤの女や、ガダラ人の場合も同じである。確かに聖書は、これらの出来事について『異言』という言葉を使ってはいない。聖書は、好奇心を満たすために書かれたのではない。もしそうなら、ヨハネが思ったように、イエスのなさったことを記す書物を、世界も収めきれないであろう。また、学者の理屈や、信じない者のあら探しに応えるために書かれたのでもない。貧しい者、学問のない者、素朴で幼な子のような信者のために書かれた

のである。そのような信者は、知恵のある者や賢い者に隠され、幼な子にあらわされた奥義を知ろうと求めている」

ある人は、バプテスマのヨハネは生まれたときから聖霊に満たされていたのに、一度も異言を語らなかった、と言う。これは本当か。確かに彼については、『彼は母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされている』と言われていた。しかし彼は、ペンテコステのバプテスマを受けてはいなかった。『御霊がまだ下っていなかった』からである。

第五章　反論に答える（その二）

私たちの前に、「彼は『わたしたち』についてこない！」という見出しの記事がある。その中でこの書き手は、ホーリネスの人々の間にこれほど大きな分裂があることを嘆き、こう続けている。

「異言運動は高い頂に立って、聖霊のバプテスマの本物の聖書の証拠があることを神に感謝している。ほかの人々には理屈の上の証拠しかない、というのである。イエスは、すべての弟子たちが聖化され、一つになるようにと祈られた。それは、世が見て、神がイエスを世の救い主としてつかわされたことを知るためであった」

「かつてホーリネスの人々は、名ばかりの諸教会に一致と兄弟愛がないことを嘆いた。そして、その病を治す万能薬として、ホーリネスを勧めたものである。ところが、ああ、兄弟たちよ、今私たちの間にはっきり見られるのは、自分たちの運動、教会、シボレテへの熱心である。それは、神への熱心にまさっているのである」

上の文では、今のリバイバルを推し進める人々の霊が、ヤコブとヨハネに現れた霊になぞらえられている。悪霊を追い出している者を見たときの、二人の霊である（マルコ九・三八）。この書き手は、ホーリネスの人々の間に分裂を起こすくらいなら、私たちが受けた光をわきに置くほうがよい、と教えている。それなら、思慮深いおとめたちも、仲間を分けるくらいなら、入れものに油を用意しないほうがよいことになる。そして、愚かなおとめたちとの一致を保つために、できるかぎりのことをすべきなのである。兄弟たちよ、私たちは、今世界に広がっているリバイバルの恵みにあずかった。その私たちが、反対の立場に立つ兄弟たちを優しく思うあまり、真理の全体を示さずにおくべきなのか。そうして、ホーリネスの陣営の一致を保とうとすべきなのか。それとも、キリストへの愛のゆえに、力のかぎりを尽くしてこのリバイバルを推し進めるべきなのか。すべての造られたものに福音を宣べ伝えるべきなのか。私には、この兄弟のほうがヤコブとヨハネの立場に立っていて、ペンテコステの人々が悪霊を追い出しているように見える。

私は、何人かの人がこんなふうに語っているのを読んだ。「隣人がペンテコステの証拠として異言を語らなければならなかったのは、それでよい。人々は、彼が御霊のバプテスマを受けたとは、一度も信じていなかったのだから。私はというと、主に感謝する。異言を語る必要はなかった」。彼らはそこで話をやめている。しかし、自分の行いが、自分が御霊を受けていることの証明になると、はっきりほのめかしている。こうして彼らは、自分の行いを御霊のあかしよりも重く見ているのである。

ある人はこう書いている。「私たちの最も聡明な寄稿者の一人で、成功しているリバイバルの働き人が、知らせてくれた。この人は、ペンテコステのリバイバルと異言の賜物を信じている。耳が聞こえず口のきけない何人かの人々が、最近ペンテコステのバプテスマを受けたが、異言はまったく語らなかったという。それでも、その場にいただれも、彼らの体験が本物であることを疑わなかった」

この人々は、疑いもなく、ある分量の御霊を受けたのであろう。しかし、彼らがバプテスマを受けたことを証明するものは、何もない。私は信じている。口のきけない人でも、聖霊のバプテスマを受けるなら、御霊はその舌でご自分を現されるのである。ある人は言う。「あなたは、この気の毒な口のきけない人たちの体験を、あえて軽んじるのか」。私は答える。聖霊を軽んじるくらいなら、だれの体験でも軽んじるほうがよい。聖霊は、イエスが言われたとおり、来られればあかしをされるはずである。ある心に来られたのに、それをなさらなかったと言えば、聖霊を軽んじることになるのである。

ある人は、カンザス州トピーカで1900年1月4日に開かれた集会の記録を引いている。そこでは、異言が語られただけでなく、炎のように分かれた舌が見えたという。そして、この書き手はこう論じている。「外に現れるしるしが、どんな

場合にもペンテコステのバプテスマの証拠でなければならないとしよう。それなら、異言を語った私たちの多くも、まだペンテコステの満ちた祝福に達していないことになる」

さあ、聞いてほしい。イエスは、『全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ』と言われた（マルコ一六・一五）。これは人間の目から見れば大事業であり、不可能でさえある。イエスはまた言われた。『ただ、あなたがたは、あなたがたの上にくだる聖霊の力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう』（使徒一・八、欄外の読み）。明らかに、御霊のバプテスマに伴うとイエスが言われた「力」とは、すべての造られたものに福音を宣べ伝える力である。百二十人はこの力を、学校でではなく、ペンテコステの日に受けた。その力は、彼らの上にとどまった炎の舌によって象徴されていた。前にも述べたように、私たちが実体をつかめるようになると、神はすぐに象徴を取り去られる。このときの炎の舌は、すべての造られたものに福音を宣べ伝えるために聖霊が授けられる力を、象徴していた。それは私には、疑いもなくこう証明している。のちに御霊のバプテスマを受ける人はだれでも、同じように、神が召される地のどこででも、あかしをする力を受けるのである。彼らの上にとどまった炎の舌は、御霊の力の象徴であった。異言を語ることは、いつまでも残る実体なのである。

ある人々が、異言を語るとは、弟子たちがのろうのをやめて神をほめたたえはじめたという意味だ、と言うのを聞いたことがある。これには答えるまでもない。事実を前にして、正直な人がそんなことを言うとすれば、その理由は無知のほかにない。

次は、マルコ一六章一七、一八節である。アルフォード主任司祭や、ほかの名の知れた注解者たちは、こう言っている。「これが福音書記者マルコの書いたものであるかどうかは、疑わしい」。けっこうである。そこを除きたいなら、除けばよい。私たちの立場を証明する聖句は、ほかにいくらでもある。取り入れたいなら、それは私たちの教えとも、ほかの聖句とも、完全に一致している。ある人は、この箇所によれば、回心しただけの人々も、つまり信じる者はみな、ほかの人と同じように異言を語ることになる、と言う。イエスは言われた。『わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。（これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである）』（ヨハネ七・三八～三九）。ここでは、信じる者は聖霊を受けると言われている。そしてマルコは、信じる者は新しい言葉を語ると述べている。そのつながりが見えるか。賢い人には一言で足りる！

ある人々は言う。異言を語ると主張する人は多いが、自分たちには、わけのわからないおしゃべりにしか聞こえない、と。彼らは忘れているようである。『世には多種多様の言葉があるだろうが』（およそ四千あると言われる）、『意味のないものは一つもない』（第一コリント一四・一〇）。洗練された言葉は、わずかしかない。しかし、暗い地のジャングルや海の島々には、何千もの言葉がある。それを聞けば、あなたにはわけのわからないおしゃべりにしか聞こえないであろう。それでもそれらは、人類のさまざまな枝の人々が話している言葉なのである。

「不信者たちは一般に、この神の働きに激しい憎しみを示している。近くの町ウィッティアでは、そこの指導者が家庭礼拝のときに主をほめたたえたが、その声が大きすぎて隣人の気にさわった。隣人は彼を治安判事の前に訴え、判事は彼に三十日の重労働を言い渡した。彼は十二人のメキシコ人と共に、鎖につながれて働かされた。神は彼に異言を与えてくださった。それで彼は、メキシコ人たちのために祈り、彼ら自身の言葉で語ることができた」（W・C・ダンブル、『ウェイ・オブ・フェイス』1906年11月1日）。

ここに、オハイオのある人が書いた小冊子がある。その中で彼はこう言う。「本物の異言の証拠は欠けている。この点について、確かなこととして述べるのは、私の見てきた地元の状況に限ることにする。出回っている文書の中で、異言について私たちに届く報告は、すべてを信用するわけにはいかない。そう言えるのは、私たちが確かに知っているからである。発声器官から出る奇妙な音は何であれ、ためらいもなく本物の異言だと言われている。しかもたびたび、それが何語であるかまで言われているのである」

この人は、文書を通して私たちに届く報告を信用してはならないと言う。もしそうなら、なぜ彼は自分の本を書いたのか。ほかの人を信用できないなら、どうして彼を信用できよう。彼は、この問題について信用できるのは自分と自分に同意する人々だけだ、という印象を与えようとしている。報告は信用できない、確かなこととして述べるのは自分の見てきた地元の状況に限る、と言ったあとで、彼はこう言っている。「しかし、確かな筋から聞いたところでは、ロサンゼルスのかなりの数の例のうち、本当の言葉だとわかったものは一つもなかった。ゴドビー博士もまた、自分で試してみて本物の言葉の証拠が見つからなかった例を、いくつか挙げている」。おわかりのように、彼は、自分の考えと合うかぎりは報告を信用できるのである。信用するわけにいかないのは、自分の言うことに反する報告だけなのである。

私たちの机の上には、確かな裏づけのある手紙が何通かある。異言を語り、その言葉を話す人々に理解された人々のことを伝える手紙である。しかし、そのような記事は使徒信仰の新聞にときどき載っているので、ここでは紙面を割かない。

ここに、「異言の賜物と、その理由」という見出しの記事がある。この書き手は、ペンテコステの日の弟子たち、コルネリオとその家族、エペソの弟子たちのことを語る。そして、彼らがみな聖霊を受けたときに異言を語ったのは、ほかの国の言葉を話す人々がその場にいたからだ、と言う。彼ははっきりほのめかしている。ほかの国の言葉を話す人がだれもその場にいなければ、聖書のとおりに聖霊を受ける人も異言を語らない。また「異言の賜物」は、ほかの国の言葉を話す人々がいるときでさえ、あまり価値がない、というのである。同じページで彼は、今の運動が神から出たものであることを認めて、こう言っている。「聖霊を受けて、異言を語っている人々もいる」。思い出してほしい。ここにいる私たちは（とくにこのリバイバルが大いに広がっている田舎では）、みな同じ言葉を話している。それなのに彼は、ここで聖霊を受けるときに異言を語る人々がいるのはなぜなのか、私たちを暗やみに置いたまま説明していない。のちに同じ書き手は、ひとりで森の中で祈っていたとき、知らない言葉で語った、と言っている。それは自分にとって、聖霊のバプテスマの特別な証拠ではなかった、数週間前にすでに聖霊を受けていたからだ、と彼は言う。そして彼は、こう付け加えている。「なぜ神が私をこのように扱われたのか、まだはっきりとは示されていない」。さて、彼は、ペンテコステの日、コルネリオの家、エペソで異言が語られたことについて、聖書の理由と称するものを挙げた。この三つの場合に聖書の理由を挙げたのなら、自分の場合にも聖書の理由を挙げることができるはずである。最初の記事で彼は、異言に聖書の理由があるのは二つの場合だけだと教えている。ほかの国の言葉を話す人々がいる場合と、不信者へのしるしとしての場合である。そして彼は、ひとりで森の中にいたときに異言を語った。だから私たちは、彼自身の場合に当てはまる聖書の理由を、忍耐強く待っているのである。

次は、コリントの教会である。多くの人が言っている。ここに、異言があふれていた教会がある。それなのに、彼らはみな肉に属する者であり、キリストにある幼な子にすぎなかった、と。多くの貧しい無学な人は、この議論につまずいて、確かに異言を語ることはペンテコステの証拠ではない、と判断するであろう。しかし、聖書をよく知っている人々は、ここでこの教会の状態についての真理の一部が隠されていることを知っている。真理の全体が語られれば、それは肯定の側に有利な、強い論拠となるであろう。五つの事実を正しく考えるなら、この教会の状態に大きな光が投げかけられるであろう。

一　彼らは異教から回心した人々であった。だから教えを必要としていた。ゴドビー博士はこう言っている。「覚えておかなければならない。コリントの教会員の大部分は異邦人で、異教から回心してまだ日が浅かった。だから、教会を成す人々は、いくらか粗野で荒削りであった。コリントの教会には、ユダヤ人も多くいた。それはまさに、あらゆる国の人々の巨大な寄せ集めであった。彼らは、ユダヤ人と同じく、このギリシャの大都会に集まって来ていたのである。彼らはわずかな例外を除いて非常に貧しく、社会の下層に属し、貧民街から回心した人々であった」

二　『現に聞くところによると、あなたがたの間に不品行な者があり、しかもその不品行は、異邦人の間にもないほどのもので、ある人がその父の妻と一緒に住んでいるということである』（第一コリント五・一）。これらの人々は確かに罪人であった。パウロは、彼らが回心していない異教徒よりも悪いと言っている。

三　『兄弟たちよ。わたしはあなたがたには、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話した』（第一コリント三・一）。

四　『パウロ（中略）から、コリントにある神の教会、すなわち、キリスト・イエスにあってきよめられたかたがたへ』（第一コリント一・一～二）。『あなたがたの中には、以前はそんな人もいた。しかし、あなたがたは、洗われ、きよめられた』（第一コリント六・一一）。

五　『あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである』（第一コリント六・一九）。

私たちの前にある一つの文章には、こう書かれている。「確かに、この人々の間では、異言の賜物がペンテコステの証拠であったはずはない。彼らは聖化されてさえいなかったのである。まして、聖霊が入って来て内に住まわれることなど、言うまでもない」

なぜこの書き手は、彼らが回心してさえいなかった、と言わなかったのか。彼は、異言を語った人々が聖化されておらず、聖霊に満たされてもいなかったという証拠を持っていた。それとちょうど同じだけの証拠を、彼らがみな罪人であったことについても持っていたのである。

第一コリント一三章が上の主張を否定している、と考える人々もいる。これは次の章で学ぼう。

次は、ペンテコステの記事である。非常に多くの人が、問題に決着をつけるものとして、この記事に頼っている。サマリヤ人の場合のことである（使徒八・五～二五）。この記録を見ると、彼らが異言を語ったとは書かれていない。しかし、彼らが異言を語らなかったと書いてあるところも、見つからない。記録を書かれているとおりに正直に見るなら、二つの説を引き出すことができる。そしてどちらも、もう一方と同じだけ道理にかない、同じだけ正当である。

一　彼らは異言を語らなかった。

二　彼らは異言を語った。

注意深く調べて、このどちらかの説に聖書の土台を見つけることができれば、その説はもはや説ではなく、堅く立った聖書の真理となる。そして二つの説は互いに矛盾するのだから、もう一方の説は聖書にかなわないと言わなければならない。あなたが正直なら、ここまでは私に同意するはずである。

では読んでみよう。『そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手をおいたために、御霊が人々に授けられたのを見て、金をさし出し、「わたしが手をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力をわたしにも下さい」と言った』（使徒八・一七～一九）。

シモンが見たことを表すギリシャ語は、「イドン・デ・ホ・シモン」である。ギリシャ語の「イドン」は、文字どおりには、知ること、どの感覚によってでも知覚することを意味する。それは、私たちの「見る」という言葉よりも強い言葉である。それは、シモンがただ見ただけでなく、ある特別な種類の奇跡の力を耳でも聞いたことを示している。シモンは知覚したのである。ペンテコステがこのサマリヤ人たちにくり返されたことを、知らされたのである。彼は、この奇跡の力が使徒たちの按手に続いて現れたのを見た。だから、自分もこの力を持てるようにと、使徒たちに金をさし出したのである。ピリポが導いたすばらしいリバイバルでも、奇跡の力が現れ（七節）、大きな喜びもあった（八節）。しかしシモンは、それらのもののために金をさし出しはしなかった。ここでシモンは、金を払ってもよいと思うものを見たのである。それは何であったか。次はアルフォード主任司祭の言葉である。私はこれを、『アポストリック・エバンジェル』誌に載ったJ・H・キングの文章から写している。

「これに類する箇所は、一九章五、六節だけである。そこでは、御霊の奇跡的な賜物がパウロの按手に続いたことが、はっきり言われている。そして、一八節の『イドン』という言葉は文字どおりに取らなければならないから、ここでも同じことが暗に示されている。この二つのことに注意しなければならない。したがって、その結果は目に見えるものであった。だから、使徒たちの按手の結果は、御霊の内なる賜物ではなく、外に現れる奇跡的な賜物だったのである」

では、なぜアルフォード主任司祭は、このように書いたのか。彼は、「聖霊のバプテスマを受ける人はみな異言を語る」ことを証明しようとしていたのではな

い。それでも彼は、ギリシャ語から結論しなければならない、と言っている。エペソの人々のバプテスマに伴ったのと同じ現れが、サマリヤ人のバプテスマにも伴ったのである。エペソの人々の場合には、はっきりと『彼らは異言を語った』と書かれていることを、思い起こさなければならない（使徒一九・六）。

ペンテコステを振り返ってみると、ペテロは『これは預言者ヨエルが預言していたことに外ならない』と言っている（使徒二・一六）。「預言していたこと」とは、ペテロがそれに続けて引く預言を指している。三三節では、「これ」が説明されている。『このことは、あなたがたが現に見聞きしているとおりである』。七節は、彼らが何を見たかを告げている。『見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか』。一一節は、彼らが何を聞いたかを告げている。『あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞く』。すると、ペテロの説明によれば、ヨエルの預言が成就するには、まさにこのことが必要なのである。「あなたがたが現に見聞きしているこのことが、ヨエルの預言していたことなのである」。シモンが、サマリヤ人は聖霊を受けたと確信したのは、彼が見て、聞いた（イドン）からである。あなたは、サマリヤ人の体験にまで達しているか。

次は、パウロの場合である。パウロのペンテコステについては、「異言」のことは何も言われていない、と私たちは言われる。しかし、彼が聖霊を受けたと書かれているところも、どこにも見つからない。使徒行伝九章一～一九節に記されている出来事を自分で語ったときにも、彼は、聖霊を受けたとは一度もあかししていない。「しかし」とあなたは言う。「一七節のアナニヤの言葉から、彼が聖霊のバプテスマを受けたことは、暗に示されている」。彼が聖霊を受けたことは、推論するほかない。それなら、彼がペンテコステの完全な現れを伴って聖霊を受けたと推論しても、同じように正当である。パウロ自身が『わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れる』と言っているのだから、なおさらである（第一コリント一四・一八）。

すべての人が同じ賜物を受けるわけではないことを証明しようとして、多くのことが書かれてきた。これは、私たちの見たかぎり、だれも否定していない。私たちは、すべての人が異言の賜物を受けると教えているのではない。しかし、『各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』と教えている。また、聖書を導きとするなら、ペンテコステに続く現れはいつも異言を語ることだ、と教えている。だから、私たちがみな異言の賜物を受けるわけではないことを証明しようとして書かれたものは、どれも私たちの立場にまったく影響しない。したがって、ここで私たちが答える必要はない。

私たちは、異言を語ることがペンテコステの誤りのない証拠だと教えている、と責められる。「誤りのない証拠」というのが、悪魔には決してそれをまねることができないという意味なら、私たちはそう教えてはいない。しかし、こういう意味なら話は別である。聖霊がある人の舌を、その人の思いのままにならないようにお取りになり、それを用いて、その人のまったく知らない言葉で語られる。そうであれば、私は言う。それは、その人が聖霊のバプテスマを受けたという、まぎれもない証拠である。

私たちの机の上には、いろいろな人の書いた記事がたくさんある。御霊のバプテスマを受ける人がみな異言を語るわけではないことを、自分は知っている、と述べる記事である。しかし彼らは、自分が知っているということのほかには、何の議論も、理由も、聖句も、その主張の土台も示していない。もちろん、そのような根拠のない主張には、答える必要はない。

ここにも何本かの記事がある。その書き手たちは、自分の説を証明しようとしていろいろな聖句を曲げ、何度もはっきりと自分の言葉に矛盾している。しかし、ここでその詳しいことに立ち入る必要はない。今の運動の教えに対して持ち出されている論点のほとんどすべてを、私は公正に考え、答えてきたと思う。ただ、いくつかはあとの章に回してある。否定の側が持ち出している目立った論点を、落としているかもしれない。そうだとすれば、私がまだそれを見聞きしていないか、心ならずも出典をなくしてしまったからである。私は一章をまるごと、反論に答えることに割いた。それは、私たちの教えへのあまり重要でない反論をいくつか挙げるだけで済ませるためではない。反対の立場に立つ兄弟たちのおもな教えについて、読者を暗やみに置いたままにするためでもない。私は、彼らの反論の土台を注意深く探してきた。そして、彼ら自身の言葉を多く引くことで、彼らの本当の立場を読者の前に示そうと努めてきたのである。

では、今の状況を少し振り返ってみよう。そのうえで、否定の側に立つ兄弟たちに、一つ問いたい。

肯定の側を説いた結果、今日起こっているおもなことは、次のとおりである。

一　聖化された多くのクリスチャンが飢え渇き、聖霊のバプテスマを求めて受け、異言を語っている。

二　何年も聖化を主張してきた多くの人が飢え渇き、聖霊を求めている。そして、自分が一度も聖化されていなかったか、信仰から離れていたことに気づく。それで神の前にひれ伏し、神の目にきよい者とされている。それから聖霊を受け、異言を語っている。

三　何年も聖化を主張してきた多くの人が、罪を示されて聖霊を求めはじめている。しかし、聖霊を受ける前に、自分の生活の多くの悪を正さなければならないことを知る。そうする気がないので、彼らは求めるのをやめる。そして、自分はすでに御霊のバプテスマを受けていると主張して、今のリバイバルに堅く反対する立場を取っている。

四　ホーリネスの説教者だと主張する人々の中には、正体を見抜かれて、その商売をやめる者も出ている。

五　わずかな罪人が回心し、それより少し多くの人が聖化されている。そして、回心した人や聖化された人のほとんどすべてが、聖霊のバプテスマを受けて異言を語っている。

六　世の人々は驚き、いぶかって言う。『これは、いったい、どういうわけなのだろう』。ほかの人々はあざ笑って言う。「この人たちは狂信に陥った。気が狂っている。偽教師だ。悪魔に用いられている。当局がやめさせるべきだ」。

否定の側を説いた結果として起こっていることのいくつかは、私たちの知りえたかぎりでは、次のとおりである。

一　聖化された多くのクリスチャンが、一度も異言を語ったことがないのに、自分は御霊のバプテスマを受けていると結論している。

二　多くの人が、ペンテコステの現れなしに聖霊のバプテスマを受けたと主張している。それはまさに、彼らの大部分が何年もしてきたことである。

三　生活に悪を抱えたまま、何年も聖化されていると主張してきた多くの人々が、そのような説教を聞いて大いに喜んでいる。かみたばこをかむ人々や、フリーメーソンの支部の会員などである。

四　この国の善良な人々の多くが、否定の側を唱えるホーリネスの新聞や説教者に、うんざりしはじめている。

五　この種の説教のもとでは、だれも救われず、聖化されてもいない。聖霊を受けて異言を語る人も、ごくわずかである。

六　世の人々は喜び、不信者たちは歓声をあげている。罪を示されていた多くの人が、今の状態に満足するようになっている。そして偽善者たちは、「ああいう説教なら好きだ」と言っている。

さて兄弟よ、これらの事実を前にしても、聖霊のバプテスマを受ける人がみな異言を語るわけではないと、まだ信じているのか。それなら、なぜこのリバイバルが始まる前のように説教して、この問題にはかかわらずにおかないのか。使徒行伝五章三四～四〇節を読み、そのとおりに行うよう勧める。

第六章　御霊の賜物

『兄弟たちよ。霊の賜物については、次のことを知らずにいてもらいたくない』。

『霊の賜物は種々あるが、（中略）治めは種々あるが、（中略）働きは種々あるが、（中略）各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』（第一コリント一二・一、四～七）。

ここで数えてみよう。「賜物」、「治め」、「働き」、そして「御霊の現れ」である。そのどれもが、ほかのものとは違い、別のものであり、はっきり区別されている。初めの三つは種々あると言われている。しかし四つ目は単数で、「現れ」と言われている。御霊は初めの三つを分け与えられる。そして、どの賜物にも、どの治めにも、どの働きにも、全体の益になるように、いつも「現れ」を伴わせてくださる。いくつもの現れではなく、一つの「現れ」である。神はこれらのものをみな、人の救いのために共に働くようにお与えになった。御霊はこれらを私たちに分け与えられる。人をかたより見てではなく、私たちがそれを受ける備えをするのに応じてである。一人一人がその働きのために備えをするなら、御霊はどの心にも同じ働きをしてくださる。どの心もその治めのために備えができていると見られるなら、御霊はどの心にも同じ治めを授けてくださる。私たちが、望む賜物を神の栄光のために用いることのできる恵みの段階に達したとしよう。御霊がそれを見られるなら、私たちのだれにでも、その賜物を授けてくださる。

前の章で、私たちは御霊の七つの働きについて語った。働きは、ほかにもっと多くあるのかもしれない。治めについての私たちの考えは、ここでは述べない。先に進んで、賜物について考えよう。私は確信している。これらの賜物には、聖化された人々の大部分が夢にも思わなかったほど多くのことが含まれているのである。開かれた心で、聖書を悟りたいと願いながら、この問題に近づこう。

八、九、一〇節（第一コリント一二章）で言われていることは、「すなわち」という接続の言葉にかかっている。このことに注意しよう。この言葉は、これらの節を七節にではなく、四節に結びつけているのである。

『霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。（中略）すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている』。

一　知恵。ヤコブは言う。『あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう』（ヤコブ一・五）。クリスチャンはみな知恵を持っている。ある人は、ほかの人よりも多く持っている。しかし、「知恵の賜物」を持っていると言えるほどの段階に達した人が、だれかいるか。ソロモンは「ある賜物」を持っていたが、「その賜物」を持っていたのではない。私は確信している。「知恵の賜物」の現れは、ソロモンの知恵をはるかにしのぐはずである。

二　知識。これは、神の真理を深く悟る力である。だからこれは、聖書を悟るために、私たちのだれもが必要とする賜物である。だれもが知識を持っている。ある人は、ほかの人よりも多く持っている。しかし、だれがその賜物を持っているのか。メソジストも、バプテストも、ホーリネスも、万人救済派なども、みなそれを持っていると主張する。しかし、だれがそれを持っているのか。

三　信仰。クリスチャンはみな信仰を持っている。しかし、みながその賜物を持っているのではない。その賜物を持っている人には、『できない事は、何もないであろう』。

四　いやし。「この二つの名詞（いやしの賜物）は、どちらも複数形である。賜物にいろいろな種類があり、また、いやされるべき病気も限りなく多いからで

ある」（ゴドビー）。みことばは、『ほかの人には』、つまり一人の人に、『いやしの賜物』が与えられている、と言う。だから、これを受けた人は、どんな病気も苦しみもいやすことができるはずである。ただし、いやすことが神の御旨に反する場合は別である。いやしの賜物は、「信仰による祈」とはまったく違う。いやしの賜物をゆだねられた人は、病人のために祈る必要がない。力はその人の内にある（自分の力ではなく、授けられた神の力である）。その人はただ、病人に「なおれ」と命じるのである。この賜物の現れの例は、次の聖句に見ることができる。『金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい』（使徒三・六）。『ついには、病人を大通りに』（欄外の読みでは、どの通りにも）『運び出し、寝台や寝床の上に置いて、ペテロが通るとき、彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるようにしたほどであった。またエルサレム附近の町々からも、大ぜいの人が、病人や汚れた霊に苦しめられている人たちを引き連れて、集まってきたが、その全部の者が、ひとり残らずいやされた』（使徒五・一五～一六）。『たとえば、人々が、彼（パウロ）の身につけている手ぬぐいや前掛けを取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった』（使徒一九・一二）。

五　力あるわざ。ゴドビー博士によれば、ここのギリシャ語は「エネルゲーマタ・デュナメオーン」で、ダイナマイトの内なる働きを意味する。もっと文字どおりに訳せば「ダイナマイトの操作」になる、と博士は言う。そして博士は、これは霊的な奇跡を指していて、からだの奇跡を指しているのではない、と結論している。しかし私には、その両方が含まれているのではないかとも思える。霊的な奇跡だけを指していても、からだの奇跡だけを指していても、その両方を指していてもよい。どれであっても、この本での私たちの立場には影響しない。一つのことは明らかである。それは、御霊のバプテスマのあとに加えられる賜物である。使徒行伝一章八節は、文字どおりには「あなたがたは、あなたがたの上に来た聖霊のダイナマイトを受ける」と読めるからである。おわかりのように、私たちは聖霊を受けるときにダイナマイトを受ける。しかし賜物は、ダイナマイトの操作なのである。なんと重大な考えであろう！

六　預言。この言葉は、もとは、沸き立つ泉や掘り抜き井戸のようにわき上がることを意味した。その当てはまるところは、聖霊の直接の霊感を受けて語ることであるらしい。人々に神のご計画を、とくにキリストによる救いの道に含まれているご計画を明らかにすることである。ときには、将来の出来事を明らかにすることでもある。

七　霊を見わける力。この賜物は、疑いもなく、人も悪霊も私たちを欺くことのできないところに、私たちを置いてくれるであろう。

八　異言。ペンテコステの日に、百二十人は、御霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で語った。異言の現れだけを持っている人は、御霊が語らせるときにだけ、ほかの国の言葉で語ることができる。しかし、異言の賜物を持っている人は、思いのままにほかの国の言葉を語ることができる。そして、疑いもなく、いくつもの違った言葉を語ることができるのである。また、ほかの国の言葉を学校で学んだ人が、言葉の賜物を持っているのでもない。この賜物は、人間の知性とはかかわりなく、聖霊によって授けられるのである。

九　解き明かし。これは翻訳とはまったく違う。ある言葉から別の言葉への翻訳は、その言葉の語彙と文法を知ることによってなされる。しかし解き明かしは、こうしてなされる。私たちが知らない言葉を聞いている間に、聖霊が私たちの心の中で、同じことを知っている言葉で語ってくださる。こうして私たちは、それをほかの人々に伝えることができるのである。私は疑わない。この賜物を持つ人はみな、聖霊の力の下で語られるのを聞くどんな言葉も理解できるであろう。そして、それがどこの言葉であるかも、わかるであろう。

確かに、人々は何年もこれらの賜物を持っていると主張してきた。しかし、その現れは聖書の基準にはるかに及ばなかった。聖霊のバプテスマを受ける前に、これらの賜物のどれかを本来のかたちで受けた人がいるとは、私は信じない。また、これらの賜物のすべてが、あるいはどれかが、バプテスマと共に来ることがよくあるとも信じない。賜物は、バプテスマのあとで求め、受けなければならないのである。自分には知恵の、あるいは知識の、信仰の、預言の賜物がある、と言うのは一つのことである。しかし、本当にそれを持っているのは、別のことである。私は信じている。人がこれらの賜物のどれかを受けるなら、その瞬間に、

自分でそれとわかる。そして、賜物ははっきり現れるので、ほかの人々もすぐにそれと気づくのである。御霊はこれらの賜物を持っておられる。そして、私たちのためにそれを持っておられるのである。御霊は、それを神の栄光のために用いることができると見られる人々に、賜物を授けられる。私は信じている。私たちの一人一人がこれらの賜物をみな持つことが、神の御旨なのである。しかし、私たちはみな、そのすべてを、あるいはどれかを、正しく用いることができない。だから賜物は差し控えられている。そうでなければ、神は人をかたより見られるかたであることになってしまう。そこで、一人一人がこれらの賜物を熱心に求めるよう勧められている。そして、求めよという神の勧めにはみな、与えるという約束が伴っているのである。

今、多くの人が、ペンテコステの証拠を伴って御霊のバプテスマを受けている。そして、そのあとで御霊の賜物を受けている人々もいる。これが、大きな反対にあっている。教会の指導者たちは不安になり、自分たちは何年も前から御霊のバプテスマを受けていると証明しようとしはじめている。「兄弟が自分と同じ賜物を受けていないからといって、その兄弟を軽んじてはならない」と、彼らは叫ぶ。兄弟よ、だれもそんなことはしていない。私たちのうちで、これらの賜物のどれかを持っている人は、ごくわずかである。私たちは、ようやくペンテコステの証拠を受けはじめたばかりなのである。「しかし」とあなたは言う。「どの賜物も、ほかの賜物と同じだけ証拠になるのではないか」。確かにそうである。そして私は信じている。これら九つの賜物のどれも、本来のかたちで授けられるなら、ペンテコステの証拠である。しかし、そのどれも、助け主のあかしと取ってはならない。だから、それは最初に期待すべき証拠ではないのである。「しかし」とある人は言う。「ある人に知恵や信仰やいやしの賜物があるのに、一度も異言を語ったことがないとしよう。それでも、その人はペンテコステを受けていないと言えるのか」。その人を連れて来てほしい。話はそれからにしよう。

それでもなお、ある人々は言い張る。異言の現れと異言の賜物とは同じものである。異言の賜物は九つの中で最も小さい。そして自分たちは、異言の賜物よりもはるかに大きく、重要な賜物を持っている、と。あなたは言う。「私には知識の賜物がある。聖書がわかるからだ」。万人救済派もローマ・カトリックも、同じ賜物を主張している。

そう、私は、いやしの賜物を主張して病人のために祈ったのに、病人がいやされなかった人々を知っている。彼らは、それは神の御旨ではなかったのだ、と言いわけをする。使徒たちのころの光景と、なんと違うことか！『ひとり残らずいやされた』と書かれているのである。霊を見わける賜物を主張しながら、人にも悪霊にもひどく欺かれた人々を、私は知っている。信仰の賜物を主張しながら、落胆にあい、できないことに数多くぶつかる人々もいる。知恵や知識の賜物を主張するのはたやすい。しかし、あなたがたのうちのだれかが、解き明かしの賜物を主張しないのはなぜか。自分では異言の現れを持ったことがないのに、聖霊の語られた言葉を解き明かした人のことは、まだ一人も聞いたことがない。

もっと大きな光が来ると、それはいつも反対にあう。信仰による義認の真理を開いた人々は、激しく反対された。ホーリネスの真理も苦闘した。神癒と、千年期前の主の来臨とは、講壇から非難され、何千もの書き手にあざけられてきた。ペンテコステのバプテスマの聖書の証拠は、これまでのどれよりも大きな反対を受けている。そして今、賜物が加えられると、この反対は熟して、ペンテコステの迫害になろうとしている。ペテロのように病人をいやしながら町を通る人が、初めて現れたとしよう。その人はおそらく、ホーリネスの人々の半分から軽蔑され、やがて当局によって牢に入れられるであろう（使徒五・一五～一八）。

では、第一コリント一三章に近づいて、注意深く学んでみよう。

この章の初めから終わりまで鳴り響いている言葉は、「愛」である。この「愛」という言葉は、ギリシャ語では「アガペー」で、神の愛を意味する。多くの人が思っているように、完全な愛を意味するのではない。同じ言葉が、ヨハネ五章四二節にも使われている。『あなたがたのうちには神を愛する愛がない』。第一ヨハネ二章一五節も同じである。『父の愛は彼のうちにない』。『神の愛（中略）が、あなたがた一同と共にあるように』（第二コリント一三・一三）。「アガペー」という言葉だけで、完全な愛を意味することは一度もない。第一ヨハネ四章一八節では、ギリシャ語は「テレイア・アガペー」である。「全き」を意味するこの

「テレイア」という言葉は、第一コリント一三章に一度しか出てこない。それは一〇節である。

『たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし神の愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい銚鉢と同じである』。

ある人々は言う。この節が教えているのは、コリントの教会で異言を語っていた人々は肉に属するクリスチャンだった、ということである。彼らには完全な愛がなかったので、彼らが異言を語っても何の益もなかった、と。これが正しい説明なら、同じ真理が、続く二つの節にも当てはまるであろう。それなら、こう結論しなければならない。この教会には、御使たちの言葉を語り、預言の賜物を持つ人々がいた。あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、山を移すほどの信仰を持っている人々がいた。また、貧しい人々を養うために全財産を施し、自分のからだを焼かれるために渡している人々がいた。それなのに彼らは、聖化されていないクリスチャンだったので、自分にもほかのだれにも何の役にも立たなかった、と。これが本当なら、回心しただけの人々は、主のぶどう園で何の役にも立つことができないことになる。だから、弟子たちが聖化される前にした働きは、みな役に立たなかったことになる。この教えに従えば、私たちがどこへ行き着くか、わからないのか。私がここで二節と三節から引き出した結論は、あなたが一節から引き出した結論と、ちょうど同じだけ正当である。

私には、上の結論が正しいとは信じられない。聖書を開いて、真理を学ぶためにこの章を学ぼう。

明らかに、この人々は賜物に目を向けすぎていた。神の愛よりも賜物を重んじていたのである。そのような場合にはいつも、悪魔は必ずそれにつけこんで、彼らに偽物をつかませるであろう。私としては、私たちが神の愛を持つまでは、神が御霊の賜物のどれかを私たちに授けてくださるとは信じない。賜物は、御霊の思いのままに分け与えられる。そして御霊が、神の愛のない人にこれらの賜物のどれかを授けようと思われるとは、私には思えない。私の理解が正しければ、神がこれらの賜物のどれかを与えてくださる前に、私たちは神の愛を持っていなければならない。それはクリスチャンならだれもが持っているものである。それだけでなく、この愛が私たちのうちに全うされなければならない。それから聖霊のバプテスマを受け、これらの賜物を熱心に求めなければならないのである。しかしサタンは、私たちが神の愛を求める前に賜物を求めるなら、喜ぶであろう。そうすれば、私たちに異言や預言や知識や信仰などの賜物を授けることができるからである。聖書の多くの箇所に、にせ預言者やにせ教師などが、多くのしるしと不思議を行うことが書かれている。だからパウロはコリントの教会に、更に大いなる賜物を熱心に求めるように言った。しかし、それよりもすぐれた道があったのである。このすぐれた道には、一三章で語られていることだけでなく、一四章で語られていることも含まれている。パウロは彼らに、まず神の愛を求め、それから賜物を求めるべきことを示している。神の愛のない賜物には何の価値もないと、パウロははっきり教えている。神から来る賜物には、みな価値がある。だから、私たちが神の愛に達する前に賜物が授けられたなら、それは悪魔から来たものだとわかる。現れについても同じである。だから、すぐれた道とは、神の愛を追い求め、それから霊の賜物を求めることである（第一コリント一四・一）。

パウロが「更に大いなる賜物」を熱心に求めよと言うとき、それは上に挙げた九つのすべてを指している。御霊の賜物はほかにも多くある。しかし、この九つが「更に大いなる賜物」と呼ばれているのである。

今日、多くの人がこんなふうに説いている。「神は今のリバイバルの中におられる。しかし、働きを損なうような教えも、たくさん説かれている。現れと賜物とのあいだには、何の違いも見えない。御霊のバプテスマを受ける人はみな異言の賜物を持っている、と教えるのは大きな間違いである。クリスチャンはみな、少なくとも一つの賜物を持っているはずである。しかし、みなが同じ賜物を持っているのではない。私たちの多くは、異言の賜物よりもはるかに大きな賜物を持っている。異言の賜物は九つの中で最も小さく、価値もごくわずかである。それが授けられたところでは、たいてい益よりも害のほうが多い。パウロは、私たちがこの賜物を求めることを望んだのではない。もっと大きな賜物を求めることを望んだのである。もし異言の賜物を受けたら、あなたは信仰から離れて、体験は苦々しく、言葉はとげとげしくなるおそれがある」

では、教えてほしい。上の教えの中に、人を今の運動に加わらせるものが何かあるだろうか。たいていの人は、もともと異言に偏見を持っている。だから上の

ような説教を聞けば、前よりもいっそう遠ざかってしまう。それなのに、このように説いている人々は、教会の中にリバイバルがあることを認め、自分はその味方だと主張している。教会はこれまでずっと、もっと大きな賜物を受けてきて、今になってすべての中で最も小さな賜物を受けているのだという。それが本当なら、どこにたいしたリバイバルがあるのか、私にはわからない。それでは、私たちは進んでいるのではなく、退いているように見える。

異言の賜物は九つの賜物の中で最も小さい、と説く人々は、何の聖書の土台もなしにそう説いている。彼らは砂の上に建てているのである。私の前に、一つの記事がある。その中で書き手はこう言っている。「今のリバイバルに対する最も目立った反論は、『異言の賜物』である。この一つの特徴を除けば、ほかに不平の種はほとんど見当たらない」。別の人はこう言う。「私たちは、もっと高い賜物のいくつかを求めるようには言われているが、異言の賜物を祈り求めるようには一度も言われていない」。彼が「もっと高い賜物のいくつか」と言っていることに、注意してほしい。聖霊は、ふさわしいと見て、神に選ばれた人のだれかに賜物を授けられる。その賜物を私がこのように小さく見て軽んじることは、断じてあってはならない。

異言の賜物は最も小さく、だから求めるべきではない。このことを証明しようとする議論で、私が見たのはただ一つである。上の一覧で、異言が終わりから二番目に来ている、というのである。なんとりっぱな論拠であろう！　この一覧が、だんだん小さくなっていく順に並んでいて、その行き着く先が八番目だという証拠が、どこにあるのか。パウロは、預言をほかのどれよりも先に置いているように見える。しかし預言は、初めにも、終わりにも、真ん中にもなく、六番目にある。あなたがここで示した論拠は、何千もの貧しい無学な人々を惑わすようなものである。しかし、討論の心得が少しでもある人なら、これが草の中に隠れた蛇であることを知っている。私は、異言の賜物が最も小さいとも、最も小さくないとも言わない。聖書はそのどちらとも言っていないからである。パウロの教えによれば、異言を語る人が自分の語ることを解くなら、その人は預言をする人に並ぶのである。

すでに述べたように、私はこう信じている。聖霊のバプテスマを受けるまでは、だれもこれらの賜物のどれをも本来のかたちで持ってはいない。

「しかし、神にあれほどすばらしく用いられた昔の預言者や人々のことは、どうするのか」。私は答える。彼らは、これらの賜物の多くを、本来とは違うかたちで持っていた。ペンテコステの前の弟子たちも、そうであった。昔の預言者たちは、幻や夢などによって預言した（イザヤ一・一、八・一、エレミヤ一三・一～八、エゼキエル一・一、ダニエル二・一九）。しかし、預言の賜物を持つ人は、聖霊の直接の力の下で、いつでも預言できるであろうと私は信じている。ほかの賜物についても同じである。ペンテコステの前にも、弟子たちは悪霊を追い出した。もっとも、一度は試みて失敗したことがある（マルコ九・一八）。しかし、ペンテコステと賜物の授与のあとには、失敗したことは一度も書かれていない。

しかし、ここで一つのことに注意しておきたい。知恵、知識、信仰、いやし、力あるわざ、預言、霊を見わける力の賜物は、ペンテコステの前にも、かなりの程度まで現れていた。しかし異言を語ることは、聖霊のバプテスマのしるしである。それは、平野の上にそびえる高い山のように、ほかのどれとも別のものとして、はっきりときわだっているのである。

しかし、どの賜物を求めるにしても、その前に、必ず心を神の愛で満たしていただきなさい。

『たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もしアガペーがなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もしアガペーがなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もしアガペーがなければ、いっさいは無益である』。なぜか。神の愛がなければ、それは神から出たものではありえないからである。では、このアガペー、すなわち神の愛とは何か。四節から七節が、それを告げている。

『愛はいつまでも絶えることがない』（八節、ゴドビー訳）。『預言はすたれ』。なぜか。預言は、私たちが世を救う助けとなれるようにする、霊の賜物である。天国に着けば、救うべき失われた魂は一つもない。だから、預言の必要はなくなるのである。『異言はやみ』。なぜか。天国には一つの言葉しかないので、言葉の賜物は要らないからである。『知識はすたれるであろう』。これは、私たちがこの世で得た知識をすべて失って、忘却の海に出て行く、という意味ではない。ここで論じられているのは、知識の賜物である。この賜物は、神の啓示されたみことばを深く悟る力であり、あなたが聖書を悟ることができるようにするものである。これがすたれるのは、私たちが聖書を天国へ持って行かないからである。聖書は、地上から天国への道中手形である。天国に着けば、もう要らなくなる。疑いもなく、天国に着いてからの一時間で、私たちはそれまでの全生涯で学んだよりも多くのことを学ぶであろう。

『なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来る時には、部分的なものはすたれる』。多くのホーリネスの説教者は、この二つの節は新生と聖化を教えていると説き、聖化されたあとでは賜物は要らない、と言う。これは間違いであり、害を及ぼすような教えである。もし一〇節が聖化のことなら、私たちのだれも聖化されていないことになる。すべてを知るところに達した人は、だれもいないからである。九節はこの世の生涯を指しており、一〇節は栄光を受けた状態を指しているのである。

『わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった』。ここで教えられているのは、栄光を受けた状態は、おとなが子供にまさるほどに、この世の生涯にまさるということである。同じ対比が一二節にも続いている。

『このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と神の愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、神の愛である』。詩人は、「信仰は見ることのうちに消え、希望は満ち足りた実りのうちに死ぬ」と言う。しかし私は、むしろパウロを信じたい。パウロはここで、愛だけでなく、信仰と希望もとこしえに残ることを保証しているのである。預言と異言と知識は、この世の生涯と共に過ぎ去る。しかし、信仰と希望と神の愛は、とこしえに残るのである。天国は何もしないところではない。限りなく、果てしなく進んでいくところである。天のわざを思い描き、行うときに、希望は先駆けとなり、信仰は力の原動力となるであろう。

思い出してほしい。コリントの教会員は、異教から回心してまだ日が浅かった。だから、教えを大いに必要としていた。そこでパウロは、一四章を教えに当てている。彼らは霊の賜物を熱心に求めていたので、パウロは、教会の徳を高めるためにそれを豊かにいただくよう励め、と言う（一二節）。パウロは、預言が最も大きな賜物であると教えている。教会の徳を高めるからである。パウロは、異言の賜物が益になる三つの道を挙げている。第一に、『異言を語る者は、（中略）神にむかって語るのである』（二節）。第二に、『異言を語る者は自分の徳を高める』（四節）。第三に、『このように、異言は信者のためではなく未信者のためのしるしである』（二二節）。パウロはこう言う。全教会が一つの所に集まって、全員が異言を語っているところに、初心者か不信者かがはいってくるとする。彼らはあら探しを始め、教会は気が狂ったと言うであろう。そのとき、全員が預言をしはじめるなら、この不信者たちはひれ伏して神を拝むであろう（二三～二五節）。しかし、彼らが初めに預言するなら、それは『未信者のためではなく信者のため』のものである（二二節）。だからパウロは、クリスチャンたちを教えようとするときには、彼らにわかる言葉で五つの言葉を語るほうを望んだ。知らない言葉で一万の言葉を語るよりも、である（一九節）。

神はこの人々をすばらしく祝福しておられた。御霊の賜物を授け、宣教の働きのために備えさせておられたのである。彼らが集まるたびに、その大勢が、それぞれ特別に告げたいものを持っていた。ある人には新しい異言が与えられていた。ほかの人には解き明かしの賜物が与えられていた。燃えるような特別の言葉を告げたい人もいた。胸を打つ勧めを、もうこれ以上抑えておけない人もいた。甘く新しい、心を奮い立たせる歌を歌いたい人もいた（二六節）。その結果、集会は長くなりすぎて、人々は疲れ果ててしまった。そこでパウロは、一度に二、三人より多くの人が預言したり、知らない言葉で語ったりすることを禁じている。一人か何人かがほかの国の言葉で語っている間に、別の人が解くことになっ

ていた。そして解く者がいなければ、彼らは黙っていることになっていた。もちろんパウロは、異言の賜物を持っていて、思いのままに語ることのできる人々に向かって語っていたのである。御霊が私たちの舌を、私たちの思いのままにならないようにお取りになるときには、百二十人が一度に語っても混乱は起こらない。パウロが人々の上に手をおくと、十二人が聖霊を受け、異言を語り、預言した集会のことが書かれている（使徒一九・六～七）。パウロは跳び上がって、「兄弟たち、気をつけなさい。それはいけない。教会に混乱が起こる」と言ったと思うか。決してそうではない。パウロは、『御霊を消してはいけない』、『預言を軽んじてはならない』と言っているのである。

『預言をする者の場合にも、ふたりか三人かが語り』。席にいるほかの者が啓示を受けたなら、その者が示された言葉を告げ終えるまで、導く者は黙っているのが順序である。そのようにして、一人がほかの人に順を譲り、みなが預言するのである。

この教会の無秩序は、異言を語ることと預言することだけではなかった。パウロは、礼拝の間に夫に話しかけた婦人たちも、正さなければならなかったのである。

ペンテコステに反対するホーリネスの説教者の多くが、今、混乱を避けるようにすべてを行うことについて、さかんに語っている。しかし彼らは、自分たちのあかし会では、望む人が何人でも一度にあかしをするのを許している。三、四人に、一度に祈りを導かせる。会衆に、祭壇のまわりに押し寄せて握手するように呼びかける。ところが、一人か二人が異言を語ると、「兄弟たち、混乱を避けよ」と叫ぶのである。

結びに、読者のすべてに勧めたい。御霊は、ふさわしいと見て、神の子供のだれかに賜物を授けられる。たとえその人がどれほど小さな者であっても、その賜物を決して軽んじてはならない。まず、いつまでも絶えることのない神の愛を求めなさい。次に、その愛を自分の心のうちに全うしていただきなさい。それから、ペンテコステの証拠を伴う聖霊のバプテスマを求めて受けなさい。そして、更に大いなる賜物を熱心に求めなさい。そうすれば御霊は、あなたが神の栄光のために用いることができると見られる賜物を、与えてくださるであろう。

第七章　ミナとタラント

この章では、マタイ二五章にあるタラントのたとえと、ルカ一九章にあるミナのたとえから、いくつかの大まかな考えを学びたい。この二つのたとえが同じものでないことは、前後の文脈から明らかである。また、どちらのたとえも、前の章で扱った御霊の賜物を指しているのではない。このことを、はっきり示したいのである。

聖書を開いて、この二つのたとえを見てほしい（マタイ二五・一四～三〇、ルカ一九・一一～二七）。旅に出る人、または身分の高い人は、キリストご自身である。遠い所は天である。王として治める国は、この世である。僕たちは、説教者とキリスト者の働き人である。身分の高い人が帰って来ることは、キリストの再臨である。ミナとタラントは、元手である。ここまでは、二つのたとえは共通している。実のところ、おもな違いは、元手の性質と、その分け方にある。タラントのたとえでは、ある僕はほかの僕よりも多くの元手を受ける。ミナのたとえでは、どの僕も同じ額の元手を受けるのである。

タラントのたとえでは、元手がそれぞれの能力に応じて与えられていることに気づくであろう。この能力とは、器のことである。タラントは、私たちが神に仕えることができるようにするための、神からの特別な贈り物である。ある人はほかの人よりも大きな器を持っている。だから神は、その人に多くのタラントを与えられる。タラントとは、生まれつきの能力である。タラントを持つとは、あることをする才能を持つことである。たとえば、歌うこと、人前で話すこと、文章や歌を書くことである。

罪人はだれでも能力を持っている。だから、何かのタラントを持っている。しかし、そのタラントは悪魔に仕えるために用いられている。救われたあとも、その人は前と同じタラントを持っている。しかし、それをまったく違ったふうに用いるのである。イエスは来られるとき、与えられたタラントをどのように用いたかについて、ご自分の僕たちと計算をされるであろう。

ミナのたとえでは、元手がそれぞれの能力に応じてではなく、どの人にも同じように与えられていることに気づくであろう。ミナとは、神のみことばと聖霊である。ある働きのためのタラントを持ち、そのタラントを聖霊によって強められ、さらに神のみことばと共に働かせる人がいるとする。その人は、働きに取りかかりさえすれば、主のぶどう園で何かを成し遂げることができるであろう。身分の高いかたは、いつの日か帰って来て、元手の利子を求められるであろう。

非常に多くの人が、自分は御霊の特別な賜物を一つか、それ以上持っていると思っている。しかし実際には、生まれつきのタラントを持っているにすぎない。歌うこと、人前で話すこと、教えること、書くことなどのタラントである。それが御霊によって強められ、おそらくいくらかのみことばの知識を伴っているのである。これは、クリスチャンならだれもが持っている。しかし九つの賜物は、本来のかたちでは、御霊のバプテスマのあとで授けられるのである。

タラントとミナと御霊の賜物とを、注意して区別しよう。

第八章　聖化のあとに受ける聖霊のバプテスマ（その一）

聖化とは、肉の思いを根こそぎにすることである。一方、聖霊のバプテスマは満たしである。前者はカルバリで起こり、後者はペンテコステで起こる。この二つは互いにはっきり区別された別のものであり、決して同時には起こらない。聖霊が入って来て、いつまでもとどまってくださる前に、心はすべての罪からきよめられていなければならない。聖霊は、心が清められてまもなく入って来られることもある。何年もたってからのこともある。まったく入って来られないこともある。聖霊のバプテスマは、古い人が十字架につけられたあとに、ひとりでに続くものではない。御霊が聖化をあかししてくださったあとで、聖霊ご自身を求めなければならないのである。

これから、上に述べたことを聖書から証明しよう。

まず、使徒たちと弟子たちの場合を調べてみよう。ルカ一〇章二〇節から、彼らの名が天にしるされていたことがわかる。その後、イエスは『今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう』と言われた。するとペテロは、『たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません。（中略）たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません』と答えた。『弟子たちもみな同じように言った』（マタイ二六・三一～三五）。しかしイエスはペテロに、彼がご自分を知らないと言うであろうと告げられた。そして、彼がもう一度回心しなければならないことも告げられた（ルカ二二・三二）。そして危機が来たとき、『弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った』（マルコ一四・五〇）。復活ののち、イエスは彼らに現れ、『彼らに息を吹きかけて』、『聖霊を受けよ』と仰せになった（ヨハネ二〇・二二）。これによって彼らは、義とされた経験に堅く立った。このあとに、こう書いてある。

『それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された』（ルカ二四・五〇）。この祝福に何が含まれていたかを、どうして知ることができるか。その結果はこうであった。『彼らはイエスを拝し、非常な喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた』（五二、五三節）。これは、聖化された人々の群れのように聞こえる。聖化が私を置いたのも、まさにこの立場である。そしてこれは、ヘブル一三章一二～一五節とよく合っている。『だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。したがって、わたしたちも、彼のはずかしめを身に負い、営所の外に出て、みもとに行こうではないか。（イエスは彼らを連れ出された。）この地上には、永遠の都はない。きたらんとする都こそ、わたしたちの求めているものである。だから、わたしたちはイエスによって、さんびのいけにえ、すなわち、彼の御名をたたえるくちびるの実を、たえず神にささげようではないか。（彼らは絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。）』。このとおりである！

もう一つある。ヨハネ一四章、一五章、一六章で、イエスは助け主を送ると約束された。弟子たちが助け主を受けるには、その前に心を合わせるようにならなければならなかった。そこで一七章で、イエスはこう祈られた。『真理によって彼らを聖別して下さい。（中略）父よ、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなり、彼らもわたしたちのうちにあって一つとなるためであります。（中略）わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであります』。ここで、はっきり教えられている。私たちが完全に一つとなるには、聖化の祝福が必要なのである。だから使徒行伝一章一二～一五節には、こう書いてある。『それから（ベタニヤでの祝福のあと）彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある。彼らは、市内に行って、その泊まっていた屋上の間にあがった。その人たちは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモンとヤコブの子ユダとであった。彼らはみな、婦

人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた。そのころ、百二十名ばかりの人々が、一団となって集まっていたが、ペテロはこれらの兄弟たちの中に立って言った』。考えてもみよ！　百二十人が心を合わせているのである！　過越の食事のときの使徒たちと、なんと違うことか（ルカ二二・二四）。何かが起こったにちがいない。何が、彼らに心を合わせさせたのであろうか。イエスは、食事の席で彼らの間にそのような不和があるのを見られた。そして出て行って、彼らを聖化してみなを一つにしてくださるようにと祈られたのである。だから彼らは、ペンテコステの前に聖化されていたにちがいない。主をほめたたえよ！

ルカは、その食事の席のことをこう言っている。『自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうかと言って、争論が彼らの間に、起った』。これは、今日の肉に属するクリスチャンが開く年会や大会などと、まったく同じである。だれもが、いちばん立派な説教をしたがり、いちばんよい任地をもらいたがる。しかし聖化は、私たちに心を合わせさせ、絶えず神をほめたたえさせる。弟子たちは、心を合わせて集まっただけではない。心を合わせ続けたのである。『五旬節の日がきて、彼らはみな心を合わせて一つ所にいた』。そうであれば、彼らは聖霊が来られる前に聖化されていたと結論せざるをえない。とくに、イエスの母マリヤが、その群れの中で自分のペンテコステを求めているのだから、なおさらである。

回心によって人は心を合わせるようになる、だから弟子たちはペンテコステの前には回心していただけだ、と主張するとしよう。それは、イエスが定められたよりも高く基準を置くことになる。イエスは彼らを一つにするために、彼らが聖化されるようにと祈られたからである。パウロは、ある人々に「兄弟たちよ」と呼びかけた。それでも彼らは肉に属していたので、彼らの間には分裂があった。また、心を清めて私たちに心を合わせさせるには聖霊のバプテスマが要る、と言うとしよう。それは血の効力を小さく見て、ペンテコステの基準を引き下げることになる。

弟子たちがペンテコステの日に聖化されたと教える聖句は、一つもない。その記事全体の中に、きよめること、清めること、聖化することについては、一言も言われていない。私たちが聖化を受ける備えをするには献身が要ることを、私たちは知っている。ここには、献身をほのめかすような言葉さえ一言もない。

献身するとは、自分を聖なる用のために取り分けることである。聖化されるために献身するよう人々を導くとき、私たちが求めているのはこういうことである。自分自身を、自分の持つすべてのものと共に、残らず神の祭壇にささげる。今の自分のすべても、これから持とう、なろうと思うすべても、共にささげる。そして神が、ご自分の栄光のために、思いのままに用いてくださるようにするのである。弟子たちは献身したことがあったのか。あったとすれば、それはいつか。

イエスは『彼らに息を吹きかけて』、『聖霊を受けよ』と仰せになった（ヨハネ二〇・二二）。これによって彼らは、義とされた経験に堅く立った。それでも、まだ献身してはいなかった。そのあとで、彼らが漁の網のところに戻って行くのが見られるからである（ヨハネ二一・三）。もし献身していたなら、エルサレムが自分たちの主のことでこれほど騒いでいるときに、漁に出かけはしなかったであろう。このあと、イエスが現れて、『聖書を悟らせるために彼らの心を開いて』、こう言われた。『こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる』（ルカ二四・四五～四七）。

『だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。したがって、わたしたちも、彼のはずかしめを身に負い、営所の外に出て、みもとに行こうではないか』。イエスのはずかしめを身に負い、営所の外に出て、みもとに行くこと。これが私たちの献身である。エルサレムは、イエスの復活のことであれほど騒いでいた。イエスに従って営所の外に出ることに、そのときほど大きなはずかしめが伴った時は、ほかに一度もない。

このことを覚えて、ルカ二四章に戻り、学びを続けよう。『それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き』。弟子たちは、ほかならぬこのときに、すすんでイエスと共にベタニヤまで出て行った。こうしてイエスのはずかしめを身に負ったのである。このことが、彼らの献身を表している。彼らは網を捨

て、友を捨て、評判を捨てた。そして自分のすべてを神の祭壇にささげて、どこへでもイエスに従う用意ができていた。そこでイエスは、『手をあげて』くださった。釘に裂かれ、刺し通された、その手である。なぜその手は、そのように裂かれていたのか。『だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために』。イエスが手をあげられたとき、弟子たちは血の下に置かれた。だから彼らは祝福された。すなわち、聖化されたのである。この祝福は、彼らに非常な喜びをもたらした。

このことに関連して、イエスは言われた。『見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい』。『ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、サマリヤ、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう』（ルカ二四・四九、使徒一・八）。だから弟子たちは、一つ所に長くとどまるのではなかった（『この地上には、永遠の都はない』からである）。散って行って、ユダヤの全土、サマリヤ、さらに地のはてまで、あかしをすることになっていたのである。しかしイエスは、『エルサレムから離れないで、父の約束を待っているがよい』と、彼らにお命じになった。『上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい』。『だから、わたしたちはイエスによって、さんびのいけにえ、すなわち、彼の御名をたたえるくちびるの実を、たえず神にささげようではないか。彼らはイエスを拝し、非常な喜びをもってエルサレムに帰り（前のように漁の網のところにではない）、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた』。聖書は、なんとみごとに調和していることか！　わかるであろうか。

屋上の間で、彼らは心を合わせ、神をほめたたえ、祈りと願いをしながら、ペンテコステの日が来るまでとどまっていた。ここには、献身をほのめかす言葉は一言もない。彼らが聖化を求めて祈っていたとも書かれていない。そのようなことをほのめかす言葉が一言もないのに、なぜ説教者たちは、彼らが聖化を求めて祈っていたと言い張るのか。イエスはベタニヤで彼らを血の下に置かれた。それから、エルサレムに行ってとどまるように言われた。聖化されるまでではなく、上から力を授けられるまでである。『突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』。聖化をほのめかす言葉は一言もない！

ホーリネスの説教者の中には、こう教える人々がいる。分かれた舌の一方の先は新生を表し、もう一方の先は聖化を表していた。そして火は、聖霊の清める力を表していた、というのである。もしこれが正しいなら、この百二十人はみな、まったく同時に新生し、聖化され、聖霊に満たされたことになる。炎のような分かれた舌が、神が彼らの上に注いでおられた実際の祝福の象徴であったことは、明らかだからである。またほかの人々は、一方の先は天の火を表し、もう一方は地獄の火を表していたと教えている。もしこれが本当なら、この群れは天の火と地獄の火とで、同時にバプテスマを受けたことになる。さて、火は「聖化する聖霊のバプテスマ」の象徴ではない。火だけでは決して聖霊の象徴とならず、分かれた舌と結びついたときにだけ象徴となるからである。「聖化する聖霊のバプテスマ」と言うとき、私たちはまったく聖書にない言葉を使っているのである。

マタイ三章一一節をマラキ三章一～三節と結びつけて、御霊のバプテスマが清めることを証明しようとする人々がいる。私の見るかぎり、この二つの間にはまったく関係がない。聖書を手に取って読もう。説を支えるためではなく、聖書を悟るために読むのである。

『見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる』。ここには、聖霊のバプテスマについて一言も言われていない。指しているのは、キリストご自身が来られることである。キリストは「契約の使者」と呼ばれている。また、これはキリストが初めてこの世に来られたことを指しているのでもない。主は「たちまち」来る、それも「その宮に」来る、と書いてあるのである。イエスが初めて来られたとき、これが成就したか。いや、そうではない。キリストは人となって宿り、それから飼葉おけの中に生まれられた。そして十二歳になるまで、宮で何の働きも始められなかった。続けよう。『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時に

は、だれが立ち得よう』。これが聖霊のバプテスマか、キリストの最初の来臨かを指していると思うか。それなら、先を読もう。『彼（キリスト）は精錬する者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼（キリスト）は銀をふきわけて清める者のように座して、彼（キリスト）はレビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる。その時（すぐそのあとで）ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる。そしてわたしはあなたがたに近づいて、さばきをなし（後略）』。これが聖霊のバプテスマも、キリストの最初の来臨も指しておらず、まったく主の再臨を指していることは明らかである。「しかし、キリストより先に来る使者とは、バプテスマのヨハネのことではないのか」。決してそうではない（ヨハネ一・二一～二三）。「では、だれのことか」。預言者エリヤのことである（マラキ四・五、六）。

次に、マタイ三章一一節を開こう。『わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』（改訂訳）。

火のバプテスマは聖霊のバプテスマとは別のものだと教える人々がいる。これは誤りである。私は気づいている。マタイとルカは「火」という言葉を使っているが、マルコはそれを省いている。ここから明らかに、次の結論が導かれる。火は本来、聖霊の内にあるもの、すなわち聖霊から切り離せないものなのである。だから、聖霊のバプテスマを受けるとき、あなたは火のバプテスマを受けるのである。二つのバプテスマを教えることは、エペソ四章五節に逆らうことである。パウロはそこで、恵みの経綸にはただ一つのバプテスマしかないと、はっきり述べている。水による礼典は、それ自体がバプテスマなのではない。実際の聖霊のバプテスマを、象徴として表しているのである。

では、この火は清めるのか。そうだとすれば、清めと満たしには違いがないことになる。つまり、満たしが清めであり、清めが満たしである。バプテスマはただ一つだからである。しかし、清めと満たしの両方が「聖霊と火とのバプテスマ」という言葉に含まれていて、「火」が清め、聖霊が満たすのだとしよう。すると、「聖霊と火と」という言い方からすれば、満たしが清めより先に起こらなければならない。そしてこれは、ペンテコステの日とぴったり合うことになる。こう書いてあるからである。『突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。（満たしの象徴。）また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。（清めの象徴。）』。だから、火をこのように説明すると、どこへ行き着くことになるか、わかってもらえると思う。

さて、私は、清めと満たしがまったく同じものだとは信じない。また、満たしが清めより先に起こることも、聖書からは見て取れない。「火」が「聖化する聖霊のバプテスマ」の象徴であるとも思えない。私としては、次の二つの人々の間に違いを見いだせない。「火」が清め、聖霊が満たすと教える人々と、御霊のバプテスマと火のバプテスマとを互いに別のものとして教える人々である。違うのはただ、後者のほうが前者よりも聖書の順序に近く従っていることだけである。前者は、分かれた舌の一方の先は新生を表し、もう一方は聖化を表すと言うのだから、なおさらである。もしそれが本当なら、「火」は清めるだけでなく、新生させもする。そうなると、もう一つ新しい言い方を作ることができる。すなわち、「新生させる聖霊のバプテスマ」である。これらの聖書にない説の大きな誤りが、わかってもらえると思う。説を組み立て、それから聖書にそれを支えさせようとするのはやめよう。聖書をあるがままに受け取り、そのうえで結論を引き出そう。

第八章　聖化のあとに受ける聖霊のバプテスマ（その二）

『突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、（その音が）一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった』。

この記事全体の中に、新生についても聖化についても何も言われていない。また聖書から見てきたように、彼らはすでに新生に堅く立ち、血の下に置かれて、聖化されていた。イエスは、新生や聖化を求めにエルサレムへ上れとは少しも指示されず、聖霊を待てと言われた。そして彼らは、約束されていたまさにその祝福を待っていたように見える。だから私は、彼らのすわっていた家いっぱいに響きわたったこの音を、象徴と受け取る。その家にすわっていた人々を、聖霊が満たしてくださったことの象徴である。

『また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった』。

イエスは助け主を約束されただけでなく、『聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて』と言われた。そしてこの力によって、彼らはそれ以上の教育や訓練を何も受けなくても、地のはてまでイエスのあかしをすることができるはずであった。だから私は、こう結論する。彼らの上にとどまった炎のような分かれた舌は、聖霊が与えてくださる力の象徴であった。すべての造られたものにあかしをするための力である。

上の結論は、次の節とぴったり合う。この節は、二節と三節で象徴されている実体を示している。『すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』。『このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』。あるいは、マタイ三章一一節を使徒行伝一章八節と結びつけて、こう言ってもよいであろう。このかたは聖霊と力とによっておまえたちにバプテスマをお授けになる（ルカ二四・四九）。『聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになる』という言葉は、清めと満たしの両方を含んでいるのではない。内なる現れと外なる現れの両方を含んでいるように、私には思われる。

「しかし、その次の節はどうか。聖霊のバプテスマが打ち場をきよめることを教えているのではないか」。

さて、よく見てほしい。ここに三つの節が並んでいて、どれも「火」という言葉で結ばれている（一〇、一一、一二節）。どの場合も同じ火でないことは、明らかである。ヨハネは悔改めを宣べ伝え、ヨルダン川で人々にバプテスマを授けていた。ヨハネの務めと共に、ユダヤ人には重大な危機が訪れていた。それまで彼らは、律法と預言者の務めのもとで、まだ肉体をとっておられないキリストによって救われることができた。しかし今、キリストが人の肉体をとって来られたので、彼らはキリストを受け入れなければならない。さもなければ、聖霊を悲しませて去らせ、神に見捨てられた状態と滅びの中へ、取り返しのつかない転落をすることになる。『斧がすでに木の根もとに置かれている』。それは、神の家、すなわちユダヤ人の教会に来たさばきであった。斧は神の報いを象徴している。木は教会の一人一人の会員を象徴し、すべてのユダヤ人がそれに含まれる。『だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ』。どんな火か。その答えは、地獄の火しかありえない。

『わたしは悔改めのために、水でおまえたち（悔い改める者すべて）にバプテスマを授けている（これはさばきをおまえたちの戸口にもたらす）。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたち（悔い改めた者たち）にバプテスマをお授けになるであろう』。どんな火か。上に出てきた地獄の火ではない。『このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』。この言葉の「おまえたち」は二人称の複数であり、決して切り離すことはできない。だから、ヨハネが水でバプテスマを授けた

のとまったく同じ人々が、聖霊と火とによってバプテスマを受けることになっていた。救い主の弟子たちは、ヨハネの務めを通して主のもとに来た人々として、この群れの中にいた。そして彼らは、ペンテコステの日に、実際に聖霊と火とのバプテスマを受けたのである。

『そのかたは手に箕を持って、その打ち場をすっかりきよめ、その麦を倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう』。「そのかた」「その」という代名詞は、聖霊を指しているのではなく、キリストご自身を指している。御霊が手に箕を持って打ち場をすっかりきよめ、麦を倉に納められるのではない。からを消えない火で焼き捨てられるのでもない。この働きはすべて、キリストご自身に割り当てられている。ヨハネの言うことはこうである。自分はたしかにこれをしている。しかし「そのかた」（キリスト）は、「おまえたち」に聖霊と火とによってバプテスマを授けられるだけではない。「その」手に「その」箕を持って、「その」打ち場をすっかりきよめ、「その」麦を倉に納められる。そして「そのかた」は、からを消えない火で焼き捨てられるのである。「打ち場」とは、目に見える教会である。ヨハネが語ったときには、それはユダヤ人の教会であった。箕は、麦とからが共に打ち場にあるうちに、からを麦から分ける。そのあと麦は「倉」に集められる。倉とは地上の神の国であり、麦はそこで、主の臼にかけられることにも、御使いと御使いのかしらたちの間での盛大な祝いにも、備えができている。からは吹き飛ばされ、消えない火で焼かれる。目に見えるユダヤ人の教会は、キリストの務めの中で、徹底的にきよめられた。全能の箕が天から竜巻のように来て、弱く、のんきで、妥協する多くのからを、教会から吹き飛ばしたのである。それは、指導的な聖職者や役員たちであった。こうして会員は、純粋な麦だけに減らされた。その麦は「倉」に集められ、聖霊と火とによってバプテスマを受けた。一方、からは教会から吹き飛ばされ、消えない火の池に投げ込まれた。

一〇節では、象徴は教会を表す果樹園であり、その中の一本一本の木が会員である。一二節では、象徴は教会を表す打ち場である。そこでは、良い者と悪い者、実を結ぶ者と結ばない者、つまり会員全体が、麦とからによって表されている。ホーリネスの説教者の中には、からは一人一人の心の中にある堕落性だと考える人々がいる。しかしもしそうなら、一〇節の実を結ばない木も、それを指していることになる。どちらも何の役にも立たず、どちらも火に投げ込まれるからである。一〇節も一二節も、個々の信者が受ける聖霊のバプテスマを指しているとは、私には思えない。むしろ、目に見える教会のさばきを指しているのである。ヨハネの宣教によって、ユダヤ人の教会にさばきがもたらされた。斧が木の根もとに置かれたのである。キリストの務めを通して、打ち場がきよめられた。麦とからが分けられたのである。麦は「倉」に集められ、聖霊と火とによってバプテスマを受けた。から、すなわち上流気取りの教会員は、取り除かれて焼かれた。一〇節のさばきは、今日、今の運動を通して目に見える教会にもたらされている。一二節のさばきは、一〇節のさばきの続きにすぎず、キリストの再臨のときに起こる。「焼き捨てる」という言葉は、からが堕落性であって、不信仰な教会員ではないことを証明している、と言う人々がいる。しかしマラキ四章一節にも同じ言い方があり、そこでは、それが悪人を指していることがはっきり述べられている。それでも、どちらの箇所でも、悪人が消滅させられるのではないことが明らかに示されている。マラキ四章三節から、悪人は「焼き尽くされ」たあと、正しい者の足の下で灰になることがわかる。マタイ三章一二節は、からは消えない火で、すなわち決して消えることのない火で焼かれると言っている。

一一節は、悔改めと聖霊のバプテスマだけが二つの恵みのわざであると教えているのではないか、と尋ねる人がいる。私はこう答える。罪には二つの面しかない。犯した罪と、生まれつきの罪である。だから、はっきり区別された恵みのわざは二つ、ただ二つである。言いかえれば、二つの恵みのわざが罪の問題を片づける。しかし、悔改めも御霊のバプテスマも、恵みのわざではない。そのうえ、ここでは二つの恵みのわざは、まったく問題になっていない。ヨハネはただ、自分の水によるバプテスマと、キリストの聖霊によるバプテスマとを対比しているだけである。

こうして私たちは、ヨハネが約束し、イエスが裏づけられたバプテスマについて、注意深く長い時間をかけて聖書を調べてきた。また、ペンテコステの日に使徒たちと弟子たちの場合にその約束が成就したことも調べた。では次に、さらに調べを進めよう。コルネリオの場合を取り上げる（使徒一〇章）。

みことばによれば、コルネリオは『信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしていた』。この人よりも高い生き方をしている聖化された人々は、多くはない。ペテロの見た幻では、彼は『天が開け、大きな布のような入れ物が、四すみをつるされて、地上に降りて来るのを見た。その中には、地上の四つ足や獣や這うもの、また空の鳥など、各種の生きものがはいっていた。そして声が彼に聞えてきた、「ペテロよ。立って、それらをほふって食べなさい」。ペテロは言った、「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません」』。この『地上の四つ足や獣や這うもの、また空の鳥』は、何を表していたのか。たしかにそれは、コルネリオとその家の者たちであった。もし神が、ペテロがこの幻を見る前に、コルネリオの家へ行けと言われたなら、ペテロはこう言ったであろう。「主よ、それはできません。彼は異邦人です。汚れています」。しかし神はペテロに、ご自分がその人をきよめられたのだから、清くないと言ってはならない、と告げておられた。『神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない』。だから、コルネリオとその家の者たちは、ペテロがそこへ下って行く前に、きよめられていた。すなわち、聖化されていたのである。

「しかし、あの聖句をどうするつもりか。そこでペテロは、自分とほかの使徒たちがペンテコステの日に聖化されたと言っている。そして、コルネリオとその家の者たちが、ペテロの説教を聞いている間に聖化されたと言っているではないか」。では、それを出してほしい。調べてみよう。「よろしい。使徒行伝一五章七～九節にある」。どうか読んでほしい。「喜んで読もう」。『激しい争論があった後、ペテロが立って言った、「兄弟たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中からわたしをお選びになったのである。そして、人の心をご存じである神は、聖霊をわれわれに賜わったと同様に彼らにも賜わって、彼らに対してあかしをなし、また、その信仰によって彼らの心をきよめ、われわれと彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかった』』。ここで「きよめ」と訳されているギリシャ語は、現在分詞の「カタリオン」ではなく、アオリスト分詞の「カタリサス」である。これを正しく訳せば、「きよめたうえで」となる。だから、こう読むことになる。『その信仰によって彼らの心をきよめたうえで、われわれと彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかった』。これによって、コルネリオとその家の者たちが、ペテロが行く前に聖化されていたという事実は、永久に確かになる。そして、彼らの場合はペンテコステの日の弟子たちの場合と同じだと、はっきり述べられている。だから私たちはこうして、弟子たちがペンテコステの前に聖化されていたという事実に向き合わされるのである。この聖句を示してくれたことに感謝する。

使徒行伝二章三八節は、御霊のバプテスマと聖化が同じものであることを教えている、と言われる。読んでみよう。『悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう』。さて、この聖句が救いの計画全体を含んでいると考えるとしよう。それなら、聖化されて御霊のバプテスマを受けるのに必要なのは、悔い改めることだけになる。献身については一言も言われていないからである。「しかし、ペテロは、聖化されるために献身するように言おうとしていたのだと、推し量らなければならない」。もちろんである。そして、献身が言外に含まれていると推し量らなければならないのなら、聖化も言外に含まれていると推し量ってよい。それも同じように正当なことである。

エペソの弟子たちを取り上げてみよう（使徒一九・一～六）。彼らのバプテスマの前にも、そのときにも、彼らの聖化については何も言われていない。彼らがこのときに聖化されたという証拠はない。もしこのときに聖化されたのなら、聖化の証拠は異言を語ることになる。『それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した』。

御霊のバプテスマは、罪の問題とは何のかかわりもない。それは、奉仕のために力を授けられることである。私たちはカルバリで聖化される。イエスは民をきよめるために、どこで苦難を受けられたか。門の外、すなわちカルバリである。エペソ二章一六節から、敵意、すなわち肉の性質は、ペンテコステではなく、十字架で滅ぼされたことがわかる。イエスは民をきよめるために、門の外で苦難を受けられた。そして、『イエスは彼らを連れ出された』（ルカ二四・五〇）。イ

エスは、助け主を送るために、父のもとへ行かれた。弟子たちは、門の内で聖霊を受けた。私たちは血によって聖化される。『神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである』（第一ヨハネ一・七）。このことを教える箇所はたくさんある。しかし、私たちがペンテコステで聖化されると教える箇所は、一つもない。聖化は聖霊のバプテスマとは別のものである。それは、カルバリがペンテコステと別であり、引き算が足し算と別であるのと同じである。カルバリで古い人は死ぬ。ペンテコステで、あなたは聖霊に満たされる。

イエスには罪がなかった。それでも、務めに就かれる前に、聖霊のバプテスマをお受けにならなければならなかった。このバプテスマは、奉仕のためのものである。イエスは、病人をいやし、死人をよみがえらせるために、それを必要とされた。ゲッセマネでも、カルバリでも、それを必要とされた。罪のないイエスがこのバプテスマを必要とされたのなら、あなたにもきっと必要である。

ほとんどすべての宗派が、何らかのかたちで聖化を教えていると私は思う。すなわち、天に行くには聖化されなければならないと、どれもが教えている。しかし、その清めがいつ、どこで起こるかについては、教えがそれぞれ違う。長老派とバプテストは、私たちは死ぬときに聖化されると教える。ローマ・カトリックは、煉獄でと教える。多くのホーリネスの教会は、ペンテコステでと教える。では神は、私たちがどこで聖化されると言っておられるか。『だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである』。イエスはどこで苦難を受けられたか。カルバリでである。民のために何をされたか。ご自分の血で彼らをきよめられたのである。「そうだ。しかし待ってくれ。長老派も、バプテストも、ローマ・カトリックも、大きなホーリネスの教会も、違うことを教えている」。では、あなたはだれを信じるのか。神か、それともこれらの教会か。多くのホーリネスの人々は、聖霊のバプテスマは聖化であると教える。その理由は、彼らが救いを第一と第二の二つの祝福にしてしまい、そこまでは行くがそれより先には行こうとしないからである。そして、自分たちの教理に合うように聖書をねじ曲げるのである。

さて、もし聖霊のバプテスマが聖化するのなら、ペンテコステまではだれも聖化されなかったことになる。そのときまで、御霊のバプテスマを受けた人はだれもいなかったからである。しかし、ペンテコステまでだれも聖化されなかったというのは本当ではないことを、私たちは知っている。詩篇二三篇で、ダビデの経験を読んでみよ。アブラハムへの命令に注意しよう。『あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ』（創世記一七・一）。聞け。『あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない』（出エジプト二二・三一）。『あなたがたの神、主なるわたしは、聖であるから、あなたがたも聖でなければならない』（レビ一九・二）。このように、キリスト教の時代が始まるずっと前から、ユダヤ人には、きよさ、すなわち聖化が求められていたのである。

まことのヘブル人の実際の経験を見よ。その人は『手が清く、心のいさぎよい者』であり、『ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない』と言われる者であった。ダビデの言葉を聞け。『わたしの不義をことごとく洗い去り、わたしの罪からわたしを清めてください』。『ヒソプをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう』（詩篇五一・二、七）。

『ウヅの地にヨブという名の人があった。そのひとりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった』（ヨブ一・一）。『ふたりとも神のみまえに正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていた』（ルカ一・六）。

聖化は聖別であり、聖霊のバプテスマは力を授けられることである。前者は（その第二の面について言えば）まったく引き算であり、後者はまったく足し算である。聖化は罪にかかわる。聖霊のバプテスマは、ただ聖徒にだけかかわる。

この文章を読むすべての人が、聖化と御霊のバプテスマとを見分けられるようになることを、私たちは願っている。この二つを同じものとみなすことは、聖書を混ぜこぜにすることである。

第九章　前の雨と後の雨

神はパレスチナの地を、すべての地の模範となる地として造られた。あらゆる地帯と気候の産物を備え、それ自体が小さな世界となるようにされたのである。そこで神は、その地の雨雲の来ては去るさまを、霊的なひな型に従って定められた。聖霊の動きを、美しくほのかに描き出すためである。だから、地にとっての雨は、そのまま魂にとっての聖霊に当たる。神はカナンの地の雨を、恵みの働きのひな型として定められた。多くの聖句が前の雨と後の雨に触れている。そして、これらの雨は聖霊のひな型として用いられている（申命記一一・一四、エレミヤ五・二四、ホセア六・三、ヨエル二・二三、ヤコブ五・七）。

カナンの地には、毎年二度、特別な雨が降った。一度は早春で、地を十分にうるおし、まかれたばかりの種を芽生えさせた。その地の土はたいへんきめが細かく重い。だから一度の雨が、土の軽い地の三倍も長くもつのである。前の雨のあと、数週間の乾いた時期が来た。明るく晴れた日が続き、作物を育てる時間が十分にあった。それから、もう一度たっぷりと雨が降った。これが後の雨である。ちょうどよいときに降って、弱った穀物と果実に樹液を満たし、力を取り戻させた。それから後の雨はやんだ。あとには明るく暖かな日の光が残って、すべての穀物を実らせ、熟させた。そして刈り入れる人々が働けるよう、雲一つない美しい日々が続いた。

では、これらの雨を、教会全体にかかわるものとして、霊的に当てはめてみよう。前の雨は、ペンテコステに降った。すると、イエスと弟子たちがまいた種は、すぐに芽を出した。この前の雨は百年以上続いた。その間、教会は救いの大洪水にひたされ続けた。しかし教会が世にもてはやされ、大きな教権組織に作り上げられると、長い日照りが始まった。中世を通じて、ときおり恵みのリバイバルが、にわか雨のように所々に降っただけである。宗教改革のもとで、後の雨の前触れが見え始めた。この数年、この国で続いてきたホーリネスのリバイバルは、この雨に先立つにわか雨である。それは栄光に満ちた、すばらしいものであった。あまりにすばらしいので、多くの人はそれを後の雨そのものと思った。しかし私たちは知っている。これらのリバイバルは恵みに満ちてはいたが、使徒たちの時代のリバイバル、すなわち前の雨には遠く及ばなかった。聖書は、後の雨が前の雨よりもはるかに大きなものになることを教えているようである。旧約の預言の大部分は二重である。すなわち、二度の成就があり、一度目は二度目の影なのである。ペテロが引いたヨエルの預言（ヨエル二・二八〜三二、使徒二・一七〜二〇）は、ペンテコステの日に一部が成就した。しかし、そのさらに大きな成就がまだ先であることは、ヨエル二章三〇〜三二節から明らかである。だから私たちは、後の雨が、使徒たちの時代のリバイバルよりもはるかに大きく力強いものになると期待してよい。

前の雨はペンテコステの日に始まった。その最初の現れは、御霊が語らせるままに異言を語ることであった。それに続いて、病人のいやし、悪霊の追い出しなどが起こった。だから、後の雨の中でペンテコステがくり返され、同じ現れが伴うと期待するのは、ごく自然なことであろう。

御霊がいつもこの世におられたことを、忘れないようにしよう。世の道徳と霊の発展を注意して調べさえすれば、わかることがある。聖霊こそが、世を一段一段と導かれたのである。族長、律法を与えた人、祭司、さばきづかさ、預言者を通して、キリストにまで導かれた。そしてキリストが、ご自分の民に御霊のバプテスマ、すなわち前の雨を受ける備えをさせられたのである。この働きには四千年がかかった。しかし御霊の導きのもとで、ついに土が整えられ、種がまかれ、そして前の雨が降ったのである。

聖書の趣旨から明らかなことがある。旧約の時代には、聖霊の働きの効力に限りがあったのである。その限りは、聖霊のご性質が違っていたために生じたのではない。人間自身の状態のために生じたのである。旧約の預言はとくに強調している。救い主が来られたあとには、聖霊の臨在と力が広がり強まって、祝福が続

くというのである。限られた分量であったものが、そのときには豊かになる。限りのあったものが、そのときには限りのないものになる。キリストが来られたあとには、新しく栄光に満ちた祝福が続くことになっていた。この世での聖霊の働きが増すからである。ヨエルの預言は、それが成就するとき、どの民族も、どの年齢も、どの身分も、祝福からもれることはないと明かしている。ヨハネは、昔の預言者たちと同じように聖霊に満たされていた。しかもそのだれよりも豊かに満たされていた。そのヨハネが立って、こう告げた。『しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』。カナンで毎年降る雨がひな型として表していたのは、教会全体に注がれる聖霊のバプテスマなのである。

　中世の長い日照りの間にも、わずかな聖徒たちが聖霊のバプテスマを受け、御霊が語らせるままに異言を語った。二百年以上前、フランスのユグノーはローマ教会からひどい迫害を受けた。その中にも、聖霊を受けて異言を語った人がかなりいた。百年ほど前、ロンドンのアービングが千年期前の主の来臨を説いていたとき、何人もの人が異言を語った。1900年の初めごろ、カンザス州トピカで何人もの人が異言を語ったと読んだことがある。数年前には、サウスカロライナ州ウェストユニオンで、何人もの人が聖霊のバプテスマを受けて異言を語った。私は、ノースカロライナ州マグノリアの近くに住む、ある姉妹を個人的に知っている。その姉妹は、今のリバイバルに触れる前から、しばらくの間ペンテコステの聖書の証拠を持っていた。今年（1907年）の5月、アラバマ州バーミングハムにいたとき、私はスミスとディクソンという二人の兄弟に会った。二人は自分のペンテコステを受けていた。しばらく話したあと、私は尋ねた。「ペンテコステを受けて、どれくらいになるのか」。「この前の12月で四年になる」と、スミス兄弟は答えた。「私たちは聖化されて何年もたっていたが、そのとき、ペンテコステを受けた人に会った。私たちは光を見て、ひざまずき、御霊のバプテスマを受けて異言を語った」。二人は、ペンテコステの証拠を伴うバプテスマを、今も保ち続けていた。私はバーミングハムを出て、サウスカロライナ州グリーンビルに来た。ここでも、この経験に入って二年になる人々に出会った。このように、聖霊のバプテスマを受けて本当のペンテコステの証拠を持つ人々が、いつの時代にも所々にいたのである。しかし、その数はわずかであった。そして後の雨は、今までとどめられていたのである。後の雨は、1906年に始まったようである。ここで、今のリバイバルの始まりと、その出発点となったカリフォルニア州ロサンゼルスについて、いくつかの記事を載せる。

（ここにはA・H・ポストの記事が『ウェイ・オブ・フェイス』から引かれているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

「この働きの中心は、メソジストの古い木造の教会堂である。売りに出されていた建物で、一部は焼けている。平らな屋根でふさぎ直し、床を張って二階建てにしてある。壁にしっくいは塗っておらず、粗い板に白い塗料を塗っただけである。二階には細長い部屋があり、いすと、カリフォルニアのアメリカスギの板が三枚置いてある。板は背のないいすの上に、端と端をつないで渡してある。これがペンテコステの『屋上の間』である。聖化された魂がここでペンテコステの満たしを求め、新しい言葉を語りながら出て行く。そして、昔の『新しい酒』という言葉を人々に思い起こさせるのである。もっと小さな部屋もいくつかある。そこでは病人に手が置かれ、昔のように『いやされる』。一階には十二メートルに十八メートルほどの部屋があり、ありあわせのいすや長いすや背のない腰掛けでいっぱいである。物見高い人も熱心な人も、ここに何時間もすわって、不思議な音や歌や、天からの勧めに耳を傾けている。その大きな部屋の真ん中に、木綿の布をかぶせた箱が縦に置いてある。くず屋なら十五セントほどの値をつけるであろう。これが説教壇である。ここから告げ知らされるのは、指導者のシーモア兄弟の言う昔ながらの悔改め、昔ながらのゆるし、昔ながらの聖化である。また、悪霊と病気に打ち勝つ昔ながらの力、そして昔ながらの『聖霊と火とのバプテスマ』である」。

「集会は毎朝十時に始まり、真夜中近くまで続く。祭壇の集いは毎日三回ある。祭壇は、部屋の真ん中で二つのいすの上に渡した一枚の板である。ここで、男にも女にも子供にも、心のきよさをはっきり経験するとすぐに、昔のペンテコステのように聖霊が下る。高慢な説教者たちや、頭でっかちの信徒たちがいる。あらゆる説や信念を詰め込んで、ふくれ上がった人々である。その人々が各地か

らここに来て、へりくだってひざまずいた。『わらの中に』ではなく、わらの敷物の『上に』である。そして自分の考えを投げ捨て、自分が空っぽであることを知って神の前に泣き、『上から力を授けられる』ことを願い求めた。正直な信者はみな、聖霊がすばらしく入って来てくださるのを経験した。聖霊はその人のからだと諸機能を満たし、震わせ、溶かし、力づけてくださった。そして御霊は、その人の発声器官を用いて『新しい言葉』を語らせてくださった。こうして、ご自分がそこにおられることをあかしされたのである」（『ウェイ・オブ・フェイス』1906年10月11日の記事）。

このようにして、このつつましい場所で、この運動は始まった。教会の歴史の大きな時代は、どれもつつましい器を通してもたらされた。改革が始まるとき、偉い説教者たちはいつもわきに退けられる。実際、指導者がいつもさらに大きな光を拒むことは、歴史を通じて変わらない。このリバイバルを受け入れたホーリネスの大指導者を、私はごくわずかしか知らない。彼らは、手綱を人に渡すのを、なんと嫌うことか！　自分が手綱を握り続けられるなら、彼らはこの運動を喜んで迎えるであろう。しかし、ああ、これほどつつましい運動を認めるのを、なんと嫌うことか！　しかし、彼らが何をしようと、人々は彼らの手から離れつつある。光を拒む者は、倒れるほかない。この運動には、聖霊のほかに指導者はいない。運動はロサンゼルスのわずかな聖徒たちから始まった。しかし彼らも、指導者とは認められていない。自分が指導者になろうとした人々もいた。しかし運動は、彼らに導かれようとはしない。祈祷会で、教会で、町で、あるいは国で、この運動の先頭に立とうとした人々がいた。私の知るかぎり、その人々はみな失敗した。この運動は、人には導かれない。神に感謝しよう！　御霊が、ご自分の働きを導いてくださるのである。たしかに、このリバイバルを広めるために神に大きく用いられている人は多い。しかし、そのだれも指導者ではない。私たちは聖霊に従っているのである。昨年の11月（1906年）、ノースカロライナ州ダンのG・B・キャッシュウェル牧師は、カリフォルニアへ行った。自分のペンテコステを求めて、大陸を横断したのである。彼は聖霊を受けて、ダンの自宅に戻った。そして1906年12月29日、この町で集会を始めた。集会はひと月近く続き、その間に南部の何十人もの人々が自分のペンテコステを受けた。彼らはここからあらゆる方面に散って行き、火を広め始めた。そして火は、今もなお広がり続けている。神をほめたたえよ！　主をほめたたえよ！　主をほめたたえよ！

こうして今、大きなリバイバルが私たちに臨み、世界を席巻している。これが後の雨である。この運動から、すでに多くの宣教師が外国の伝道地へ出て行った。これほど速く、これほど広く広がった運動は、かつてなかった。今のところ、救われる罪人は多くない。後の雨は、種を芽生えさせるためではなく、実を熟させるために降るのである。だから、このごろキリスト教国で多くの罪人が救われることを期待しなくてもよい。『シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び楽しめ。主はあなたがたに前の雨をほどよく賜い、またあなたがたのために雨を、前の雨と後の雨とを、正月に降らせられる』（ヨエル二・二三）。この聖句は、こう教えている。前の雨が一度も降ったことのない地、すなわち異教の伝道地も、このリバイバルの間に前の雨と後の雨の両方を受けるのである。だから私は、外国の伝道地で何百万もの魂が救われ、聖化され、聖霊に満たされることを期待している。

後の雨のあと、乾いた時期が来た。その間に穀物は実り、熟した。そして刈り入れが来て、それから冬が来た。このリバイバルの終わりにも、同じことが起こる。この大いなるペンテコステの注ぎのあと、また乾いた時期が来る。そのときには厳しい試練が聖徒たちを熟させ、刈り入れに向けて実らせる。それから、大患難という冬の嵐が始まる。その嵐は、千年期の春の朝が来て、はじめて終わる。そのとき、キリストと栄光を受けた聖徒たちは、「婚宴から帰って来て、世界を治める」のである。

イエスは、『助け主が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう』と言われた。前の雨の間、聖霊は人を通して語らせるとき、主の苦難と死と復活について語られた。後の雨の今の時代には、語られることの中心は、主の再臨、小羊の婚姻、そして小羊の婚宴である。

ホーリネスの人々は、何年も前から、各地に広がるリバイバルを求めて祈ってきた。神はそれを送ってくださった。ところが、このリバイバルはみことばにさらに大きな光をもたらし、それが古い説とは違っていた。また、昔と同じ経路や指導者を通して来たのでもなかった。この国じゅうに出回っている数多くのホー

リネスの本とも、ぴったりとは合わなかった。そのために、ホーリネスの人々の半分は、このリバイバルに背を向けたのである。

高く登れば登るほど、悪魔は激しく戦いを挑んでくる。速く走れば走るほど、ほこりは多く立ち、音は大きくなり、線路の家畜も多くはねる。それでも、まことに不思議なことに、運ぶ乗客も多くなるのである。同じ時刻表で走れないほかの鉄道の人々は、稲妻急行に乗る人々には危険と災難が必ず降りかかると言いふらす。そうして、稲妻急行があることを世に宣伝する手伝いをしているのである。こうして、その急行の車両はいつも満員になる。それでも、のろい列車にも多くの乗客がいる。普通の運賃を払ってでも、一ドルで一日じゅう乗っていたいという人もいるのである。

私は、進んでいく神学を信じる。攻めの努力を、かき立てることを、争いを、征服を、そして冠を信じる。摩擦のない運動はなく、争点のない戦いはなく、境界線を引くことのない争点はない。悪魔はこの世で権利を持っている。しかしそれは、征服によって得た権利である。悪魔はその権利によってだけこの世を握っている。そして自分の地が血でおおわれるまでは、一寸たりとも明け渡そうとはしない。境界線が引かれたとき、神に忠実な人々が真理と正義の側に立たなかったことは、一度もない。そして神は彼らと共に戦われ、彼らは神によって勇ましく戦った。神ご自身が、『ひとりで千人を追い、ふたりで万人を敗る』と言われたからである。

人がこれまで見た十字架の最大の勝利は、戦いのさなかに起こった。大砲のとどろきと小銃の音と硝煙が、神の御声をかき消し、御顔を隠しそうになったときである。それでも、戦いの騒音と煙が吹き払われたとき、私たちは見た。神は私たちと共におられ、御使いたちが私たちのまわりに陣を敷いていたのである。聖書は戦いについて多くを語っている。そして私たちは「十字架の兵士」を歌う。私たちは今、まさに戦いの中にいる。勝利は冠としゅろの枝と立琴を意味するが、傷と苦しみをも意味する。しかし命令はこうである。『聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦いなさい』、『信仰の戦いをりっぱに戦いぬきなさい』、『永遠のいのちを獲得しなさい』。

使徒たちは、イエスを宣べ伝え、救いの計画を説き示すのに、大きな戦いをした。それから中世の長い日照りが来た。その間に、真理全体が見失われた。数世紀前、神はマルチン・ルターを起こして、福音の土台である信仰による義認を据えさせられた。それがどんな大変革を生んだか、ルターがこのすばらしい真理を説いてどれほど反対されたかを、あなたは覚えているであろう。ルターは、なんとヨーロッパを揺り動かし、世界を震わせたことか！　なぜか。神の真理に新しい光をもたらし、その背後に神の御霊がおられたからである。

この真理が受け入れられたあと、神はジョン・ウェスレーを起こされた。そして、信仰によってまったく聖化されるという偉大な教理を説かせて、さらに光を照らされた。ウェスレーもルターと同じように反対された。しかし世界は、もう一度大きく揺り動かされた。聖霊が、宣べ伝えられた真理を、しるしと不思議によって確かなものとしてくださったのである。

それから、神癒と、千年期前の主の来臨の真理が来た。そのどれもが、暗やみの力に攻撃された。今では、義認、聖化、神癒、千年期前の主の来臨の真理が、多くの人に受け入れられている。そこで神はさらに光を照らしておられる。そして今、戦いは聖霊のバプテスマとペンテコステの証拠をめぐって起こっているのである。

すべてのことが頂点に達しつつある。いよいよ極まりつつあるのである。神の子らも、同じように賢くあるべきではないか。神には、ご自分の子らに、ときに応じて思いのままに新しい光をお与えになる権利があるのではないか。大もとの原則は変わらない。しかし、神の主権による原則も働いている。それは聖書の中でさえそれほどはっきりとは示されていないが、いつも聖書と調和している。私たちが心に留めている事実がある。初代教会が背教したころから、私たちは手探りで、ゆっくりと神のもとへ帰って来た。信仰がその考えをつかめるにつれて、また光を受けられるにつれて、帰って来たのである。回復が進む中で、義認が見いだされ、再び確立された。当時はひどく攻撃されたのである。それを攻撃したのは、いつものことであるが、信仰を言い表している教会であった。それはたいてい教会自身の争いであるらしい。教会の内輪の争いであり、いつも教会自身が最悪の敵なのである。それから聖化が来た。これも長く失われていた祝福であ

る。火刑のまき、石、犬、わめき立てる群衆、そして非難。それが、その代価であった。自分たちにとって最善のものに逆らうこの抵抗を、会堂はいつも盲目的に率いてきた。

今、光が来た。後の雨が降っている。進めという命令が、私たちに下っている。私たちはどうすればよいのか。もし私たちが、これまで持っていた最善の光のもとで「まったく満ち足りて」いたとしよう。それが妨げとなって、今日、神からさらに大きな光と霊感を受けられなくなってよいであろうか。人は初めて回心したとき、しばらくの間は「まったく満ち足りて」いる。しかし神とどこまでも共に行くつもりなら、やがて神が肉の思いを根こそぎにしようとしておられることを知る。するとすぐに、聖化に飢え渇くようになる。こうして、恵みの一つの段階から次の段階へと進んでいくのである。自分が暗やみにいて、暗やみの中で説教していたことを認めるのを、恐れ、恥じる人がたいへん多い。ああ、兄弟たちよ、この束縛から抜け出してほしい。人が神に加えている制限から抜け出してほしい。私たちは前進しなければならない。私たちは神のもとへ、御霊の時代の教えへと帰って来ているのである。聖書はずっと、行く道を示す私たちの海図であった。しかし今、聖書は御霊によって開かれ、使徒たちの時代の光に戻りつつある。私たちは森を抜け出しつつある。物は近づくにつれて、はっきり見えてくる。以前はぼやけて、縮まって見えた。今は違ったふうに見え、悟ることができるのである。

第十章　御霊の実

主は死の直前に、弟子たちに語られた。そのとき、ご自分と信者すなわち弟子との間に、いのちの通った結びつきがなければならないと強く説かれた。キリストと弟子たちの関係は、機械的、条件付き、一時的、任意のいずれの結びつきでもないはずであった。ぶどうの木と枝の間にあるのと同じほど、いのちの通ったものであるはずだった。実際、主はまさにそのたとえを用い、それによってこの真理を強く示しておられる。そこで主は、こう論じられる。ぶどうの木のいのちを受けていない枝は死んでいて、焼かれるほかに何の値うちもない。しかし、このいのちが伝えられ、用いられるなら、実が結ばれる。その実は、時が来れば、内なる性質の証拠となる。だから弟子たちの結ぶ実は、恵みの特定の段階の証拠ではなく、彼らが弟子であることの証拠となるのである（ヨハネ一五・一～八）。

今考えたい大切な真理は、次のことである。本当に弟子であるかどうかを試すものとなる、霊のいのちの実とは何か。実によって、二つの結果がもたらされる。すなわち、養いと増し加わり、言いかえれば食物と種である。実の本来の第一の目的は、種を養うことである。そして、種がのちのいのちの中で絶えることなく続き、育っていくように保ち、それを確かにすることである。実が自分以外のいのちを養うことがあっても、それは二次的な目的にすぎない。ここでは、幹の性質や枝の必要を調べるつもりはない。気候や天候、嵐、霜、暑さ、日照りなどのさまざまな移り変わりに、枝が耐えられるかどうかを尋ねるつもりもない。枝を外から飾っている葉の形さえ、考えないでおく。そうではなく、ここで尋ねたいのは、そこから生じる結果である。それは魂の中で霊のいのちを絶やさず、種が再び生きるために死んだときに、その養いと成長を確かにするものである。言いかえれば、ここで尋ねたいのはこうである。御霊が魂に与えてくださる霊の特質とは何か。死の衝撃に耐え、信者の永遠の栄光の土台となる特質である。

もちろん、私たちも知っている。豊かに育ったクリスチャンの品性は、ほかの魂に霊の養いを与えるいちばん確かな手段である。しかし、結果を原因と取り違えないようにしよう。実を結ぶことから流れ出る祝福を、実そのものと取り違えないようにしよう。だから、いつも覚えておこう。信者のうちに育ったクリスチャンの徳こそが、御霊の実であり、弟子であることの証拠なのである。

パウロはこう言う。『御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制』（ガラテヤ五・二二、二三）。これは、それだけの種類の実を数え上げたものではない。賜物は種々あるが、実はただ一つである。これらは、キリストとの結びつきから生じる一つの共通の結果の、さまざまな特質である。だから、全体としてまとめて御霊の実となるのである。クリスチャンはみな、恵みのどの段階にあろうと、この実を結ぶ。特質の一つかいくつかを結ぶだけではない。そのすべて、すなわち御霊の実を、同時に、しかもいつでも結ぶのである。

実のこれらの特質は、聖霊によって生み出される。しかし魂の中で育つのは、自然的にではなく、霊的にである。そこでクリスチャンには、それらが育つことを求める責任がかかってくる。御霊が与えてくださる手段を用いて、それらをますます豊かにするのである。その成長は、いじけて不完全なこともあり、妨げられることもある。しかし、私たちがすべての妨げを取り除き、聖霊が私たちの魂を住まいと定めてくださるようにするなら、この実は見いだされる。育つ力に大小はあっても、見いだされるのである。これらの特質の成長を何ものにも妨げさせないよう心がけることは、クリスチャンとしての私たちの務めである。世は、それらが最も高く育ったときの力に触れることを、切に必要としているからである。

また、これらの特質が満ちあふれている魂の、幸いな状態を認めないわけにはいかない。それは天の状態である。ああ、私たちがみな、これらの徳にますます富むことを求めるように。

第十一章　バビロン、すなわち言葉の混乱

聖書の中のすべてのことは、創世記に始まっている。真理のどの筋道も、誤りのどの展開も、自然の歴史と教会の歴史のどの局面もそうである。これに気づくと、驚かずにはいられない。ここには、天と地と、その中にあるすべてのものの創造の記事がある。世界全体がエデンだったにちがいない。その中で園は、罪を知らなかった最初の夫婦の住まいとして選ばれた場所であった。それは清く聖なる、幸いな、罪も苦しみもない世界であった。ここで私たちは、罪がどのようにして世にはいったかを見る。また、あがない主についての最初の約束もここにある。創世記では、人が一歩一歩、神からますます遠くさまよい出ていくさまが見える。黙示録では、すべてのものが神のもとに連れ戻され、新しくされるさまが見える。人が神から一歩離れるたびに、人と神との間に、また人と人との間に、大きな淵ができた。人がその淵に橋を架けて再び渡ることができたのは、ただ私たちの主また救い主イエス・キリストのあがないの恵みと救いによってである。

創世記一一章を読めば、神の教会に敵対するために地上で初めて作られた組織の記事が見つかる。人は神から遠くさまよい出ており、罪は地の諸族を国々に分けていた。それでも、全地は同じ発音、同じ言葉であった。人の子らは言った。『さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう』。この町はバベルと呼ばれた。それは当時の言葉で「神の門」という意味である。もちろん、ノアの神のことではない。このくわだて全体が、まことの神とその御心と命令に、わかっていながら、わざと逆らうものだったからである。神は下って来られ、そこで彼らの言葉を乱し、互いに言葉が通じないようにされた。『こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てるのをやめた』。この言葉の乱れのために、バベルあるいはバビロンという語は、今では「混乱」または「誤解の町」を意味する。

バビロン、すなわち言葉の混乱が人と人との間に掘った淵は、大きく深かった。川には橋を架けられる。海も渡ることができる。しかし向こう岸に着いても、バビロンの引いた線は、なお私たちと隣人との間にある。文法書や修辞学の本を修め、辞書を勉強ですり切れるまで使うことはできる。しかし、知力のすべてを一生この仕事に注いでも、人が望めるのはこれだけである。わずかな裂け目に橋を架け、わずかな言葉を不完全に話すことである。

神との関係について言えば、罪の問題はカルバリで完全に取り去られた。しかし世界全体について言えば、罪のもたらしたものがすべて取り除かれることは、地が新しくされるまでない。裂け目が完全に埋められることは、それまでないのである。新しくされた地では、バビロンの名残はすべて滅ぼされているので、全人類が同じ言葉を話すようになる。救い主は、世が罪に陥ったあとで世に約束されたかたである。そのかたの務めは、ご自分の民をこれ以上の罪から救うことだけではなかった。主が世に来られた第一の目的は、罪がすでにしてしまったことを元に戻すことであった。すでに述べたように、一人一人について言えば、罪の問題にはカルバリで、ただ橋が架けられただけではない。それは完全に取り去られたのである。それでも、罪のもたらしたものの多く、多くの裂け目は、地が完全にあがなわれるまで残るのである。

私たちの心がカルバリですべての罪からきよめられたあと、神の恵みと力のうちに進んで行くとしよう。そうすれば神は、ほかの人々が落ち込む多くの裂け目に橋を架け、私たちに渡らせてくださる。「言葉の混乱」は、「万物更新」のときまで完全に取り去られることはない。それでも、この裂け目にはペンテコステで橋が架けられた。バビロンに橋を架けることは、イエスご自身の約束の中に含まれている。『ただ、あなたがたは、あなたがたの上にくだる聖霊の力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう』。イエスはその前に、『全世界に出て行って、すべての造られたもの

に福音を宣べ伝えよ』と言われたばかりであった（マルコ一六・一五）。なんという務めであろうか！　人間の目から見れば、できないことである。裂け目はあまりに多く、あまりに大きくて、渡ることができない。いつになったら、さまざまな言語をすべて学べるのか。ところが、主はこう言われる。「いや、あなたがたの上にくだる聖霊の力が、橋を架けるのである。エルサレムにいるあなたがたから、ユダヤの全土へ、サマリヤへ、さらに地のはてまで架けるのである」。恵みのどの段階にあろうと、どれほどの高みに達していようと、かまわない。神のためにどんな働きを成し遂げていようと、かまわない。自分のペンテコステを受ける人は、これまで一度も渡ったことのない橋を渡るのである。異言の賜物を受けた人には、自分からバビロンを越えて、地上のすべての造られたものへ通じる橋がある。

なぜ人は、異言の賜物を小さく見るのか。ほかの八つの特別な賜物はすばらしく、「更に大いなる賜物」に数えられている。しかし、そのどれ一つとして、バビロンに橋を架けはしない。出会うすべての人に福音を宣べ伝えられるのは、大きなことであろうか。それなら、異言の賜物はまさにそれほど大きいのである。

あちこちで、ときおり大きな会議が開かれる。集まるのは、学のある聖職者たちや、高い尖塔の教会のお偉方である。背の高いシルクハットをかぶり、つややかな上着を着て、先のとがった靴をはき、金の握りのステッキを持っている。浮かない顔をし、陰気な面持ちで深いため息をつきながら、「どうすれば大衆に近づけるか」と互いに相談している。彼らは時代に十九世紀も遅れている。その問題は、ペンテコステで解決されたのである。あなたがたの「高い頂」から降りて来なさい。そして聖霊と火とのバプテスマを受けるまで、エルサレムにとどまっていなさい。そうすれば、すぐに向こう岸へ渡ることができる。そして大衆のほうから、あなたがたに近づいて来るであろう。

何世紀もの間、私たちはすべての国民に福音を宣べ伝え、救いの喜ばしい知らせをすべての造られたものに届けようと努めてきた。神は、用いられた手段と払われた努力を、できるかぎり祝福してくださった。しかし、その歩みは遅かった。今、神は福音の広がりを増し加えておられる。ご自分の子らがこれまで何年もの学びと練習によって渡らなければならなかった裂け目に橋を架け、すぐに渡らせてくださるのである。私は信じている。多くの人が御霊の賜物を受けるとすぐに、迫害が起こって、私たちを地のすみずみまで散らすであろう。こうして、すべての造られたものに福音が宣べ伝えられるのである。

このごろ多くの人が経験している、文字を書く現れがある。これは疑いもなく、神が異教徒の間に福音の広がりを増し加えようとしておられる手段である。御霊の力のもとで、ほかの言語で何十ページもが、短い時間に片手で書かれることがよくある。外国の言葉と節回しで歌い、楽器を奏でる現れもある。これも疑いもなく、福音を広めるために神に大きく用いられるであろう。

こうして私たちは知る。「言葉の混乱」が地の国々の間にもたらした大きな隔たりには、橋が架けられている。しかも、橋を架けるのはペンテコステだけなのである。

第十二章　さばき

『さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に従わない人々の行く末は、どんなであろうか。また義人でさえ、かろうじて救われるのだとすれば、不信なる者や罪人は、どうなるであろうか』（第一ペテロ四・一七、一八）。

聖書には、私たちに悟れないこともあるかもしれない。しかし、あまりに明らかで誤解しようのないことも多い。その一つが、『神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている』という事実である（使徒一七・三一）。しかし、このさばきがどのように、またどんな状況のもとで行われるのかについては、意見が分かれている。論じ合う余地もあるであろう。

私はかつて、天を一つの大きな講堂のように思い描いていた。片側には壇があり、入口のすぐ前には台がある。さばきのときには、キリストが入口にすわられ、この壇の上にすべての国民と民族が集められると思っていた。ひとりの御使いが名簿を読み上げる。最初に生きた人から始めて、アダムの子孫を残らず呼んでいく。名を呼ばれた者は一人ずつ台に立ち、ひざをかがめて、自分の生涯について神に申し開きをする。さばき主は、その行いに応じて、ある者をご自分の右に、ある者を左に置かれる。それから、右にいる人々には『さあ』と言い、左にいる人々には『わたしを離れて』と言われる。私がさばきについてこう考えていたのは、心が真理に対して開かれていなかったからではない。真理が一度も示されたことがなかったからである。ただみことばを学ぶだけでは、この事柄の事実をつかむことができなかったのである。のちに私は光を見て、さばきについてのこうした考えが誤りであることを知った。上に書いたことは、さばきについてのあなたの考えとぴったり同じではないかもしれない。しかしクリスチャンの大多数は、だいたい私と同じように考えているのである。

誤った考えが生じるのは、多くの人が復活と携挙の目的を誤解しているためである。復活と携挙は、さばきに先立つものでも、さばきの幕開けとなるものでもない。さばきの一部である。さらに正しく言えば、すでに済んださばきの結果なのである。

みことばは、『さばきが神の家から始められる』と告げている。また、キリストが『生ける者と死ねる者とをさばく』用意をしておられるとも告げている（第一ペテロ四・五）。さて、言葉に何かの意味があるなら、「生ける者」は生ける者であり、「死ねる者」は死ねる者である。「生ける者」が死ねる者を意味することはありえず、「死ねる者」が生ける者を意味することもありえない。キリストは「生ける者」を生ける者として、すなわちこの世にいる人々としてさばく用意をしておられる。また「死ねる者」を死ねる者として、すなわちこの世を去った人々としてさばく用意もしておられる。ある人々は、この時代の終わりにすべての死人がよみがえらされると教える。そして、すべての生ける者と共に一つの壇の上に集められてさばかれるという。それなら、キリストは生ける者のさばき主であって、死ねる者のさばき主ではないことになる。また、ほかの人々は、すべての生ける者が「打ち殺される」と教える。そして、すべての死人と共に一つの壇の上に集められてさばかれるという。それなら、キリストは死ねる者のさばき主であって、生ける者のさばき主ではないことになる。こうして、私たちが何世紀も信条に織り込み、望みの土台としてきたこの聖句は、ばらばらに崩れてしまう。しかし、神のみことばは必ず堅く立つ。反対があっても、人の考えや説に反していても、『律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされる』のである（マタイ五・一八）。

だから、誤った説はすべて捨てよう。そして開かれた心で、聖書を調和させて悟ることができるよう、助けてくださいと神に願おう。

実は、さばきは、イエスがご自分の民を取り去るために来られる前に始まるのである。マタイ二四章を読むと、復活と携挙がどのような状況で起こるかがわかる。『そのとき、ふたりの者が畑にいると、ひとりは取り去られ、ひとりは取り残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていると、ひとりは取り去られ、ひとりは残されるであろう』。ルカは言う。『その夜、ふたりの男が一つ寝床にいるならば、ひとりは取り去られ、他のひとりは残されるであろう』（ルカ一七・三四）。畑にいるふたりも、うすをひくふたりも、寝床にいるふたりも、どちらもクリスチャンである。ふたりは同じことをしている。それなのに、ひとりは取り去られ、ひとりは残される。取り去られる人々は、さばかれるためではなく、すでに済んださばきの報いを受けるために取り去られるのである。さばきなしに、どうして区別がありえようか。ここで、境界線がすでに引かれていることがわかる。このふたりについては、さばきはすでに行われたのである。そして、このさばきの結果、ひとりは取り去られ、ひとりは残される。

花嫁が去るとすぐに、大患難が始まる。その間に、「残された者たち」の多くが群れをなして上って行き、空中にいる一団に加わる（黙示録六・九、七・九～一七、一四・一、一三～一六）。この恐ろしい日々が終わる直前に、一つの群れが小羊の婚宴に招かれるのが聞こえる（黙示録一九・九）。それからイエスは婚宴から下って来られる。そして悪魔を捕らえて千年の間つなぎ、底知れぬ所に投げ込み、閉じ込めて封印される。それから主はエルサレムに御座を据え、千年の間、地上を治められる。その間、主と主の聖徒たちは、そのとき地上に生きている諸国民をさばくことに携わる。『千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される』。サタンは出て行って、千年期の間に救われた多くの異邦人を惑わす。そして、自分に従ってくれば王を捕らえて世界を自分たちのものにできる、と信じ込ませる。それからサタンは、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲する。すると、天から、神のもとから火が下ってきて、サタンとその仲間をすべて焼き尽くす。それから、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれ、世々限りなく日夜、苦しめられる。神のラッパが鳴り響いたとき（第一テサロニケ四・一六）から今まで、聖徒たちはさばき主の右に集められてきた（マタイ二五・三三）。そして今、「大きな白い御座」のさばきが行われる。ヨハネはそのさばきについて、こう言っている。『死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に投げ込まれた』（黙示録二〇・一二～一五）。こうして、最後のさばきの場面は終わる。

『さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に従わない人々の行く末は、どんなであろうか』。

今日、この聖句は私たちの間で成就している。さばきは始まった。どこで始まったのか。神の家である。選ばれた者たちの間である。さばきは、はっきりと境界線を引いている。多くの人が、さばきのもたらした大きな分裂を声高に嘆き悲しんでいる。それでも、さばきは進んで行く。「ああ、一つになろうではないか」と彼らは叫ぶ。「この分裂はいつまで続くのか。私たちに必要なのは一致である」。それでも彼らは自分の立場を言い立て続け、境界線を越えて自分たちの側へ戻って来るよう、私たちみなに懇願する。「不幸は仲間を欲しがる」とは、まことに真実な言葉である。私たちは自説を取り消すべきか。それとも前進すべきか。今は危険な時代であり、さばきの日々である。あなたはどこに立っているのか。境界線のどちら側にいるのか。この境界線は一つの地方だけのことではなく、この分裂も一時的なものではない。境界線は全世界に及び、その結果は永遠の運命なのである。すべての造られたものが、この争点に向き合わなければならない。どの魂も、自分の立場を決めなければならない。だれも長く中立のままではいられない。神も人も悪魔も、私たちがどちらか一方の側に立つことを求める。しばらくは逃げていられるかもしれない。しかし、遠くへ行かないうちに追いつめられるであろう。特定の側を取るよう強いられているわけではない。しかし、どちらか一方の側は取らなければならない。もしこの運動が地獄から生まれたのなら、それに反対するがよい。もし神から出たものなら、その列に加わるが

よい。この運動から離れて立っている余裕のある人は、みなそうしていればよい。そうしたい人は、みな縁のあたりに手を出して、蛇や木の葉をかき回していればよい。自分たちこそこのリバイバルの大指導者であり、大きな原動力であるかのような印象を与えようとしていればよい。自分自身がその泉から飲んだという証拠さえないのに、である。しかし私は、戦車の車軸にとまって「なんとほこりを立てていることか」と言ったはえには、なりたくない。また、後の雨の祝福が降り注ぐ下から、自分の貧しい魂を遠ざけておく余裕など、私にはとてもない。今の運動を本当に推し進めている人々と、すっかり交わりを共にする立場に立たずにいることもできない。

少なくとも、地上のすべての聖徒は、この運動と向き合わなければならない。光を見ながら、ことさらにそれに逆らう人々は、おそらく背教するであろう。神は、私たちに与えられたすべての光について、厳しく申し開きを求められる。しかし、花嫁の一員とならなかった人々の多くも、ほかの群れの中で、永遠の至福の岸にたどり着くであろう。しかし、さばきは私たちから始まらなければならない。そして教会の一部が背教して、義人でさえかろうじて救われるのだとすれば、罪人や不信なる者はどうなるであろうか。

『心はすすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか。また、約束をして下さったのは忠実なかたであるから、わたしたちの告白する信仰を、動くことなくしっかりと持ち続け、愛と善行とを励むように互に努め、ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか。もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある。モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば、神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い刑罰に価することであろう。「復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と言われ、また「主はその民をさばかれる」と言われたかたを、わたしたちは知っている。生ける神のみ手のうちに落ちるのは、恐ろしいことである』（ヘブル一〇・二二〜三一）。

この言葉は、恐ろしい警告を伝えている。自分の務めを知っていながら、それを果たそうとしない魂への警告である。また、ペンテコステの光を十分に受けていながら、神がすべての人に差し出しておられる祝福から、意志の力で背を向ける魂への警告である。二二節によれば、この聖句は、心がすすがれて良心のとがめを去り、からだが清い水で洗われている私たちに当てはまる。だから、私たちの告白する信仰をしっかりと持ち続け、すなわち今立っている地を守り、前進しよう。私たちは『かの日が近づいているのを見て』いるのである。私たちがきよめられたイエスの血を、小さく見ることのないようにしよう。その血を汚れたもの、だから罪からきよめることのできないものとみなしてはならない。どんなかたちでも、聖霊を侮ることのないようにしよう。『もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある』からである。「逆らう者たち」とは、だれのことか。いま挙げた人々、すなわち、自分がきよめられた血を汚れたものとし、御霊を侮る人々である。だから、みまえに近づき、上から力を授けられるまでとどまっていようではないか。

神は、カルバリとペンテコステをどちらも神聖なものとしておられる。そして人にも、それを神聖なものとすることを求めておられる。神の真理の光を受けながら、カルバリかペンテコステに背を向ける魂がある。その魂は、救いと力を与えようという神の最後の申し出に背を向け、永遠の災いへと向かうのである。

父なる神に対して罪を犯すことは、それだけでも十分に重い。そのような罪が人類を滅ぼしたからである。私たちのためにご自身をささげられた神の子に対して罪を犯すことは、さらに重い。それは敵意に、このうえない恩知らずが加わったものだからである。しかし、罪を示すかた、教えるかた、助け主である聖霊に対して罪を犯すことは、なおさら重い。それはほかのすべての罪を含むだけでなく、そのうえに、すべての真理と光に対するそむきを加えるからである。だから、罪の深みにある魂も、いのちの道にある魂も、恵みのどの段階にある魂も、

みな知ってほしい。どんなかたちであれ、聖霊に対して罪を犯すことが、どれほど恐ろしいことであるかを。

『聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない』。

第十三章　十人のおとめ

マタイ二五章にしるされている十人のおとめのたとえは、長い間さかんに論じられてきた。そこから引き出された説も、じつにさまざまである。示された説明があまりに多いので、正直に真理を尋ね求めようとする人は、だれに従い、何を信じればよいのか、ほとんどわからない。私は子供のころから、ただ真理を知るためだけに、このたとえを注意深く学んできた。この主題について見つけられるかぎりの説明を、熱心に、開かれた心で読んできた。また、ほかの人々が自分の考えや思いを述べるのを、特に骨折って聞いてきた。私の心は、今も知識と真理に対して開かれている。この主題についてのあなたの考えも、喜んで聞こう。これまで見聞きしたすべてのことに、多かれ少なかれ助けられてきた。しかし、説明はじつにさまざまであった。それでも、神の前で祈り、待ち望んでいたときに与えられた説明ほど、私を満足させたものはなかった。

以下に、長年注意深く学んだ末に、私の心に最も強く刻まれた考えを示す。これがたとえであることを、心に留めておこう。たとえを語るとは、実際にあった事実から霊的な真理を引き出すことである。主が語られたたとえを悟るいちばんよい方法は、まず、主がたとえを引き出された事実に目を留めることである。

「この十人のおとめのたとえに描かれている細かな点は、今日に至るまで東洋の風習とまったく一致している。そして昔と同じように、今も婚礼の儀式の大切な一部となっている。ユダヤ人の風習では、花婿が友人たちを連れて花嫁の家へ行き、華やかな儀式のうちに花嫁を自分の家へ連れて来た。花嫁には、父の家から若い友人や仲間たちが付き添った。ほかの人々は、たとえのおとめたちのように、どこか都合のよい所で行列を迎えて加わった。そして婚礼の一行のほかの人々と共に、祝宴の広間にはいったのである」。

「東洋では、婚礼はいつも夜に行われる。ラビたちの伝えによれば、花嫁がこれから住む家へ導かれるとき、行列の前を、棒の先につけた十のあかりが運ばれた。十は、ユダヤ人が公の儀式に関していつも挙げる数で、聖なる数とされていた。そのため、一つの所に十人のユダヤ人が住んでいれば、そこに会堂があり、そこに会堂を建てるべきだという決まりがあった」。

「ユダヤ人のあかりは、油を満たした浅い器で、その油に灯心が浮かんでいた。（中略）婚礼の行列では、このあかりを棒の上に載せて、たいまつにした。そして、あかりに油を補うための油を、別の入れものに入れて運んだ」（M・B・チャップマン博士）。

イエスがこのたとえを、上の引用に示したような、ユダヤ人のふつうの婚礼の風習から引き出されたことは疑いない。この風習の短い描写は、たとえの本当の意味を悟るのに大いに助けになった。この光に照らして、たとえを学んでみよう。

おとめたちがだれであろうと、みな花婿を迎えに出て行くことは明らかである。花婿とは、ほかでもないイエスご自身である。以前の考えをすべてわきに置こう。そして、以前の見方とぶつかろうとぶつかるまいと、開かれた思いと心で真理を学ぼう。そうすれば、たとえの元になった風習と、たとえの中のいくつかの言葉から、はっきりとわかる。このおとめたちは、だれも花嫁ではないのである。このおとめたちが家を出て、道のどこかで花婿の来るのを待とうと出て行くとき、花嫁は自分のへやで婚姻のために装っている。花婿が来ると、用意のできていた者たちは、花婿と一緒に婚姻の場にはいる。しかし私には、彼女たちは付き添いにすぎず、花嫁そのものではないと思われる。彼女たちは『花婿と一緒に婚姻の場にはい』ったが、自分が花婿と結婚したのではない。これは新しい考えかもしれない。しかし、先へ進もう。

私は、このたとえ全体が患難の場面であると確信している。マタイ二四章にはこうある。『弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世

の終りには、どんな前兆がありますか」』。ここには二つの問いがある。宮はいつ壊されるのか（一、二節を参照）。そして、世の終りに主が来られるときの前兆は何か。そこでイエスは、その両方に答えていかれる。主は、エルサレムの滅亡が大患難のひな型であり、前触れであることを示される。この章のいくつかの節は、まったく前者に当てはまる。ほかの節は、まったく後者に当てはまる。また、両方に当てはまる節もある。この章は、こう言って結ばれている。『主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。よく言っておくが、主人は彼を立てて自分の全財産を管理させるであろう』。ここに花嫁がいる。しかし、僕が目をさましていないで、罪に戻ってしまうなら、その僕の主人は思いがけない日に帰って来る。そして彼を断ち、偽善者たちと同じ分け前を与えるであろう。彼はそこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。つまり、その僕は残されて、大患難を通らなければならなくなる。ここには、マタイ八章一二節や二五章三〇節にあるような「外のやみに追い出され」という言い方はない。あとに挙げた節では、泣き叫んだりすることは「外のやみ」、すなわち地獄でのことである。大患難は、そのひな型にすぎない。この悪い僕は「追い出され」るのではなく、ただ「分け前を与えられ」るだけである。

『そこで』（花嫁が自分のへやにはいったあとで）『天国は』（サタンの国でも、世の国でも、やみの国でもない）『十人のおとめに似ている』。彼女たちはみなおとめであった。おとめであることは、清さを意味する。彼女たちはみな聖化されていた。もし肉の性質を持っていたなら、おとめではなかったであろう。罪が彼女たちを汚れたものにしていたはずだからである。このおとめたちは清く、罪から解き放たれていたので、聖化されていた。清さと聖化は同じ意味だからである。「では、聖化された人々は花嫁の一員にならないと言うのか」。それこそ、このたとえの教えていることである。そして私は、たとえ天が落ちようと、みことばにしがみつくつもりである。たとえ、それが世の中の人の造った信条すべてとぶつかろうとも。

『その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである。もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められるであろう』（マタイ二四・二一、二二）。「選民」と訳されたギリシャ語は、エクレクトス（eklektos）である。これは二重に「外へ」取り出されたことを意味する。だから「選民」とは、聖化された人々である。ここで告げられているのは、こうである。患難の期間が縮められないなら、それを生きのびる者はひとりもない。しかし、聖化された人々、すなわちおとめたちのために、その期間は縮められる。選民が患難の間この地にいることを教えるのに、これ以上はっきりした言葉があるであろうか。今の聖化の教師たちが、自分の神学に合わせてこのたとえをねじ曲げるのは、こっけいなことである。聖書を「まともに正面から」見よう。

おとめたちはみな、あかりと入れものと油と光を持っている。一つの点を除けば、どの点でも同じである。その一つとは、油の蓄えである。あかりは心であり、灯心は知性、入れものはからだ、油は聖霊、光は神の愛である。どのあかりも清く、どの光も完全である。このときの光の目的は、ほかの魂を照らすことよりも、患難のやみの中で自分の道を照らすことにある。私たちが自分にとっても、ほかの人々にとっても光となれるのは、ただ知力が聖霊の上に浮かび、神の愛が心に燃えるときである。そのとき神の愛が、私たちを通して聖霊を輝き出させるのである。油は灯心を通して火に自分を与えなければならない。それと同じように、聖霊は私たちの知力を用いて、私たちを通して輝かれなければならない。聖霊は、聖化されたすべての魂の心に住み、その知力を用いておられる。しかし、からだに住まれるのは、御霊のバプテスマを受けた人々だけである。それなら、思慮深いおとめたちと思慮の浅いおとめたちの違いは、こうである。前者は聖霊のバプテスマを受けており、後者は受けていない。

十人のおとめは、花嫁が自分のへやに呼び入れられる前から、おとめ、すなわち聖化された者である。しかし、御霊のバプテスマを受けそこなったので、「残された者たち」の中にいる。彼女たちは、自分が花嫁の一員から外されたことを知って驚く。そして、その事実に大いに目をさまされ、恐れて、すぐにあかりを手にして出て行き、イエスのために生きようとする。忠実であろうと決心し、主と一緒に婚姻の場にはいることを望んでいるのである。そのうちの五人は思慮深い。御霊のバプテスマを受けることを怠ったために、花嫁の一員になりそこなったと知った。そこで今度は、入れものが聖霊に満たされるまでとどまり、それか

ら花婿を迎えに出て行くからである。ほかの五人は思慮が浅い。御霊のバプテスマを受けることを怠ったために、花嫁の一員になりそこなったと知ってはいる。それなのに、バプテスマなしでも主と一緒に婚姻の場にはいれると信じているからである。だから彼女たちは、あかりは持って行くが、あかりと一緒に入れものに油を用意して行かない。

花婿の来るのがおくれる。患難は暗さを増す。彼女たちはみな居眠りをして、寝てしまう。これは文字どおりの眠りではなく、働きをやめることを指している。なぜ眠るのか。ほかにできることがないからである。神のさばきが世に下っている。今は、働く必要がない。『夜が来る。すると、だれも働けなくなる』（ヨハネ九・四）。神のさばきが人の心を動かさないなら、ほかの何ものも動かすことはできない。『夜中に』（患難が頂点に達したときに）『「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と呼ぶ声がした』。

黙示録に出てくるさまざまな群れを学ぶなら、私たちの教えがこの書とぴったり一致していることがわかるであろう。四章では、花嫁と、おそらくは付き添いの群れが、花嫁のへやに迎え入れられるのが見える。また聖徒たちが、「獣」すなわち生き物として、また「長老」として、それぞれの座に着くのが見える。この二つの群れは、この書の全体を通して、はっきりと分かれたままである。それから大患難が始まる。その間に、いくつかの群れが上って行って、御座のまわりの一団に加わる（黙示録六・九、七・九～一七、一四・一～五、一三～一六）。最後の怒りの鉢が空中に傾けられると、『大きな声が聖所の中から出て、「事はすでに成った」と言った』（黙示録一六・一七）。その少し前に、イエスは『見よ、わたしは盗人のように来る』と言われる（一五節）。主はここで、どういう意味で盗人のように来られるのか。今は夜中である。患難は頂点に達しようとしており、おとめたちは居眠りをしている。これは、彼女たちに、目をさまし、気をつけて、祈るようにという呼びかけなのである。『裸のままで歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身に着けている者は、さいわいである』。

『そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれあかりを整えた』。

「ユダヤ人の手に持つあかりはごく小さく、油の蓄えは何時間ももたなかった。祝いの席で使うあかりは、それよりも大きかったであろう。しかし、それでも夜遅くまで灯し続けるなら、油を補わなければならなかった。だから『整える』とは、灯心のまわりにたまって詰まらせているものを取り除くことだけを意味するのではなかった。新しい油を注ぎ入れることも意味していた。灯心のまわりにたまったかすを取り除くための道具もあった。先のとがった小さな道具で、細い鎖であかりそのものから下げてあることが多かった」（チャップマン）。

この風習のすべてが、このたとえについてのこの説明に、なんとよく合うことか。そしてこの説明が、聖書のほかの箇所に、なんとよく合うことか！　この先のとがった小さな道具は、あかりの一部ではなく、あかりに鎖でつながれていて、灯心からかすを取り除くのに使われた。これは聖書に当たる。おとめはみな、聖書を心に結びつけておくべきである。そして毎日、いや一時間ごとに、それを用いるべきである。「居眠りをして、寝て」いる間や、ほかのことに携わっている間に、聖書にそぐわないかすが知性に詰まるかもしれない。それを、聖書で取り除くのである。この十人のおとめは、患難の中を花婿を迎えに出て行くとき、それぞれ必ず聖書を一冊持って行く。きっと、ときどき立ち止まっては聖書を学ぶであろう。すると光はいっそう明るく燃え、主が来られるまで待ち続けようと励まされる。しかし夜中が近づくと、彼女たちはみな居眠りをして、寝てしまう。突然、『見よ、わたしは盗人のように来る』という叫びが聞こえる。彼女たちはみな起きて、聖書をつかみ、そして祈る。思慮深いおとめたちは、あかりにも入れものにも油を持っている。霊も魂もからだも、聖霊に満たされているのである。すぐに、彼女たちの光は明るく燃える。そして、やって来る婚礼の一行の「ハレルヤ」を聞いて（黙示録一九・一～六）、歌い、叫び始める。思慮の浅いおとめたちは、この危急のときに、聖書を見て悟る。自分たちには、花婿と一緒に婚姻の場にはいる用意ができていないのである。やって来る婚礼の一行の「ハレルヤ」を聞き、時が迫っていることを知ると、彼女たちは思慮深いおとめたちのところへ駆けつけて言う。「どうか、私たちに手を置いてください。今すぐ御霊のバプテスマを受けられるように」。『わたしたちのあかりが消えかかっていますから』。「消えてしまった」（欽定訳）という句は誤訳である。しかし思慮

深いおとめたちは答える。「いいえ」。「私たちには、あなたがたに聖霊を与える力はありません」。『わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう』。「あなたがたと一緒に祈っているうちに、私たち自身が残されてしまうかもしれません。私たちは目をさまして、用意していなければなりません。今、残されるわけにはいかないのです。行って、上から聖霊を授けられるまで、自分たちでとどまっていなさい」。そして彼女たちが油を待ち望みに出ているうちに、花婿が着く。用意のできていた者たちは、花婿と一緒に婚姻の場にはいり、そして戸がしめられる。『わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである』（黙示録一九・七）。

思慮の浅いおとめたちは、花嫁が用意をするために自分のへやに呼び入れられる前に、御霊のバプテスマを求めることを怠った。そして花嫁の一員になりそこなったあとも、バプテスマなしで婚姻の場にはいれると、やみくもに思い込んでいた。その彼女たちが、このぎりぎりのときになって、自分のペンテコステを待ち望みに出て行くのである。彼女たちは、御霊を受けるまでは、あえて戻って来ようとはしない。バプテスマを受けたあとで、彼女たちは来て、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください』と言う。つまり、空中の婚姻の場へ引き上げてくださるよう、神に願い求めるのである。しかし花婿は、『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と答える。もし彼女たちが罪人であったなら、主は『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』と言われたであろう（マタイ七・二三）。しかし、そうは言われない。ただ『わたしはあなたがたを知らない』と言われるのである。すなわち、「あなたがたが婚姻の儀式に加わるにふさわしいとは認めない」ということである。

婚姻が終わったあとで、ヨハネは言う。『それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」』（黙示録一九・九）。思慮の浅いおとめたちも、きっと婚宴にははいれるであろう。

こうして私は、十人のおとめのたとえを、私の見るとおりに説明した。あなたは、私と意見が違うかもしれない。しかし、これらの考えをわきに置く前に、正直に、率直に考えてみてほしい。このたとえの言葉をすべて説明できるほかの説明を、私は見つけることができない。ほかの当てはめ方は、どれもどこかで行き詰まる。このたとえの説明で、私は以前の見方に合わせて聖書をねじ曲げたりはしなかった。開かれた心で事実に向き合い、真理を学ぼうと努めたのである。

第十四章　花嫁

これから取り上げる主題の大切さは、どれほど強調しても強調しすぎることはない。アブラハムは、ひとり子イサクの妻を求めるために、しもべエリエゼルを遠い地へ遣わした。それと同じように、神はひとり子イエスの妻を求めるために、聖霊を世に遣わされた。だれが花嫁となるのか。キリストの花嫁の一員となることが、今日、すべての人の魂の意志と選びにゆだねられていることは、聖書から明らかである。しかし同じく聖書から明らかなように、私たちが必要な備えをしなければ、決してその一員となることはできない。だから、私たちがキリストの花嫁と定められるにはどんな資格が必要か。これは、私たちが最も心にかけるべき問いであるはずだ。救われた人はみな花嫁の一員である。私たちはこの世ですでにキリストと結婚している。こうした一般の考えは、聖書に基づいていない。この主題についての人々の説はじつにさまざまであり、私たちの立場は敵から激しく攻撃されるであろう。だから、ゆっくり進み、私たちが取る一つ一つの立場に聖書の土台を示したい。このきわめて大切な主題を正しく考えられるよう、神が助けてくださるように。

多くの箇所から、すべての聖徒が同じ報いを受けるのではないことがわかる。主はある者には『十の町を支配させる』と言い、ほかの者には『では、あなたは五つの町のかしらになれ』と言われる（ルカ一九・一七、一九）。『各自はそれぞれの順序に従わねばならない』。『この星とあの星との間に、栄光の差がある。死人の復活も、また同様である』（第一コリント一五・二三、四一、四二）。黙示録二章と三章には、「勝利を得る者」に約束された七つの異なる報いがある（黙示録二・七、一一、一七、二六、三・五、一二、二一）。『わたしたちの神のために、わたしたちを王とし、祭司となさいました』（黙示録五・一〇）。ほかの箇所は、先へ進むにつれて挙げていく。

キリストの変貌は、その再臨のひな型である。これを注意深く学ぶなら、この主題に多くの光が当てられるであろう。このときイエスがまわりに集められた人々は、再臨のときに主のもとに集められる聖徒たちの群れの見本であった。イエスは、十二使徒と大ぜいの弟子たちの中から、ただ三人だけを選んで、ご自分の威光の目撃者とされた。モーセは、主の来臨のときに死人の中からよみがえらされる人々を代表して来る。エリヤは、死を通らずに携挙され、栄光を受ける人々を代表して来る。モーセとエリヤが、ほかの者たちよりもイエスに近い関係にあることは、たやすくわかる。一方、ペテロとヤコブとヨハネが主の変貌を目撃している間、弟子たちの大部分は山のふもとにいる。ここから、聖徒には少なくとも三つの序列があることがわかる。主と結び合わされる者、その光景を目撃する者、そして山のふもとにいる者である。

『それとも、兄弟たちよ。あなたがたは知らないのか。わたしは律法を知っている人々に語るのであるが、律法は人をその生きている期間だけ支配するものである。すなわち、夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって彼につながれている。しかし、夫が死ねば、夫の律法から解放される。であるから、夫の生存中に他の男に行けば、その女は淫婦と呼ばれるが、もし夫が死ねば、その律法から解かれるので、他の男に行っても、淫婦とはならない。わたしの兄弟たちよ。このように、あなたがたも、キリストのからだをとおして、律法に対して死んだのである。それは、あなたがたが他の人、すなわち、死人の中からよみがえられたかたのものとなり、こうして、わたしたちが神のために実を結ぶに至るためなのである』（ローマ七・一～四）。

ここでの夫は、ある人々が考えるように律法を表しているのではない。夫は律法の下にあって、律法に縛られている。そして、妻を律法の下につなぎとめているものなのである。夫は「古い人」であり、妻は「新しい人」である。肉の思いがそこにある間は、霊の思いは律法によって肉の思いにつながれている。古い人が死ぬまでは、私たちは決して主の花嫁にはなれず、主の花嫁と定められることもない。それは霊的な姦淫になるからである。古い人が死んでも、それで私たち

がイエスと結婚するのではなく、主の花嫁としるしづけられるのでもない。ただ律法の束縛から解き放たれ、望むなら他の人と結婚できる自由な身になるだけである。夫に死なれた女は、望むならひとり身のままでいてもよい。古い人が死んだあとで、すなわち聖化のあとで、キリストと聖徒の間の本当の求愛が始まる。その聖徒が御霊のあらゆる求愛に従うなら、キリストはその人に「証印」を授けてくださる。それは婚約指輪であり、ほかでもない聖霊のバプテスマである（エペソ一・一三、一四）。男は、愛するおとめに自分のほうから先に愛を打ち明けるものとされている。それと同じように、神の御子は、心を清められた聖徒に求愛を始められる。義とされた人が、キリストの愛が自分の心の愛のひもを引くのを決して感じない、と言うのではない。しかし本当の求愛と結婚の申し込みは、古い人が死んだあとで始まるのである。雅歌は恋文である。そこには、婚約が結ばれたあとのキリストとその花嫁の互いの愛が描かれている。おとめは、愛する人に「はい」と答えたその瞬間に、自分が婚約したことを知る。それと同じように私たちも、キリストの花嫁になろうと心から決めたその瞬間を知るのである。私たちの神は、ねたむ神である。私たちが主の花嫁になることを承知すると、主は私たちにご自分のしるしを付けたいと望まれる。私たちに会うすべての人が、私たちを取り分けられた者、『選びの民』と認めるためである（テトス二・一四）。花嫁になりたいと思う人は多い。しかし、指輪をはめたいとは思わないのである。指輪を受け取って、ふくさに包み、ポケットに入れたり、ふところにしまったりすることはいとわない。しかし、それが人目につくのはいやなのである。「主よ、それを私にください。でも、ひとりのときだけ見ることにさせてください。ほかの人には見せないでください。見せても、その人たちのためにはなりませんから」。兄弟よ、あなたは花嫁の一員になりたいか。古い人を殺し、キリストに「はい」と答え、証印を受けなさい。はめている指輪によって、あなたが婚約していることを世に知らせなさい。「ええ、証印なら持っていますよ。ただ、あかしをして、婚約していることを人々に知らせているだけです」。たとえば、私があなたに一通の書類を持って来たとしよう。その書類の確かさに、あなたのいのちがかかっている。あなたはその証書に目を通すが、知事の印が見当たらない。そこで、なぜ押されていないのかと心配して尋ねる。私は、印は押してあるが目に見えないのだ、と答える。これで、あなたは満足するであろうか。ところが、目に見える証拠が何もないのに、自分は御霊の証印を持っていると思っている人が、じつに多いのである。

兄弟よ、御子の花嫁になるようにという神の召しは、これまで私たちに与えられた中で最高の栄誉である。あなたは、この招きに無関心でいるのか。それとも、キリストの花嫁になることを、小さなことだと思うのか。その日のために自分を備えることを、子供の遊びくらいにしか考えていないのか。ただ言い表すだけでも、教会の会員であるだけでも、婚姻への備えにはならない。罪の赦しも清めも、あなたを花嫁と定めはしない。あなたは『神に満ちているもののすべてをもって』満たされなければならない。それは、ペンテコステの完全なバプテスマにほかならない。

『さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ』（イザヤ二六・二〇）。神のラッパが鳴りひびくとき、花嫁は自分のへやに取り去られる。おそらく、花嫁に仕えるおとめたちの多くも一緒に行くであろう。『王妃は六十人、そばめは八十人、また数しれぬおとめがいる。わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ。おとめたちは彼女を見て、さいわいな者ととなえ、王妃たち、そばめたちもまた、彼女を見て、ほめた』（雅歌六・八、九）。ついに小羊の婚姻の時がくると、『花嫁はその用意をした』と告げられる（黙示録一九・七）。これは、この世での備え、すなわち義認、聖化、御霊のバプテスマなどを指しているのではないようだ。むしろ、礼服を着ることと同じたぐいの何かを指していると思われる。王子の婚宴のたとえでは、この礼服がたいへん重んじられている（マタイ二二・一～一四）。それで、イザヤ書六一章一〇節にはこう言われている。『わたしは主を大いに喜び、わが魂はわが神を楽しむ。主がわたしに救の衣を着せ、義の上衣をまとわせて、花婿が冠をいただき、花嫁が宝玉をもって飾るようにされたからである』。神の聖徒たちの『死ぬべきものがいのちにのまれてしまう』とき、彼らがどんな壮大な働きへと導き入れられるのか、だれが知っていよう。聖徒たちはそのとき、永遠の境遇にふさわしい関係と位とに就けられる。それに伴って彼らの前に控えている崇高な出来事と儀式のために、

どんな備えに追われることになるのか。それも、だれが知っていよう。花嫁はすっかり装いを整え、飾られたあとで、婚姻の場へと連れ出される。

「詩篇四五篇は、まぎれもなくこの主題に触れている。そこには、象牙の殿から出て来られた王の資質とわざが、力強く生き生きと描かれている。しかしそこには、王妃、すなわち王の花嫁もいる。オフルの金を飾って王の右に立ち、『殿のうちで栄えをきわめ』ている。王妃については、『彼女は縫い取りした衣を着て王のもとに導かれ』ると言われている。しかし王妃、すなわち王の花嫁のほかに、もう一つの祝福された群れがある。この人々もまた喜びをもって王の宮殿にはいり、王の御顔の光にあずかるのである。彼らは『おとめら』、『供びと』、すなわち王妃の仲間、親しい友と呼ばれている。しかし、王妃その人とははっきり区別されている。彼らは、王妃が連れて行かれるときには一緒に行かない。『彼女に従って』、すなわち彼女のあとから来て、のちに『王のもとに導かれ』る。それも、王妃であり花嫁である者とはまったく別の立場においてである。彼らはみな、救われた者たち全体の会衆に属している。みな、主である王のもとで、とこしえに幸いな者とされる。しかし王妃は一つの部類であり、『彼女に従うその供びとなるおとめら』は、もう一つの部類なのである」（サイス）。

ちょうどこのところで、五人の思慮深いおとめたちが婚礼の行列に加わる。聖徒たちに与えられる分け前には、大きな違いがある。天国には、最も大いなる者もいれば、最も小さい者もいる。先になる者もいれば、あとになる者もいる。冠を受ける者もいれば、受けない者もいる（黙示録四・四、七・九～一七）。

「そのうえ、王女や王妃には、とりわけ婚礼のときには、いつも仲間、連れ、侍女、付き添い、従者、友人がいる。彼らは、大まかには王女や王妃と一つの同じ一行に数えられる。しかし実際には、誉れと特権において、自分たちが喜んで仕える相手とははっきり区別されている。花婿はひとりで来るのではなく、付き添いや連れ、また喜びにあふれた人々の長い列を伴って来る。彼らが花婿の一行をなしている。そのすべてをひっくるめて、花婿が来ると言われる。しかし厳密に言えば、花婿と、花婿と共にいる者たちとの間には大きな違いがある。花嫁の側も同じである。花嫁にも、連れや付き添いがいる。『彼女に従うおとめら』である。彼らが花嫁の一行と行列をなしている。花婿は花嫁をめとりに来るとき、彼らとも近く親しい関係にはいる。彼らは花嫁の誉れに、幸いなほど豊かにあずかる。だから大まかに言えば、花嫁について語るときには彼らも含めなければならない。もっとも厳密に言えば、彼らのすべてが花嫁なのではない。花嫁には、ただ彼女だけのものである花婿との関係がある。救われた神の教会の全体が小羊の妻とみなされるのは、ただ花嫁のゆえであり、彼らが花嫁と結びつき、共にいるからである。彼らが実際に花嫁だからではない」（サイス博士）。

では、婚姻はどこで行われるのか。その答えは、どこにも示されていない。おそらく、新しいエルサレムで行われるのであろう。イエスがご自分の民のために備えに行かれた都である。ここには、この都について語る紙面がない。黙示録二一章を自分で読んでほしい。『彼がその測りざおで都を測ると、一万二千丁（千五百マイル）であった。長さと幅と高さとは、いずれも同じである』。できれば、新しいエルサレムについてのサイス博士の講義を読んでほしい。ここでは、博士の短い描写を紹介しよう。

「それは新しい都である。かつて一度も現れたことのない都である。ほかのすべての都は、この都をおぼろげに前もって示すものにすぎない。この都と比べれば、今あるすべての都は、人の心からも記憶からも消え去ってしまう。この都は、材料も、大きさも、場所も、様式も、永続することも、道徳の清さも、またこの都を特徴づけるすべての点で新しい。天で建てられ、土台にも城壁にも大通りにも宝石がちりばめられている。魅力あるもの、美しいもののすべてにおいて完全であり、『夫のために着飾った花嫁のように』整えられている。その輝きで諸国民を照らし、都そのものは神と小羊の栄光によって常に輝いている。これこそ真の『永遠の都』、代々の不死の王たちの朽ちることのない宮殿である」。

小羊の婚姻が行われるのは、おそらく、この汚れのない、清い、聖なる都の中であろう。婚姻にどんなことが含まれるのか、私たちは知らない。どこにも告げられていないのである。ヨハネは御霊に感じたとき、婚姻を見なかった。また、それを説明されることもなかった。ただ、婚姻の時がきて、花嫁がその用意をしたことを喜ぶ天の歓声を聞いただけである。『彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである』（黙示録一九・八）。このような聖句を読んでいると、目の前に一つの光景が浮

かんでくる。その輪郭だけでも伝えようとすると、言葉が足りず、あきらめるほかない。自分で読み、思い巡らし、考えてほしい。

『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』（第一コリント二・九）。多くの人は、これを聖化のことだと考える。御霊のバプテスマのことだと考える人もいる。私には、そのどちらを指しているようにも見えない。むしろ、今考えている主題と、そのあとに続く多くの天の光景を指していると思う。次の節を聞きなさい。『そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである』。婚姻について、何かを知りたいか。自分のペンテコステを受けて、御霊が語られるのを聞きなさい。ほかの人々が御霊の力のもとで語った多くのことを、主は私に悟らせてくださった。それらは、私には英語に言い表すことのできないことであった（第一コリント二・一三を参照）。

花嫁は、用意をするために自分のへやに呼び入れられる。そのとき一緒にはいる付き添いがいれば、その者たちも共にはいる。ほかの多くの人々も大患難から上って来て、花嫁のへやにはいる。婚礼の一行におとめたちが加わり、みなが婚姻の場にはいる。そして、長く待ち望まれてきた盛大な婚姻の儀式が行われる。それがすべて済むと、次は祝宴の広間にはいる順番である。多くの人は、聖書にも道理にも反して、婚姻と婚宴とを一つの同じものとみなしている。婚姻とは、関係と身分を定めることである。婚宴とは、それに列する人々が飲み食いして元気づき、みなで交わりの喜びを味わうことである。婚姻が済むと、花嫁と花婿は招かれて祝宴の広間へ進む。花婿は食卓の上座に着かれ、その右には新たにめとった花嫁が立つ。花嫁はオフルの金を飾り、縫い取りした衣を着ている。『わが愛する者の若人たちの中にあるのは、林の木の中にりんごの木があるようです。わたしは大きな喜びをもって、彼の陰にすわった。彼の与える実はわたしの口に甘かった。彼はわたしを酒宴の家に連れて行った。わたしの上にひるがえる彼の旗は愛であった。干ぶどうをもって、わたしに力をつけ、りんごをもって、わたしに元気をつけてください。わたしは愛のために病みわずらっているのです』（雅歌二・三〜五）。それから、この宴への招きが出される。人が受ける最後の招きである。『小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである』（黙示録一九・九）。こうして王と王妃が席に着いたあとで、客たちがやって来る。婚姻の場にいた人々、墓から出て来た大ぜいの聖徒たち、そして大患難から上って来る人々である。私は、あらゆる時代、あらゆる地、あらゆる言葉のすべての聖徒が、この席に連なると信じる。聖書のいたるところに、この宴のことが書かれている。これは、すべての聖徒が共に加わる最初の盛大な祝いである。アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、エリヤ、ダニエルもそこにいる。約束された女のすえのことを聞いて、そのかたを信じた人々もいる。彼らは神の召しと約束に耳を傾け、魂と旅路の歩みをあの祝福された都へ向けてきた。こうした人々がみな、花嫁としてであれ客としてであれ、そこにいるのである。このとき、「点呼がとられる」のかもしれない。あなたはそこにいるだろうか。私はどうか。私はそこにいたい。そこにいることを期待している。そこにいるつもりだ。そして神の恵みによって、必ずそこにいる。

宴のあとで、イエスは花嫁と客たちと共に、白い馬に乗って天から下って来られる。イエスはサタンを捕えて、底知れぬ所につないでおかれる。それから、エルサレムに御座を据え、聖徒たちと共に世界をさばき、千年の間治め、支配される。千年期のあとで、すべてのものが新しくされる。新しいエルサレムが下って来て、地の上にかかる。この都は花嫁の住まい、すなわち宮殿である。そして新しくされた地は、とこしえに花嫁の王国となる。『柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう』（マタイ五・五）。『わたしたちの神のために、わたしたちを王とし、祭司となさいました。わたしたちは地上を支配するに至るでしょう』（黙示録五・一〇）。

第十五章　声を合わせた叫び

『御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」』（黙示録二二・一七）。

この本で私たちは、御霊と花嫁の間にある関係を、聖書の立場から学ぼうと努めてきた。私たちがキリストの花嫁と定められるために必要な、心の中での御霊の働きに目を留めてきた。また、それぞれの働きには聖書にかなった現れが伴うという事実に、特に注意を促してきた。私たち一人一人の救いに関するかぎり、聖霊のバプテスマは証印であり、御霊の働きの壮大な頂点であることを見てきた。そして、これによって私たちが主の花嫁としるしづけられることも見てきた。「証印」には、それと切り離せない、まぎれもない聖書にかなった現れが伴っている。だから、正直な心が長く欺かれることはありえない。このことも見てきた。バプテスマを受ける人がみな異言を語るということを、聖書はどこでも否定していない。また、「賜物」と「現れ」に違いがあることを、聖書ははっきりと示している。聖書はどこでも、人に御霊を消すよう命じてはいない。御霊ご自身が語らせておられるのに、人を通して語られるのをやめさせる。これ以上に御霊を消すことはありえないであろう。聖書の中に、ペンテコステのあとでバプテスマの証拠としてほかの現れが伴った例は、ただの一度も見つからない。しかし、異言の現れによってほかの人々が確信した箇所なら、確かにある。その現れのあった人々が自分のペンテコステを受けた、という事実を確信したのである（使徒一〇・四四～四六）。ペテロについてコルネリオの家に来た人たちは、『異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた』。コルネリオとその家の者たちが聖霊を受けたことを、彼らはどうして知ったのか。『それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである』。この人たちは、確かに異言の現れをペンテコステの証拠とみなしたのである。もし彼らが間違っていたなら、ペテロが正したであろう。聖霊が与えられたことをだれかに確信させた現れを、ほかに一つでも探そうとしても、むだである。また、御霊の賜物がバプテスマのあとで加えられることも、聖書から見てきた。多くの人が賜物を持っていると主張する。しかし、聖書の基準にははるかに及ばない。タラントやミナは賜物ではなく、賜物は実ではないことも見てきた。神は今日、全世界にご自分の霊を注ぎ、選民の中から御子のために花嫁を選んでおられる。このことにも目を留めてきた。キリストは、ほかの者と結婚している人を、ご自分の花嫁として迎えようとはされない。このことも私たちは見ている。私たちを花嫁としるしづける証印を受けるには、その前に「古い人」が殺されなければならない。そのうえで、私たちの側での決心がなければならない。

イエスは、約束された一つの祝福の大切さを、絶えず弟子たちの前に示された。それを求めて祈ること、その成就を待ち望むこと、自分たちにそれが必要だと悟ることを教えられた。その約束とは、聖霊が来て、いつまでも共にいてくださることであった。御霊と花嫁の関係は、尊く、聖く、いつまでも続くものである。主は、最も強い言葉を使っておられる。『いつまでも』共にいる、『あなたがたのうちにいる』と言われるのである。この言葉は、聞いた人々の心に明らかにこう伝えたはずである。それは、かつて味わったことのない祝福であり、主の地上の生涯のあとでなければ与えられない祝福だ、と。ヨハネがイエスの先駆者であったように、イエスは聖霊の先駆者であられた。ヨハネが自分の弟子たちをイエスのために備えたように、イエスはご自分の弟子たちを聖霊のために備えられた。それなら、ヨハネと使徒たちがこの祝福を重んじるようになったのも、不思議ではない。主の生涯とみわざの結果としてもたらされる、最も大切なものの一つと見たのである。また、私たちの救い主は、この祝福の必要を彼らよりもよく知っておられた。その主が、絶えずこの祝福を彼らの心に刻みつけようとされたのも、不思議ではない。弟子たちは、世が滅びつつある間でさえ、この祝福を求めて祈り、待たなければならなかったのである。

聖霊のバプテスマは、御霊と花嫁の間に永続する関係を打ち立てる。キリストのからだに宿っておられるのと同じ御霊が、私たちのからだに来て宿ってくださ

る。こうして私たちは、主の『骨の骨』、主の『肉の肉』となる。私たちは同じ御霊によって結び合わされ、一つとなる。聖化は私たちを主にあって一つにし、御霊のバプテスマは私たちを主と一つにする。『わたしたちは、キリストのからだの肢体であり、その肉と骨の一部なのである。「それゆえに、人は父母を離れてその妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである」。この奥義は大きい。それは、キリストと教会とをさしている』（エペソ五・三〇～三二）。

『御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」』。この聖句のふつうの説明は、正しいとはとても言えないと私は確信している。御霊と花嫁が共にあげるこの叫びは、救いを求めてキリストのもとへ来るよう、ほかの人々を招く声だと一般に考えられている。私はそのようには理解しない。黙示録全体が、キリストの再臨を指し示している。キリストは助け主を約束して、こう言われた。それは『あなたがたをあらゆる真理に導き』、『きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう』（ヨハネ一六・一三）。御霊は、花嫁のうちで、また花嫁を通して、いつも活発に働いておられる。そして、これらの恵みの働きのすべては、絶えずまっすぐに、きたるべき事に関わっている。それを知らせ、それを信じる信仰を育てるためである。だから、これらの働きのすべてには、こうして知らされた、きたるべき事の成就を絶えず待ち望み、慕い求める思いがある。イエスは言われる。『見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう』（黙示録二二・一二）。それなら、御霊と花嫁が輝く明けの明星に向かって、絶えず呼びかけているのも不思議ではない。約束され、前もって示されたとおりに来て、あの顕現によって大いなるわざを完成してくださるよう呼ぶのである。すべての預言、すべての信仰、すべての望み、そして御霊によって働くあらゆる恵みが、その顕現に関わっている。キリストの来臨によってもたらされる大いなる完成を実現することこそ、神の恵みの精神であり、魂であり、目的そのものなのである。だから、御霊と花嫁が共にあげるこの叫びは、花婿が来られることを絶えず求める呼び声なのである。

この世における神の摂理と現れの大きな時代には、どれもその前に大いなる祈りがあった。洪水の直前にも、ソドムとゴモラが滅ぼされる前にも、そうであった。モーセがイスラエルの人々をエジプトから導き出す前も、バビロン捕囚から帰る前も、イエスがお生まれになる前もそうであった。これらのどの場合にも、この真理の実例が見られる。だから、主が来られる直前にも、天と地にいるすべての聖なる人々が駆り立てられるように思われる。キリストの現れを求めて、激しくとりなし、切に願うようになるのである。

次は、G・D・ワトソン博士の言葉である。

「それは、なんという祈りの時代となることであろうか。天ではあらゆる時代の殉教した聖徒たちが一つの祈りをささげ、地では血で洗われたすべての心が同じ祈りをささげる。天と地でイエスを愛する幾百万、幾千万の人々が、主の来臨を願い求める。父なる神の御座そのものが、天を地に引き下ろそうとするかのように、祈りの金の綱で取り巻かれる。そしてことによると、思いを同じくする無数の御使いたちが、声をそろえて大いなるアーメンを唱えているかもしれない。すべての聖徒の心を合わせたこの祈りに、である。このようなときにこそ、空の沈黙は、『さあ、花婿だ』という鋭く突き刺すような叫びによって破られるのである」。

あなたは、『アァメン、主イエスよ、きたりませ』と言えるか。

付録　聖霊のバプテスマを受け、保つには

筆者は、花嫁との関わりにおける聖霊の働き、現れ、賜物、実を注意深く学んできた。また、聖書の示す資格を挙げてきた。私たちを花嫁と定め、神聖な婚姻の関係に入れ、イエス・キリストと共同の相続人とするのに欠かせない資格である。そのうえで筆者は、御霊のバプテスマを受け、保つ方法を教える章がなければ、この本は不完全であろうと感じている。この本全体を通して筆者は、まぎれもない一つの事実を、読者の心に留めてもらうよう努めてきた。心の清さがバプテスマに先立たなければならないという事実である。しかし、どのようにして受けるのかについては、まだ具体的な教えを示していない。筆者がこの本の構想を立てたとき、この章はある親しい友が書いてくれるものと思っていた。その友は、魂を教えてこの経験へと導くことにかけて、私よりはるかにすぐれている。そのため、この部分は省いてあった。しかし原稿ができあがってみると、今この務めは筆者にもかかっているように思われる。そこで筆者は、次の付録を喜んで差し出す。飢え渇いている魂がこれを読んで助けられ、この本が多く語ってきた祝福された経験にはいることを願っている。そして、地獄のあらゆる力も動かすことのできないほど、みことばの上に堅く立つことを願っている。

聖書の理解が正しくなければならない。砂の上に家を建てる人（マタイ七・二六、二七）とは、こういう人だと私は思う。正しく生きたいと願い、神のために働こうとする。しかし聖書の道を行かないので、その建物は砂の上に建てられている。だから人生の嵐が襲うと、その建物は倒れてしまう。そして『その倒れ方はひどい』のである。こうした例を、私たちはどれほど見てきたことであろう。初代の数世紀以来、教会が受ける最大の試練は、おそらくまだこれから来るのであろう。人々は、聖書の道によって今のリバイバルにはいる必要がある。そうすれば、嵐に耐える経験を得るであろう。聖書の道を行かないかぎり、本当の聖霊のバプテスマを受けることは決してできない。聖書の道を行くには、聖書の根本の教理の理解が正しくなければならない。救いの計画に反する説は、じつに多いのである。御霊のバプテスマを受けるには、その前に、誤った説をどれでも捨てる気にならなければならない。どれほど長くそれを信じ、また説いてきたとしてもである。ここで言っているのは、教会の礼典や、救いに欠かせないものではない教理のことではない。救いとクリスチャンの望みに関わる根本の教理のことである。たとえば、信仰による義認、義認のあとの全き聖化、神癒、死人の復活、キリストの再臨、御霊のバプテスマの証拠などである。人がこれらをすべて理解していなければならない、と言うのではない。しかし、これらの聖書の真理が示されたときには、どれでも受け入れる開かれた心を持っていなければならない。魂のすべての戸と窓が真理に向かって開かれるまで、聖霊は決してはいって来られない。上に挙げた真理について誤った考えを持ったままで、バプテスマを受けることはありうる。しかし、真理と戦っている間は、決して自分のペンテコステを受けることはない。神は、まだ光を与えられていないことまで悟るよう、求めてはおられない。しかし光が与えられたなら、その光の中を歩むよう確かに求められる。私は、異言を語ることが御霊のバプテスマの証拠だと教えている人がいることに気づく前に、自分のペンテコステを受けた。私は、ペンテコステへの備えができる前に、バプテスマを受けていなければならないと思っていた。神はまもなく光を照らしてくださり、私はその中を歩んだ。そうしなかったなら、私は信仰から離れていたであろう。今人々の前に出ているこの問題を知る前に、異言の現れを経験した人々を、私は何人か個人的に知っている。この問題が私たちの間に起こったとき、彼らは否定の側に立った。そして今では、このリバイバルと戦っている。私たちが自分の考えを明け渡し、神に教えていただくようにならないかぎり、神は決してバプテスマを与えてはくださらない。

神との関係が正しくなければならない。聖書の理解が正しいだけでは十分ではない。人は、何の説にもとらわれず、真理に対して開かれているかもしれない。あるいは、聖書の理解がまったく正しいかもしれない。それでも、ペンテコステ

への備えがまったくできていないことがある。あなたの生活がまっすぐでなければならない。悔い改めから始めなければならない。そして、はっきりと回心したあとで、献身し、聖化されなければならない。まったく聖化されなければならない。聖化されていると主張していながら、実はそうでない人が、非常に多い。フリーメーソンに属し、かみたばこをかみ、のんきに構えている説教者や信徒は、何年も聖化されていると主張していられる。しかしペンテコステは、そうたやすく主張できるものではない。そのような説教者のほとんどが、この運動と戦っている。ペンテコステを求める備えができる前に、神に逆らうものをすべて生活から取り除かなければならない。異言の現れによく似た現れを、自分で作り出すこともできる。また、心が清くないうちに、悪魔が現れを与えることもある。しかし、すべての罪から完全にきよめられるまでは、本当のバプテスマを受けることは決してない。

「古い人」の死のあとにも、死がある。クリスチャンの生涯に関わる死の問題は、じつに大きな主題である。人が最終的に死ぬまでに、いつ、どの恵みの段階にはいるのか、私ははっきりとは言えない。義認の前に一つの死があり、聖化の前にもう一つの死がある。罪の問題は、聖化のときにすっかり片づけられる。『苦い根』がすべてなくなったあとにも、自我のいのちが残っている。それが何であるのか、はっきりとは言えない。しかし、それからすっかり解き放たれていることを示した人に、私はまだ一人も会ったことがない。ときどき、それは堕落した状態にある人間性そのものに違いないと思う。恵みのどの段階にも、ほかの人々より多く自我のいのちを表す人がいる。しかし、だれでも御霊のバプテスマを受ける前に、自我に対するある死を通らなければならない。これは罪に対する死ではなく、自我に対する死であることを、心に留めておいてほしい。罪はカルバリで取り除かれなければならないからである。ある人はこう言うかもしれない。「死んでしまえば、それ以上死ぬことはできない」。罪についてはそのとおりである。しかし自我のいのちにはじつに多くの面があるので、私たちは死から死へと通り続けなければならないと、私は確信している。一つの死を通らなければ、祈りで神を動かすことは決してできないと、私は知っている。バプテスマを受けるために、通らなければならない死がある。それがどんなものかは、先へ進むにつれてわかるであろう。

費用を注意深く計算しなければならない。聖霊のバプテスマを受けても、世があなたを少しでも重んじるようになるわけではない。ホーリネス運動の中で偉い人と呼ばれることも、その指導者になることも、望みをすっかり捨てなければならない。この運動には人間の指導者はいないし、必要でもない。多くの人が引っかかるのは、ここである。それでも、イエスについてあかしをするためなら、どこへでも喜んで行く気持ちでいなければならない。バプテスマを受けることは、あなたにとって、こういうことになるかもしれない。どこかの地へ行ってイエスを宣べ伝えながら、多くの人には名も知られずに終わるのである。ホーリネスの人々に見捨てられ、当局に投獄され、ついには断頭台に引かれて行くことを意味するかもしれない。あなたは、その費用を注意深く計算したか。

ただイエスだけを仰ぎ見なければならない。自分の境遇や周りのものから目を離し、身の回りで起こっていることを忘れなければならない。それは、祈りによって、また信仰によってイエスを仰ぎ見ることによってしかできない。ほかの人に頼って通り抜けさせてもらおうとしてはならない。ただイエスだけを仰ぎ見なさい。あなたの知性が神のうちにのみ込まれるまで祈りなさい。この方向に進み始めると、これまで通ったことのない死にはいって行く自分に気づくであろう。イエスを仰ぎ見続けなさい。主があなたを通り抜けさせてくださる。

主を賛美しなければならない。ほかのすべての条件を満たしたあとで、神に賛美をささげなければならない。あなたが本当に義とされ、聖化され、聖書の理解が正しいとしよう。また、自我に対する本当の死を通り、費用を注意深く計算しているとしよう。そして、イエスに目を据え、主だけに信頼しているとしよう。そうであれば、あなたの魂に喜びの泉がわき上がる。喜びがないなら、どこかに問題がある。ごく小さなことでも、喜びを止めてしまう。もう一度、あなたを探ってくださるよう神に願いなさい。ただし、あなたを探るのが悪魔ではなく神であるよう、気をつけなさい。神の声だけが聞こえるようになるまで、祈らなければならない。悪魔のささやきに耳を傾けてはならない。神に受け入れられているというあかしが、きっとあなたの魂に喜びをわき上がらせる。喜びがわき上が

り始めたら、それを賛美にして口に出しなさい。そのときでも、声を出して神を賛美するのは骨の折れることかもしれない。しかし、私たちは『さんびのいけにえ』をささげなければならない（ヘブル一三・一五）。絶えず賛美をささげなさい。どんな形式主義も避け、賛美し続けなさい。決して尻込みせず、御霊が差し出されるどんな現れも受け入れなさい。この点で、多くの人がバプテスマを受けそこなう。どの言語で語るかを、自分で選んではならない。その部分は御霊にお任せしなさい。御霊は、一つの語をあなたに差し出されるかもしれない。それがギリシャ語やラテン語のような響きを持っていないので、あなたは尻込みする。これは御霊を悲しませる。御霊の現れを受け入れなさい。賛美し続けなさい。

これらの指示に従うなら、魂は、自分が神のうちに深く沈んで行くのを感じるであろう。境遇や周りのものは忘れられる。そして、神と共に閉じこもった魂は、バプテスマを与えてくださると神に信頼できるようになる。御霊があなたの舌によってご自分を現されるまで、決してやめてはならない。御霊は、来られるときにあかしをされる。御霊はいつも賛美を通して来られる。しかし、賛美はいちばん最後の段階である。

この経験を得るのに必要なことをざっと見たので、次は、本当の聖霊のバプテスマに何が含まれるのかを考えよう。

『否、むしろ主は異国のくちびると、異国の舌とをもってこの民に語られる。主はさきに彼らに言われた、「これが安息だ、疲れた者に安息を与えよ。これが休息だ」と。しかし彼らは聞こうとはしなかった』（イザヤ二八・一一、一二）。この聖句が、ヨハネ七章三七～三九節のイエスの言葉とつながっていることは、たやすくわかる。『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』。「これ（異国のくちびると、異国の舌）が安息であり、休息である」。（『これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである』）。バプテスマの最初の証拠は、異言の現れである。これには感情の高まりが伴うこともあれば、伴わないこともある。感情を現れと取り違えてはならない。人が大きな喜びに達し、心と口を開いて、その喜びを神への賛美として流れ出させるとしよう。すると流れる喜びは、水路をますます広く洗い広げる。水路が広がるにつれて、神は喜びを絶えず増し加えて、水路を満たし続けてくださる。そしてついに、『その心の奥底から生ける水が川となって流れ出る』ようになる。これが聖霊のバプテスマである。『あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう』（詩篇八一・一〇）。この流れは、絶えることのない流れである。叫びや感情の流れであるとはかぎらない。人格を持たれる聖霊ご自身の流れなのである。流れはもはや魂の中へ流れ込むのではないように思われる。むしろ魂そのものが水源を宿していて、そこから川が四方八方へ流れ出るように思われる。栄光あれ！　聖霊は今、私の魂にあふれておられる！　主をほめたたえよ！　感情がほかのときよりも高まるときもあるであろう。しかし、感情は流れに影響しない。神に感謝しよう！

聖霊は、川となって私たちの心の奥底から流れ出られる。そのとき、霊から直接流れ出られることもあれば、知性やからだから流れ出られることもある。ときには腕を通して流れ出て、ほかの言葉で書くことによってご自分を現される。しかしこれを、ペンテコステの証拠である異言の現れと混同してはならない。ああ、神に感謝しよう！　なんと幸いなことか。

バプテスマを受けたあと、魂は初めて立ち止まって考えるときに気づくであろう。自分が、これまで知らなかった深みにまで、神のうちへ下ろされているのである。もう二度と試練に会わないなどと考えてはならない。魂は今や前よりもよく戦う備えができているので、これまでよりも大きな戦いに会うからである。その栄誉を神に感謝しよう！　戦うとき、それをすべて喜びとすることができる。戦うたびに、以前よりも深いところへ運ばれるであろう。

これが本当のバプテスマである。あなたは聖霊を受けたか。受けたのなら、ふつつかな筆者から、いくつかの勧めの言葉を聞いてほしい。

決して悪魔に耳を傾けてはならない。悪魔は、あなたが自分のバプテスマを疑うように仕向けようとするであろう。バプテスマを受けた人の中には、その後二度と異言の現れを経験しない人もいるかもしれない。異言の現れは、バプテスマと共に必ず来る。しかし、二度と起こらないこともありうる。イエスは、助け主が来るとき、それはあかしをし、そしていつまでも共にいる、と言われる。聖霊

は、ご自分がはいって来られたという事実をあかしされる。そして私たちには、助け主はいつまでも共にいる、というイエスの言葉がある。この点で、悪魔に心を乱されてはならない。私たちがいつも聖霊に従うなら、聖霊はとどまっていてくださる。

『またほかの人には種々の異言』（第一コリント一二・一〇）と訳されたギリシャ語は、ヘテロー・ゲネー・グローッソーン（hetero gene glosson）である。これは文字どおりには「ほかの人には言語の子孫たち、あるいは言語の諸民族」という意味である。「ゲネー」という語は、マタイ一章で動詞の形で何度も使われている語と同じである。そこでは「生んだ」と訳されている。男と女が結び合わされて子孫が生まれるように、「賜物」と聖霊が触れ合わされて、言語の子孫が生み出される。「異言の賜物」は聖霊によって魂に植えられる。それから聖霊がこの「賜物」に働きかけられ、言語が生み出される、すなわち生まれるのである。御霊は、ほかのすべての賜物と同じように、この「賜物」も『思いのままに』分け与えられる。

みことばを読み、多くの時間を祈りに費やしなさい。たくさん祈らなければならない。そうでないと、悪魔があなたをわき道にそらすであろう。日々の仕事をしている間も、絶えず祈る心にはいりなさい。祈ることを教えてくださるよう、神に願いなさい。心をへりくだらせ、へりくだった態度を保ちなさい。自分を何か大切な者であるかのように語ってはならない。いや、そのような思いを心に入れてもならない。そのような思いが浮かんだら、魂の力を尽くしてそれに逆らいなさい。イエスのために働くためなら、どこへでも喜んで行く気持ちでいなさい。そして、主が置いてくださった所で満足しなさい。決して先に立とうとしてはならない。自分の力以上の大きなことをしようとしてもならない。祈りで神を動かすことができないなら、あなたはこの運動で何の役にも立たない。

霊をためすことを学びなさい。肉に従わないよう気をつけなさい。御霊によって感情が高まり始めたのに、肉で終わってしまうことは、たやすく起こる。時間をかけて、御霊が語られるのを聞きなさい。必ず御霊だけに従いなさい。

ほかの人々をバプテスマへと導く方法を教えてくださるよう、神に願いなさい。求道者に、人間的な同情を向けないことを学びなさい。それはいつも御霊の働きを妨げる。手出しをせず、御霊に働いていただくことを学びなさい。ある魂がまさにバプテスマを受けようとしているとき、あなたがその人の頭に指を置くことが、その人をつまずかせるかもしれない。手を置いてよい場合もある。しかし、そうする前に、神があなたを導いておられることを必ず確かめなさい。聖書の中で、聖霊を受けるために使徒たちの手が置かれた例は、二つしかない（使徒八・一七、一九・六）。あなたがなすべき大切なことは、祈り、信じることである。御霊のわざは、御霊ご自身にお任せしなさい。

いつも、すべての栄光を神に帰しなさい。何についても、人をほめてはならない。説教に助けられたなら、神に栄光を帰しなさい。読者がこの本の中に何か助けになるものを見つけたとしても、筆者をほめないでほしい。賞賛は神に帰すべきものである。神から奪ってはならない。どんなときにも、このことを必ず覚えていなさい。

さて、親愛なる読者よ、私はあなたを神にゆだねる。これらの指示に従うことで、大いに助けられるかもしれない。しかし、あらゆる形式主義を避けなければならない。どんなことにおいても、神をある決まった型に押し込めることはできない。結局のところ、最良の勧めはこうである。御霊のうちにはいり、御霊のうちにとどまり、どんな犠牲を払っても御霊に従いなさい。

御霊は、イエスのために花嫁を探しておられる。あなたは御霊に身をゆだね、導かれる所へついて行くか。

今、筆者はこの本をすべての読者と共に神の御手にゆだねる。そして、婚姻の場であなたがたの多くに会えることを望みつつ、別れを告げる。

終わり

御霊と花嫁

2026年11月23日版

著者　G・F・テイラー

制作　藤遥

発行　christian-classics-jp

公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/spirit-and-the-bride/

原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/spirit-and-the-bride

全文を、原文（The Spirit and the Bride）からAIを使って翻訳しました。

訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。